

播但自動車道（5期事業）に伴う

# 薬師前遺跡

## 発掘調査報告書

平成13年度

兵庫県教育委員会

播但自動車道（5期事業）に伴う

やく　し　まえ　い　せき  
**薬師前遺跡**

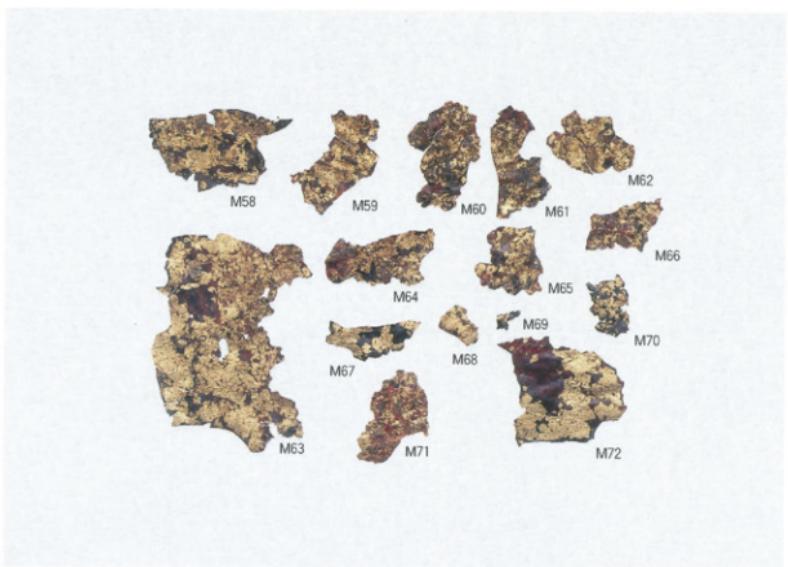
**発掘調査報告書**

平成13年度

兵庫県教育委員会



A・B 地区 全景（西北から）



A 地区 金箔片



C-1区 集石遺構 1 (東から)



C-1区 出土和鏡

## 例　言

1. 本書は朝来郡朝来町元津に所在する薬師前遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は播但連絡道路（5期）事業に伴うもので、兵庫県道路公社播但連絡道路建設事務所の依頼を受けて兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。
3. 発掘調査は確認調査を平成8年度に3回、平成9年度に2回実施し、本発掘調査（当時は全面調査）を平成9年度に2回実施して、薬師前遺跡の当該開発範囲の調査を終了した。
4. 各調査の概要については後述のとおりである。
5. 整理作業は平成12・13年度の2ヵ年にかけて兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。
6. 本文の執筆は甲斐昭光・山上雅弘・仁尾一人・小川弦太・小田賢（現上郡町教育委員会）が、目次のとおりの執筆分担に従って行った。
7. また、本書の編集や製図・遺物実測に関しては嘱託員尾鷲都美子の協力を得て、山上が行った。
8. 本書に使用した図版のうち、遺物分布図については国土地理院発行2万5千分の1地形図「但馬竹田・但馬新井」図則を使用した。遺構については、現地で各調査員・調査補助員が実測した図面を元に作成した。遺物については、整理嘱託員が実測した図面を元に作成した。
9. 発掘調査および報告書作成にあたり、以下の方々に指導・助言を得た。記して感謝の意を表したいと思います。

田畠基・中島雄二・谷本進・後藤玉樹・肥塚隆保・高妻洋成・前田洋子・久保智康・村木二郎



遺跡の位置

## 本文目次

|                          |       |                  |
|--------------------------|-------|------------------|
| 第1章 調査にいたる経緯             | ..... | (山上) ... 1       |
| 第2章 遺跡周辺の環境              | ..... | (小川) ... 3       |
| 第3章 A 地区の調査成果            | ..... | (山上) ... 9       |
| 第1節 地区概要                 |       |                  |
| 第2節 遺構                   |       |                  |
| 第3節 遺物                   |       |                  |
| 第4節 小結                   |       |                  |
| 第4章 B 地区の調査成果            | ..... | (小川) ... 56      |
| 第1節 地区概要                 |       |                  |
| 第2節 遺構                   |       |                  |
| 第3節 遺物                   |       |                  |
| 第4節 小結                   |       |                  |
| 第5章 C 地区の調査成果            |       |                  |
| 第1節 地区概要                 | ..... | (甲斐) ... 99      |
| 第2節 C-1 区                | ..... | (仁尾) ... 99      |
| 第3節 C-2 区                | ..... | (仁尾・小田賢) ... 108 |
| 第4節 C-3 区                | ..... | (甲斐) ... 114     |
| 第5節 小結                   | ..... | (甲斐) ... 120     |
| 第6章 分析・鑑定                |       |                  |
| 第1節 薬師前遺跡から出土した木製品の樹種    | ..... | 121              |
| 第2節 薬師前遺跡出土の和鏡の分析        | ..... | (岡本・仁尾) ... 124  |
| 第3節 薬師前遺跡の経塙内容物に関する脂肪酸分析 | ..... | 126              |
| 第7章 まとめ                  |       |                  |
| 第1節 A 地区の概要              | ..... | (山上) ... 131     |
| 第2節 B 地区の掘立柱建物           | ..... | (小川) ... 133     |
| 第3節 和鏡の検討                | ..... | (仁尾) ... 138     |
| 第4節 元津周辺のこと              | ..... | (山上) ... 141     |

## 表目次

|                            |                            |
|----------------------------|----------------------------|
| 第1表 薬師前遺跡調査一覧              | 第5表 集石および土坑の脂肪酸・ステロール組成(2) |
| 第2表 樹種同定結果                 | 第6表 C20以上の脂肪酸とコレステロールの相關   |
| 第3表 分析試料                   | 第7表 B地区・掘立柱建物一覧            |
| 第4表 集石および土坑の脂肪酸・ステロール組成(1) | 第8表 但馬地域出土の和鏡一覧            |

## 挿図目次

|                        |                  |
|------------------------|------------------|
| 第1図 朝来町の位置             | 第30図 A地区 鉄製品2    |
| 第2図 周辺の遺跡地図            | 第31図 A地区 瓦1      |
| 第3図 調査区周辺のバネルダイヤグラム    | 第32図 A地区 瓦2      |
| 第4図 調査区 位置図            | 第33図 A地区 瓦3      |
| 第5図 A地区 全体図            | 第34図 A地区 瓦4      |
| 第6図 A地区 塙状遺構           | 第35図 A地区 瓦5      |
| 第7図 A地区 塙状遺構断面図・須弥壇石組  | 第36図 A地区 瓦6      |
| 第8図 A地区 SB1            | 第37図 B地区 南壁断面図   |
| 第9図 A地区 SB2            | 第38図 B地区 SB1     |
| 第10図 A地区 塙状遺構第2・3面     | 第39図 B地区 全体図     |
| 第11図 A地区 SB3・4・5       | 第40図 B地区 SB2     |
| 第12図 A地区 薬師堂下層         | 第41図 B地区 SB3・4   |
| 第13図 A地区 SB6・7         | 第42図 B地区 SB5・6・7 |
| 第14図 A地区 SB8・9         | 第43図 B地区 SB8・9   |
| 第15図 A地区 SB10          | 第44図 B地区 SB10    |
| 第16図 A地区 SB11          | 第45図 B地区 SB11    |
| 第17図 A地区 土坑・鍛冶炉        | 第46図 B地区 SB12    |
| 第18図 中世 遺物分類図          | 第47図 B地区 SB13・14 |
| 第19図 A地区 塙状遺構出土遺物1     | 第48図 B地区 SB15    |
| 第20図 A地区 塙状遺構出土遺物2     | 第49図 B地区 SB16・17 |
| 第21図 A地区 塙状遺構出土遺物3     | 第50図 B地区 SB18~20 |
| 第22図 A地区 塙状遺構出土遺物4     | 第51図 B地区 墓1      |
| 第23図 A地区 塙状遺構出土遺物5     | 第52図 B地区 墓2      |
| 第24図 A地区 薬師堂下層出土遺物1    | 第53図 B地区 SK1526  |
| 第25図 A地区 薬師堂下層出土遺物2    | 第54図 B地区 SD1     |
| 第26図 A地区 堂山東麓区出土遺物     | 第55図 B地区 SD2・3   |
| 第27図 A地区 堂山東麓・矢の谷区出土遺物 | 第56図 B地区 SD4     |
| 第28図 A地区 木製品           | 第57図 B地区 SD5     |
| 第29図 A地区 鉄製品1          | 第58図 B地区 焼土      |

|      |       |                |      |                 |                       |
|------|-------|----------------|------|-----------------|-----------------------|
| 第59図 | B 地区  | SK 1・2         | 第79図 | C-1 区           | 集石遺構 1・2 出土鉄器・<br>石製品 |
| 第60図 | B 地区  | SX 1           | 第80図 | C-2 区           | 全体図                   |
| 第61図 | B 地区  | 縄文・弥生土器        | 第81図 | C-2 区           | 土層堆積状況図               |
| 第62図 | B 地区  | 遺構出土遺物 1       | 第82図 | C-2 区           | SB 1・2                |
| 第63図 | B 地区  | 遺構出土遺物 2       | 第83図 | C-2 区           | SB 3                  |
| 第64図 | B 地区  | 遺構出土遺物 3       | 第84図 | C-2 区           | 土坑・溝                  |
| 第65図 | B 地区  | 上層包含層出土遺物 1    | 第85図 | C-2 区           | 出土遺物                  |
| 第66図 | B 地区  | 上層包含層出土遺物 2    | 第86図 | C-3 区           | 全体図                   |
| 第67図 | B 地区  | 下層包含層出土遺物      | 第87図 | C-3 区           | 主要遺構図                 |
| 第68図 | B 地区  | P151 (銭出土状況)   | 第88図 | C-3 区           | 土坑・経筒外容器              |
| 第69図 | B 地区  | P151 出土銭 1     | 第89図 | C-3 区           | 基壇出土遺物                |
| 第70図 | B 地区  | P151 出土銭 2     | 第90図 | C-3 区           | 経筒外容器                 |
| 第71図 | B 地区  | 鉄製品            | 第91図 | 和鏡の分析箇所         |                       |
| 第72図 | B 地区  | 石製品            | 第92図 | 蛍光 X 線定性分析スペクトル |                       |
| 第73図 | C 地区  | C-1・3 間尾根採取遺物  | 第93図 | X 線写真           |                       |
| 第74図 | C-1 区 | 全体図            | 第94図 | B 地区            | 集落の変遷 1               |
| 第75図 | C-1 区 | 集石遺構 1・2 検出状況図 | 第95図 | B 地区            | 集落の変遷 2               |
| 第76図 | C-1 区 | 集石遺構 1・2 完掘状況図 | 第96図 | 「梅樹双鳥文鏡」復元図     |                       |
| 第77図 | C-1 区 | 集石遺構 1 出土と鏡    | 第97図 | 元津の村絵図 (文久 2 年) |                       |
| 第78図 | C-1 区 | 集石遺構 1・2 出土遺物  |      |                 |                       |

## 卷頭図版

図版 1 A・B 地区 全景 (西北から)  
A 地区 金箔片

図版 2 C-1 区 集石遺構 1 (東から)  
C-1 区 出土和鏡

## 写真図版

|      |                   |          |       |                        |
|------|-------------------|----------|-------|------------------------|
| 図版 1 | 遺跡遠景              | (北から)    |       | (東から)                  |
|      |                   | (南から)    | 図版 6  | A・B 地区 全景 (真上から)       |
| 図版 2 | 遺跡全景              | (北東上空から) | 図版 7  | A 地区 全景 (真上から)         |
|      |                   | (西から)    | 図版 8  | A 地区 全景 (南から)          |
| 図版 3 | 遺跡遠景 調査前の遺跡 (北から) |          |       | 薬師堂・壇状遺構全景 (南から)       |
|      | 調査中の遺跡 (北から)      |          | 図版 9  | A 地区壇状遺構 SB 1 上面 (東から) |
|      | 調査区全景 (南から)       |          |       | SB 1 上面 (東から)          |
| 図版 4 | 調査区全景 (北から)       |          | 図版 10 | A 地区壇状遺構               |
|      | (南から)             |          |       | SB 1 上面 (西から)          |
| 図版 5 | 調査区全景 (西から)       |          |       |                        |

|                            |                          |
|----------------------------|--------------------------|
| SB 1 上面（南から）               | 図版21 B 地区 全景（南から）        |
| 図版11 A 地区壇状遺構 SB 1（南から）    | 全景（東から）                  |
| SB 1 須弥壇近景（南東から）           | 図版22 B 地区 全景（北から）        |
| SB 1 須弥壇近景（東から）            | 全景（西から）                  |
| 図版12 A 地区壇状遺構 SB 1 完掘（東から） | 図版23 B 地区 上層全景（北から）      |
| SB 1 完掘（西から）               | 上層全景（南から）                |
| 図版13 A 地区壇状遺構              | 上層全景（南西から）               |
| SB 1 P205（南から）             | 図版24 B 地区 下層全景（北から）      |
| SB 1 瓦質土器壺出土状況（東から）        | 下層全景（南から）                |
| SB 1 炭層断面（東から）             | 下層全景（西から）                |
| 図版14 A 地区壇状遺構              | 図版25 B 地区                |
| SB 1 上面焼土層（北から）            | SB 1・2（4・6区）（東から）        |
| SB 1 上面焼土層（西から）            | SB 3～5（6区）（南から）          |
| SB 1 堀納遺物出土状況（南から）         | SB 6・7（7～9区）（東から）        |
| 図版15 A 地区壇状遺構              | 図版26 B 地区                |
| 第2面検出状況（東から）               | SB 8～10（拡張区）（西から）        |
| 第3面検出状況（北から）               | SB 8～10（拡張区）（北から）        |
| 図版16 A 地区壇状遺構              | SB11（7区）（南から）            |
| 炉245・焼土（西から）               | 図版27 B 地区 SB12（10区）（東から） |
| 炉238・239（南から）              | SB13（3区）（南から）            |
| 炉283（南から）                  | SB14（5区）（西から）            |
| 礎石311（東から）                 | 図版28 B 地区 SB15（6区）（北から）  |
| 炉260（東から）                  | SB16（6区）（南から）            |
| 図版17 A 地区薬師堂下層 全景（北西から）    | SB17（5・拡張区）（西から）         |
| 全景（南から）                    | 図版29 B 地区 SB18（拡張区）（南から） |
| 図版18 A 地区薬師堂下層             | SB19・20（拡張区）（西から）        |
| 土器溜り（南から）                  | 拡張区全景（北から）               |
| P144（東から）                  | 図版30 B 地区 墓1（南から）        |
| SB 7 P49（北から）              | 墓1 完掘状況（南から）             |
| SB 8 磚石（南から）               | 墓1 完掘状況（西から）             |
| 炉117・118（東から）              | 図版31 B 地区 墓2（北から）        |
| SB 6 磚石（東から）               | 墓2（東から）                  |
| 図版19 A 地区堂山東麓 SB10（東から）    | 図版32 B 地区 SX1（東から）       |
| SB10P160（西から）              | SK1526（東から）              |
| SB10P162（西から）              | SK340（東から）               |
| SB10P164（東から）              | 図版33 B 地区 P151出土状況（北から）  |
| 図版20 A 地区矢の谷 全景（東から）       | P151縁錢出土状況（北から）          |
| SB11（東から）                  |                          |

|      |                       |      |                       |
|------|-----------------------|------|-----------------------|
| 図版34 | B 地区 焼土 1 (北から)       | 図版46 | C-2 区 全景 (東から)        |
|      | 焼土 1 断面 (北から)         |      | 全景 (南東から)             |
|      | 焼土 1 完掘状況 (南から)       | 図版47 | C-2 区 土壘状遺構断面(北西から)   |
| 図版35 | B 地区 焼土 2 (北から)       |      | 東側 盛土断面 (南から)         |
|      | 焼土 3 (北から)            |      | 南側 盛土断面 (東から)         |
|      | 焼土 4 (南から)            | 図版48 | C-2 区 SK 1 (南西から)     |
| 図版36 | B 地区 焼土 5 断面 (西から)    |      | SK 3 (西から)            |
|      | 焼土 6 断面 (西から)         |      | P11 (南から)             |
|      | 焼土 8 断面 (西から)         |      | P23 (西から)             |
|      | 焼土 9 断面 (南から)         |      | P27 (西から)             |
|      | 焼土10断面 (北から)          |      | P57 (東から)             |
|      | 焼土11断面 (西から)          |      | P61 (東から)             |
|      | 焼土12断面 (西から)          |      | P80 (東から)             |
| 図版37 | C-1・2 区 全景 (北から)      | 図版49 | C-3 区 調査前の状況 (北東から)   |
|      | C-3 区 全景 (北西から)       |      | 遺構検出状況 (北東から)         |
| 図版38 | C-1 区 調査前の状況 (南西から)   | 図版50 | C-3 区 基壇全景 (南西から)     |
|      | 遺構検出状況 (南西から)         |      | 基壇全景 (北西から)           |
| 図版39 | C-1 区 集石遺構 1 全景 (東から) | 図版51 | C-3 区 基壇近景 (東から)      |
|      | 集石遺構 1 全景 (南東から)      |      | 基壇近景 (西から)            |
|      | 集石遺構 1 近景 (東から)       | 図版52 | C-3 区 基壇近景 (南東から)     |
| 図版40 | C-1 区                 |      | 基壇近景 (西から)            |
|      | 集石遺構 1 遺物出土状況 (東から)   | 図版53 | C-3 区 SK 4 検出状況 (東から) |
|      | 集石遺構 1 遺物出土状況 (北西から)  |      | SK 4 (東から)            |
| 図版41 | C-1 区                 | 図版54 | 薬師堂 (東から)             |
|      | 集石遺構 1 遺物出土状況 (北西から)  |      | 薬師堂本尊 (東から)           |
|      | 集石遺構 1 遺物出土状況 (北西から)  |      | 薬師堂の棟札 (東から)          |
| 図版42 | C-1 区                 |      | 薬師堂脇の石像品 (北から)        |
|      | 集石遺構 2 検出状況 (南西から)    |      | 薬師堂東側の墓地 (東から)        |
|      | 集石遺構 2 遺物出土状況 (南西から)  |      | 矢の谷西脇の墓地 (東から)        |
| 図版43 | C-1 区                 | 図版55 | A 地区 出土土器 1           |
|      | 集石遺構完掘状況 (東から)        | 図版56 | A 地区 出土土器 2           |
|      | 集石遺構完掘状況 (南西から)       | 図版57 | A 地区 出土土器 3           |
| 図版44 | C-1 区                 | 図版58 | A 地区 出土土器 4           |
|      | 集石遺構断ち割り状況 (北西から)     | 図版59 | A 地区 出土土器 5           |
|      | 集石遺構調査後の状況 (南西から)     | 図版60 | A 地区 出土土器 6・瓦 1       |
| 図版45 | C-2 区 調査前の状況 (南東から)   | 図版61 | A 地区 出土土器 7・瓦 2       |
|      | 全景 (南東から)             | 図版62 | A 地区 出土瓦 3            |
|      |                       | 図版63 | A 地区 出土瓦 4            |

図版64 A 地区 出土木製品  
図版65 B 地区 出土土器 1  
図版66 B 地区 出土土器 2  
図版67 B 地区 出土土器 3  
図版68 B 地区 出土土器 4  
図版69 B 地区 出土土器 5  
図版70 B 地区 出土土器 6

図版71 B 地区 出土土器 7  
図版72 B 地区 出土土器 8・石製品  
図版73 B 地区 出土鉄製品  
図版74 B 地区 出土銅錢  
図版75 C 地区 出土土器  
図版76 C 地区 出土鉄製品・銅錢  
図版77 樹種同定

# 第1章 調査の経緯と調査の体制

## 第1節 調査に至る経緯

播磨・但馬間を結ぶ播但連絡道路の北伸事業が進められることとなり、5期事業として生野・和田山間の約17kmの建設が計画された。この計画は、姫路JCTから生野北間の併用区間（姫路～和田山間約65km）を和田山町まで伸ばし、北近畿疊岡自動車道と結ぼうとするものである。

しかし、円山川沿いの地域には多くの遺跡が分布しており、山裾を進む高速道路建設によって破壊される可能性があった。また、路線沿いには国史跡竹田城跡があり、中世以降の山城も多く分布していた。このため工事の実施に先立ち、兵庫県道路公社播但連絡道路建設事務所より埋蔵文化財の分布調査の依頼を受け、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が平成6・7年度に分布調査を実施した。この結果、朝来郡朝来町元津周辺の2地点において集石地形の存在（No.3地点）や遺物採取（No.4地点）の事実があったため、遺跡が存在する可能性が指摘された。このため、遺跡の存否および範囲・様相確認を目的として平成8・9年度に渡って確認調査を実施している。

この一連の確認調査によって、元津周辺で確認されたNo.3・4の2地点は、集落および経塚などの遺構で構成される一連のものであることが判明した。このため、当初2地点として分割して取り扱っていたものを、遺跡の存在が確認された確認調査の時点で蒸鉛前遺跡として一括して呼称することとした。また、分布調査時には樹木伐採などのために存在が不明であった遺跡西側の2地点についても、伐採が終了した時点で遺跡の存在が確認されたため、この部分も遺跡の範囲に含めて本発掘調査（当時、全面調査）の対象とした。調査の概要は第1表のとおりである。

地区名と当初の取り扱いで呼称していた地点との関係は次のとおりである。分布調査で確認されたNo.4地点の範囲が本発掘調査（当時、全面調査）のA・B地区、No.3地点がC-1区、その他、平成9年度に新たに見つかった地区がC-2・C-3区と呼称して調査をおこなった。

本発掘調査は2次に渡っておこなったがA・B地区では重機を用いて表土を掘削した。これに対してC地区は丘陵上という立地上での理由から堆土はすべて人力で行っている。以下の工程はすべて共通している。遺物包含層の掘削や遺構面の検出、遺構の精査は人力で行い、現場を図面・写真などで記録保存した。写真については足場を用い主として遺構単位の検出状況を撮影した。また、全体図の作成や調査区の全景については航空測量（1/50）を適宜実施した。

なお、A・B地区調査時点では学識経験者による現地指導として、立命館大学 青木哲也氏に微地形分析を依頼し有益なご教示を得た。また、地元を対象とした現地説明会を実施した。

発掘調査終了後、平成11年に播但連絡道路が全線開通し現地は道路用地とともに朝来サービスエリアとして供用され変貌を遂げている。

## 第2節 整理作業の経過

出土品の整理作業及び報告書作成は平成12・13年度の2ヵ年にわたって兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。整理作業にあたっては出土遺物の洗浄・及びネーミングは現場作業に平行しておこなった。その後の作業については接合・補強→、実測・拓本→復原→写真撮影の順に進め、遺物実測図・遺構図と共にトレース→レイアウトを行って図面関係を仕上げた。その上で原稿執筆を行い全体の編集→印刷を行って、本書を刊行した。

なお、出土品のうち鉄器については劣化を防ぎ、元の形状を復原するために保存処理を行った。保存処理作業は①形状観察・写真撮影、②脱塩処理、③X線透過試験、④鋸削除、⑤真空樹脂含浸、⑥乾燥、⑦欠損部分を補填、⑧密封乾燥保管の工程で行った。

### 整理作業の体制

整理作業担当職員 甲斐昭光・山上雅弘・仁尾一人・小川弦太

実測・トレース 尾鷲都美子・増田麻子・大前篤子・川村由紀

接合・復原 吉田優子・喜多山好子・石野照代・早川亜紀子・藏幾子・島村順子・大仁克子・小寺恵美子・岡井とし子・蓬莱洋子

鉄器処理作業 和田寿佐子・藤川紀子・三次綾子・野上裕子

第1表 薬師前遺跡調査一覧

| 調査番号   | 種別    | 調査期間  | 調査面積               | 調査担当者             |
|--------|-------|---|--------------------|-------------------|
| 960377 | 確認調査  | 平成8年12月16日～12月17日                             | 72m <sup>2</sup>   | 山上雅弘              |
|        |       | A・B地区の東側里道の確認調査                               |                    |                   |
| 960425 | 確認調査  | 平成9年2月12日～2月14日                               | 143m <sup>2</sup>  | 別府洋二・仁尾一人         |
|        |       | A・B地区を対象とする。本調査のA・B地区をNo.4地点、C-1地区をNo.3地点とした。 |                    |                   |
| 960424 | 確認調査  | 平成9年2月12日～2月14日                               | 21m <sup>2</sup>   | 別府洋二・仁尾一人         |
|        |       | A・B地区的確認調査                                    |                    |                   |
| 970186 | 確認調査  | 平成9年5月22日・5月23日                               | 15.6m <sup>2</sup> | 山上雅弘・三枝修・石松崇      |
|        |       | No.3地点の再確認調査、この調査によって縄塚の可能性が指摘される。            |                    |                   |
| 970187 | 確認調査  | 平成9年5月22日・5月23日                               | 48.0m <sup>2</sup> | 山上雅弘・三枝修・石松崇      |
|        |       | A・B地区的追加確認、およびC-2区の確認調査                       |                    |                   |
| 970169 | 本発掘調査 | 平成9年5月29日～10月24日                              | 5661m <sup>2</sup> | 山上雅弘・三枝修・石松崇・小川弦太 |
|        |       | A・B地区的本発掘調査                                   |                    |                   |
| 970398 | 本発掘調査 | 平成9年12月24日～10年3月13日                           | 959m <sup>2</sup>  | 甲斐昭光・仁尾一人・小田賢     |
|        |       | C地区的本発掘調査                                     |                    |                   |

※本発掘調査は当時の名称では全面調査としていた。

第2章 遺跡周辺の環境

## 第1節 地理的環境

薬師前遺跡は、兵庫県の北部、朝来郡朝来町に所在している。朝来町は、東西18.2km、南北13km、面積130.2km<sup>2</sup>の範囲におよんでおり、南に生野町、東に山東町、北に和田山町（以上、朝来郡）および養父町、西に大屋町（以上、養父郡）および一宮町（宍粟郡）がそれぞれ接している。町内の居住域あるいは農耕地などの生活空間は、町の中心部を北流する円山川やその支流に沿った町域の15%に満たない平野部に限られ、一部には標高1,000m級の山々が連立し、その他のはとんどの地域は標高300m以上の山地が広がっている。

兵庫県では、県の中央やや北側に播但山地と呼ばれる中国山地から續く山地によって、瀬豆

内海へ流れる河川と日本海へ流れる河川とに分かれる。円山川は、朝来町に南接する生野町円山を源流とし、日本海へ流れる但馬地域唯一の一級河川である。このうち朝来町内では、神子畠川、多々良木川、伊由谷川などの小河川が合流する比較的、流れが急な河川である。

調査地の北側は、前述した小河川が入り込んだ複雑な地形がみられるが、調査地周辺は、円山川によって形成されたおよそ200~300m幅の細長い谷底平野が南北に続いている。遺跡は、この細長い平野部を一望できる東向きの尾根の突端部およびその下方に広がる緩傾斜地に立地している。円山川に沿った川筋は、生野町の真弓峠を越えて旧播磨国と旧但馬国を結ぶ最短で主要な道筋にあたり、現在でも道路（国道312号線）と鉄道（JR播但線）が並行して、日々多数の車両が行き交っている。朝来町に北接する和田山町の加都遺跡で発見された、およそ600mに及ぶ律令期の直線道路（「但馬道」）は、播磨国から峠を越え、この地を経由して古代山陽道と古代山陰道を結んでいたと考えられ、この地は古代から現代にわりなく続く交通路の様相を呈している。

また、生野町は、現在では但馬地域に含まれるが、「播磨國風土記」に「所以号生野者、此处在荒神、半殺往来之人。由此号死野。以後、品太天皇、勅云「此為惡名」。改為生野。」とその名がみられ、風土記の時代には播磨國神前郡に属していたようである。このため、朝来町の南端に位置する遺跡周辺は、但馬國の南の玄関口にあたり、瀬戸内海側と日本海側の人やモノが交流する地点であったといえる。



第1図 朝来町の位置

第2節 歷史的環境

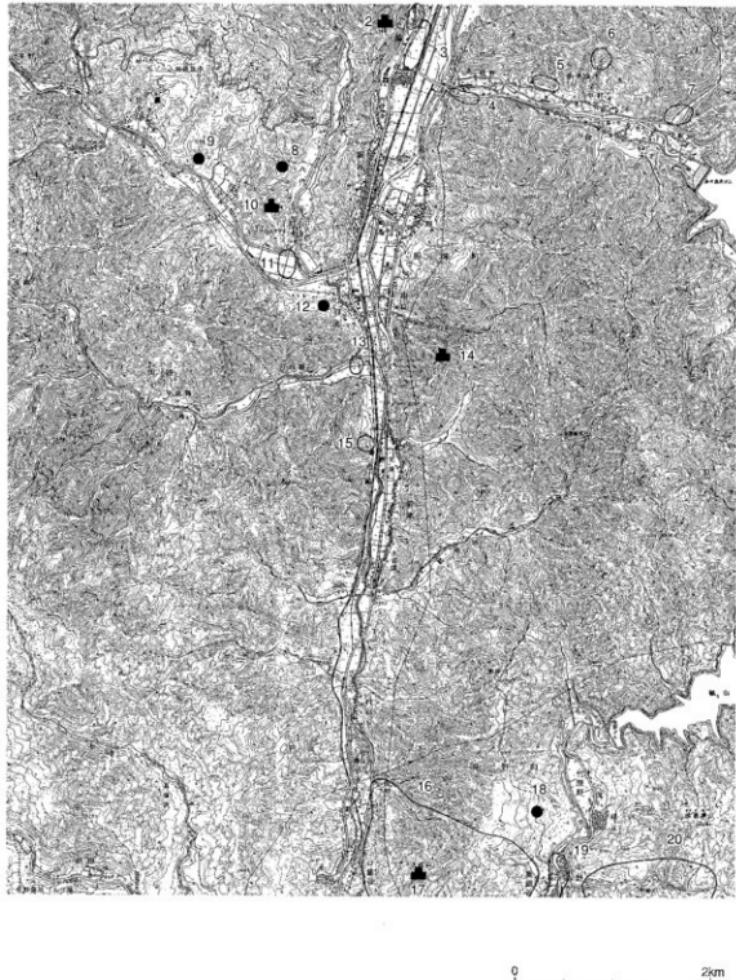
円山川上流域の朝来郡内の遺跡をみてみると、時代によって立地や遺跡の密度が偏っていることに気

づく。これはもちろん分布調査や発掘調査が郡内全域をカバーしていないことや目につきやすい古墳が数多く報告されていることなどによる。このような状況は薬師前遺跡のある朝来町でも同様であり、時代によって遺跡の分布は大きく偏ったものになっている。

朝来郡内においては旧石器時代の遺跡は確認されていない。続く縄文時代の遺跡は和田山町内の高瀬遺跡・方引・殿遺跡などにおいて晩期の遺物が確認されている。しかし、これらの遺跡で縄文晩期に属する遺構の存在は確認されていない。朝来町においても縄文時代に属する遺跡は報告されていなかった。しかし、今回薬師前遺跡から縄文晩期に属する遺物が出土し、今後町内で縄文時代の遺跡が発見される可能性が高まった。

弥生時代になると朝来郡では遺跡の数がふえる。大きく概観してみると、朝来町と同じ円山川が流れる和田山盆地においては高瀬遺跡・片引遺跡・筒江中山墳墓群・加都遺跡・安井遺跡等があげられる。高瀬遺跡・片引遺跡は縄文時代から中世までの複合遺跡として代表的であるが明確な遺構は見つかっていない。加都遺跡においては、薬師前遺跡と同じくして発掘調査が行われ、弥生時代から中世までの遺構が見つかっている。円山川水系にあたり、柴・栗鹿・与布土川が流れる山東盆地では、柿坪遺跡・柿坪中山墳墓群・沖田遺跡などが上げられる。とりわけ柿坪遺跡周辺では近年の高速道路建設に伴う発掘調査によって弥生時代から古墳時代にかけての大規模な集落が見つかっている。周辺の丘陵の発掘調査でも弥生時代末から古墳時代にかけての墳墓群が見つかっており、現在もその調査は継続して行われている。今後の報告書の刊行を待ちたい。このように朝来郡内で弥生時代の遺跡が増加しているなか、朝来町内では弥生時代の遺跡は発見されていなかった。そのため今回薬師前遺跡から弥生時代前期の遺物が発見されたことは注目に値する。

古墳時代になると郡内の遺跡の数は前代までと比較にならないほど増加する。とりわけ、後期に属する群集墳が数の増加をささえており、前期・中期の古墳は相対的に少ないと見える。しかし、和田山盆地を中心とする円山川上流域は、古墳時代前期～中期において但馬を代表する首長墓が造られる地域である。すなわち、和田山町城の山古墳・池田古墳・朝来町船宮古墳などである。城の山古墳は4世紀末に比定される円墳であり、三角縁神獣鏡を含む銅鏡6面・琴柱形石製品など豊富な副葬品を持つ。続く池田古墳・船宮古墳はいずれも埴輪・段築・葺石を持つ前方後円墳であり円筒埴輪を有している。池田古墳は5世紀前半、船宮古墳は5世紀後半の時期が与えられており、畿内政権との強い結びつきが指摘されている古墳である。そしてこれら首長層の墓は和田山町の岡田二号墳・長塚古墳・車塚古墳へと統き、継続した支配の様子を今に伺わせる。和田山盆地に安定した首長層が存在したため近接した朝来町には継続した首長墓は造られない。唯一桑市地区に船宮古墳が造られるのみである。船宮古墳は但馬第二位の規模をもつ前方後円墳であり周辺に前後する首長墓が見られないので、和田山盆地の勢力もしくはその墓域が一時この桑市地区に移動したものと考えられる。このことから朝来町での古墳時代の中心地は桑市地区を西端とした、北は物部地区、東は山内地区、南は新井地区あたりまでの平野部であると考えられ、周囲に集中する古墳の分布がこれを裏付けている。町内において前期古墳と考えられているのが、伊由市場地区の八王子古墳と物部地区のミゾ谷古墳である。続く中期には船宮古墳が代表され、周辺では伊由市場地区の南山古墳群が知られる。後期になると町内各地の谷筋において群集墳が存在する。代表的なものとして、物部地区のカクシ谷古墳群・山内地区的山内古墳群・多々良木地区の和谷古墳群などが挙げられよう。薬師前遺跡周辺では、神子畑川沿いにある白鹿古墳が存在するが詳しい時期は不明である。



第2図 周辺の遺跡地図

歴史時代の遺跡は今だ数が知られてなく、発掘調査が行われた例も少ない。しかし、近年の発掘調査によってその性格が徐々に知られるようになっている。立脇地区にある立脇廃寺では古代の瓦が出土しており、その文様から7世紀末から8世紀初頭の年代が与えられている。同じ立脇地区にある釣坂遺跡では、平成9年度の発掘調査によって8世紀後半から9世紀の掘立柱建物跡や、14世紀から15世紀の堅穴住居が見つかっている。また釣坂遺跡福本地区の旧河道からは須恵器や土師器、人形、煮串などが出土し、8世紀から11世紀の時期が与えられている。このように桑市地区に隣接する立脇地区において古代寺院や集落遺跡が集中していることは、船宮古墳築造以降も有力な勢力がこの地域に存在したことを示している。その他にはビシャモン谷遺跡で平安時代の土師器焼成遺構が確認されている。しかし、薬師前遺跡周辺ではこの時期に該当する遺跡は発見されていない。

中世になると朝来町は但馬の玄関口としての性格を色濃くする。町内を通る街道は牛野峠をへて播磨と但馬を結ぶ重要な交通路として発達し、1542年（天文11年）には生野銀山が発見されるなど経済的にも重要な地域となる。また、但馬山名氏と播磨赤松氏の長年にわたる宿敵関係の結果、国境地帯となつた朝来町の各地には戦略上多くの山城が築かれるのである。それら山城を南から挙げてみると、生野町生野城跡・朝来町岩州城跡・山本城跡・立脇城跡・山内城跡・木之内城跡・物部城跡、そして和田山町の竹田城跡などである。生野城跡は山名氏にとって戦略上ゆるがせにできない地点として1427年（応永34年）までには築城され、山名祐豊に代表される山名氏の居城として、また銀山掌握の城として使われるのである。そして、1569年（永禄12年）銀山を手中に納めるべく但馬攻めを行った織田信長によって攻略される。朝来町内に点在する山城はいずれも竹田城に関連する山城と考えられ、1577年（天正5年）と1580年（天正8年）に羽柴秀長が但馬を攻めたときに竹田城とともにその命運も尽きたと考えられる。竹田城跡は、山名氏の有力家臣である太田垣氏の居城として知られ、丹波、播磨から但馬への進入路となる要衝の地に築かれている。現在でもその遺構は良好な姿で残っており、全国屈指の山城として有名である。このように中世段階において朝来町では街道の発達と銀山の開発があいまって、人々の往来が活発になったと考えられる。それを示すように、薬師前遺跡周辺の朝来町南部において当時期の遺跡が発見されている。田路地区的法野遺跡、羽瀬地区的広田遺跡はいずれも散布地であるが中世段階の遺物が発見されている。羽瀬地区では谷の上経塚が知られており、経筒の破片、経文が発見されている。

## 主要参考文献

- 朝来町教育委員会 1977『朝来町歴史探訪 一朝来町史上巻一』  
兵庫県教育委員会 1982『兵庫県の中世城館・古墳遺跡』  
樋本誠一・瀬戸谷晴 1982『日本の古代遺跡2 兵庫北部』  
朝来町教育委員会 1990『船宮古墳』  
和田山町教育委員会 1994『但馬・和田山 史跡と山川城跡』  
植垣節也 1997新編日本古典文学全集5『風土記』  
平凡社 1999『兵庫県の地名』日本歴史地名大系第29巻I

### 第3節 遺跡の周辺の環境

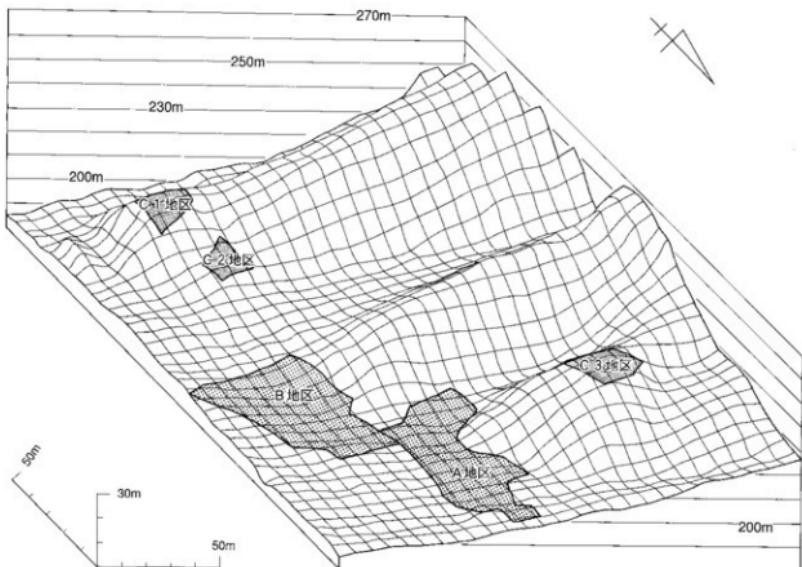
前述のとおり、遺跡の立地する谷筋は、古くから播磨と但馬を繋ぐ往還に利用されたことが知られ、街道は南側の円山地区からは越えて生野にぬけている。さらに生野からは真弓峠を越えて播磨の神崎町に至っており、古くからこの街道は重視されてきた。16世紀に開発された生野銀山の重要性もあって、付近は中世末期～近世・近代にかけて鉱山で賑わった。なお、現在の村は明治初期に南の岩屋観音村と合併し行政上は岩津と称している。

しかし、文久2年（1862年）、幕末の村絵図によれば当村は津村子村と称しており、合併後に元の津村という意味から元津と称したという。現在でも南の岩屋観音村と当村を分けて呼ぶ意識が強く、バス停留所にも元津の名を残している。

遺跡周辺の地形は円山川最上流域西岸の山麓緩斜面（麓面）に位置する。緩斜面は山麓に発達する支流性の扇状地形を成すが、成り立ちは遺跡西側の山地を開析する3本の支谷から搬出された土石流によっている。

薬師前遺跡の場所は、現在では円山川の対岸に集落を持つ元津の地内にある。

今回の調査は字「屋敷」と北側の字「薬師前」の2地区とこの北背後に位置するC地区的調査を行った。A地区は丘陵裾の比較的大らかな地形に位置し、B地区はこの北側で丘陵裾の傾斜面に位置する範囲である。C地区はこの2地区に張り出して延びる尾根周辺に位置する。いずれの地区からも中世前半の遺構が検出され、調査によって一連の集落ないし寺院遺跡であることが判っている。



第3図 調査区周辺のパネルダイヤグラム



第4図 調査区 位置図

# 第3章 A地区の調査成果

## 第1節 地区概要

A地区は薬師前遺跡の北端、C-3区(堂山)の山裾部にあたる。調査面積2,708m<sup>2</sup>を測り、標高178m～187mの範囲に立地する。地区内はC-3区の南北裾を下る埋没谷の面上と北側の小規模な丘陵地からなる。埋没谷は地区南端で合流し、円山川の河道に向けて下っている。北側の丘陵地は西側の山塊から下る尾根の末端で、東側に向けて傾斜し、調査区近辺では緩斜面となる。

A地区では12世紀末～13世紀代を中心とする集落および寺院関係の遺構を検出した。検出された遺構は礎石建物4棟、掘立柱建物7棟、焼土混じり土坑、鍛冶炉などがある。この他、遺物のみの出土にとどまつたが古代の土器や軒丸瓦を含む瓦片が出土していることも注目される。

当地区で遺構が検出される箇所は次の4箇所である。①現薬師堂の南側、壇上遺構が検出された地点(壇状遺構区)、②現薬師堂の下層(薬師堂下層区)、③C-3区東麓の埋没谷上(堂山東麓区)、④南端の字「矢の谷」周辺(矢の谷区)の4箇所である。

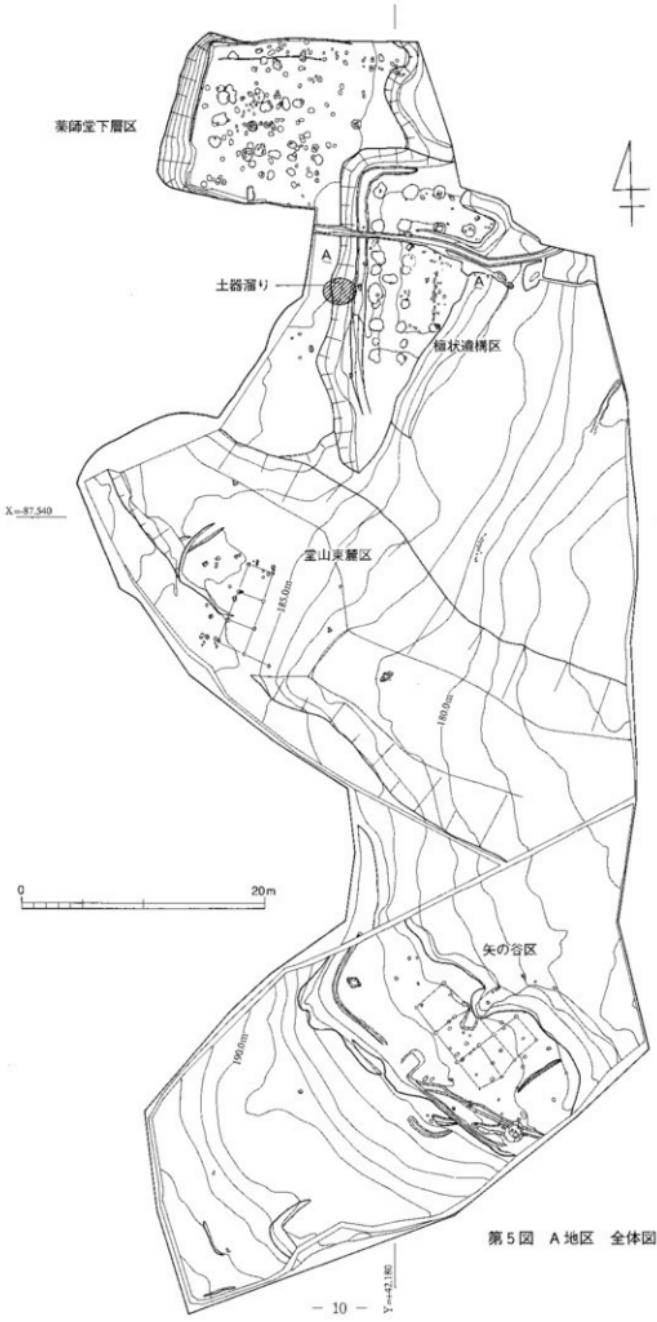
## 第2節 遺構

### 1. 壇状遺構区

壇状遺構は大部分で南北18m、東西11m、広さ150m<sup>2</sup>以上(いずれも検出面積)の規模を有する造成段である。この遺構の最終時期に石積などを用いて基壇の造成を行っていることから“壇状遺構”と呼称した。西側の山塊から派生した尾根末端の緩斜面に平坦地を造成して作り、数回に渡って造成面上に建物を建てる。当初の建物は掘立柱建物構造であるが、最後の2回は礎石建物となる。また、建物が建て替える度に盛土が行われており、この盛土を縦層に合計3面の遺構面が観察される。さらに、この遺構は最上層面の廃絶後に盛土が行われ、北西に隣接する薬師堂下層の造成段と同一面となっている。この面を合わせると遺構面は合計4面が確認できる。この他、第3面からは古代の瓦を出土したSK300が検出されている。この遺構は明らかに古代に埋没した遺構であるが、中世になって造成のために上半を削平されて検出されたものである。以下、面ごとに説明を行う。(各面の変遷は第6・10図参照)

#### 第0面

最上層、壇状遺構埋没後の遺構面である。盛土面上は平坦面となっていたようであるが、面上には建物などの遺構が観察されないため、薬師堂下層地区の東側に広がる空閑地となっていたようである。ただし、面上からは多数の土器を中心とする土器が出土している。特に第5回土器溜りとした場所からは遺物が集中して出土した。(第20図遺物24～47参照)これらの遺物は耕作土直下から出土しているが、土器皿を中心とするもので検出状況から薬師堂下層区に併行するものと考えられる。



第5図 A地区 全体図

## 第1面

礎石建物 SB 2 の廃絶後、礎石建物 SB 1 が建つ。この 2 棟はどちらも大規模で、柱の並びが整っており、柱間寸法が広い特徴がある。また、建物周囲には SD 1 が建屋の範囲を覆うように巡る。この面は出土遺物の検討から13世紀前半と考えられる。

### SB 1

南北 5 間 × 東西 3 間以上 ( $12.5\text{m} \times 7.5\text{m}$ ) の総柱建物である。柱穴 P205 には礎石が残されるが、他は全て礎石の抜き取り痕跡であった。柱穴 P205 の礎石は 1 辺  $50\sim60\text{cm}$  前後、厚さ  $30\text{cm}$  前後の大きなもので、上面を水平に据え下部には根固石を据える。また、いくつかの抜き取り痕にも根固石が確認できた。これらの礎石抜き取り痕はおむね梢円形に窪み、長辺で  $1.2\text{m}$ 、短辺で  $80\sim90\text{cm}$  前後の規模を測る。

SB 1 の中央には礎石抜き取り痕跡が欠けた場所があるが、この部分には石組が組まれ、簡易な壇造成を行っている。石組みの幅は  $4.2\text{m}$  で、建物と同じ南北方向に組まれる。また、石組周辺には礎石抜き取り痕跡が認められないため、柱はこの石組の上に据えられたのである。この他、石組の目地詰めには布目瓦片が使用される。この石組みによって東側は高さ  $20\text{cm}$  ほどの高さが盛り立てられる。この盛り立てによって奥行  $2\text{m}$  程の範囲が建物内部で区画された様に観察できる。SB 1 の前面が傾斜面という立地から考えると東側と推測されるが、そうであるとするとの石組みによって区画された範囲は寺院建築などに認められる須弥壇状のものである可能性が大きい。

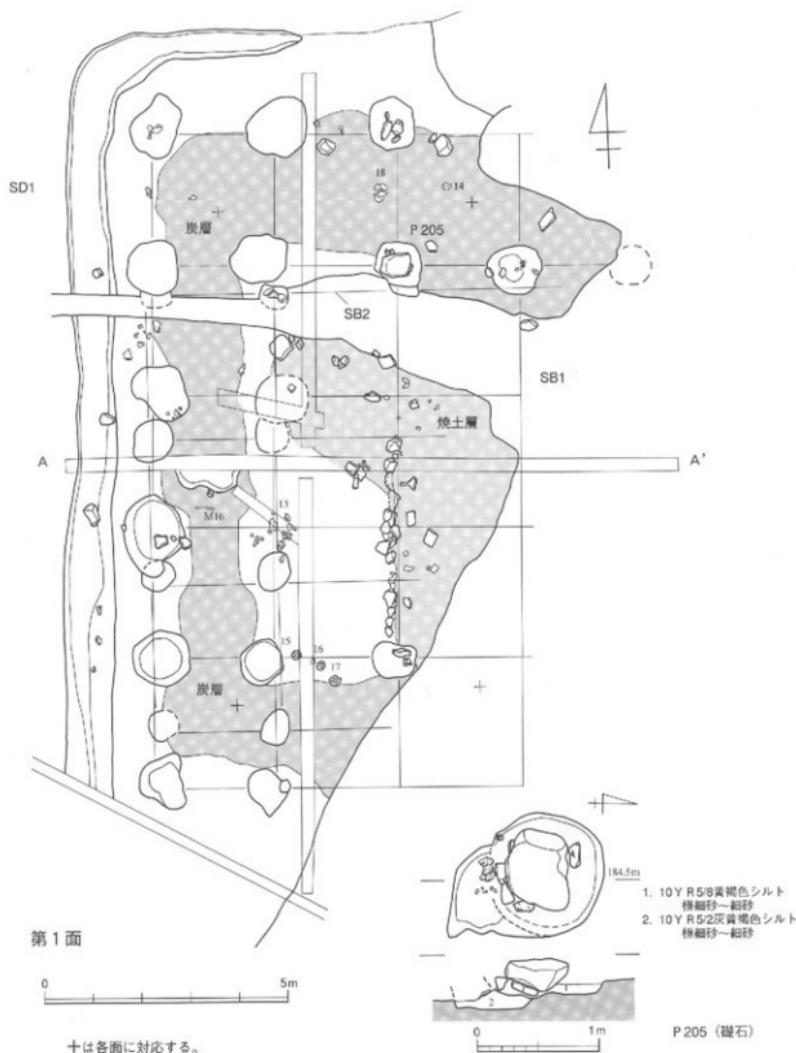
他に、建物の周囲には暗褐色土の炭・灰混じり層（以下、炭層）が建屋周囲を囲んで堆積する。この層には細かく碎かれた土師器皿などが大量に混入し、焼土は僅わずかにしか含まれない。また、出土した土器はコンテナ 6 箱分に及んでいる。この堆積層は全体に均質な広がりをもち、土砂に混じる炭の量が少ないため焼失時の焼土層と考えるよりは建築時に人為的に敷いたと考えるほうが自然である。また、この炭層は SB 1 の周囲を囲むように分布するもので、全体的には平面方形で SD 1 の内側を取り囲んでいる。しかし、石組みが構築される須弥壇の内部や礎石抜き取り痕内部に分布が及ばないことから、SB 1 の礎石をすえつけた後に炭層が堆積したといえる。また礎石抜き取り痕跡全体が炭層に覆われていないため、建物焼失後の堆積も考えにくい。つまり、同層は礎石が設置された後の建物建設時の基礎地業の一環として焼き詰められたと考えるのが妥当であろう。

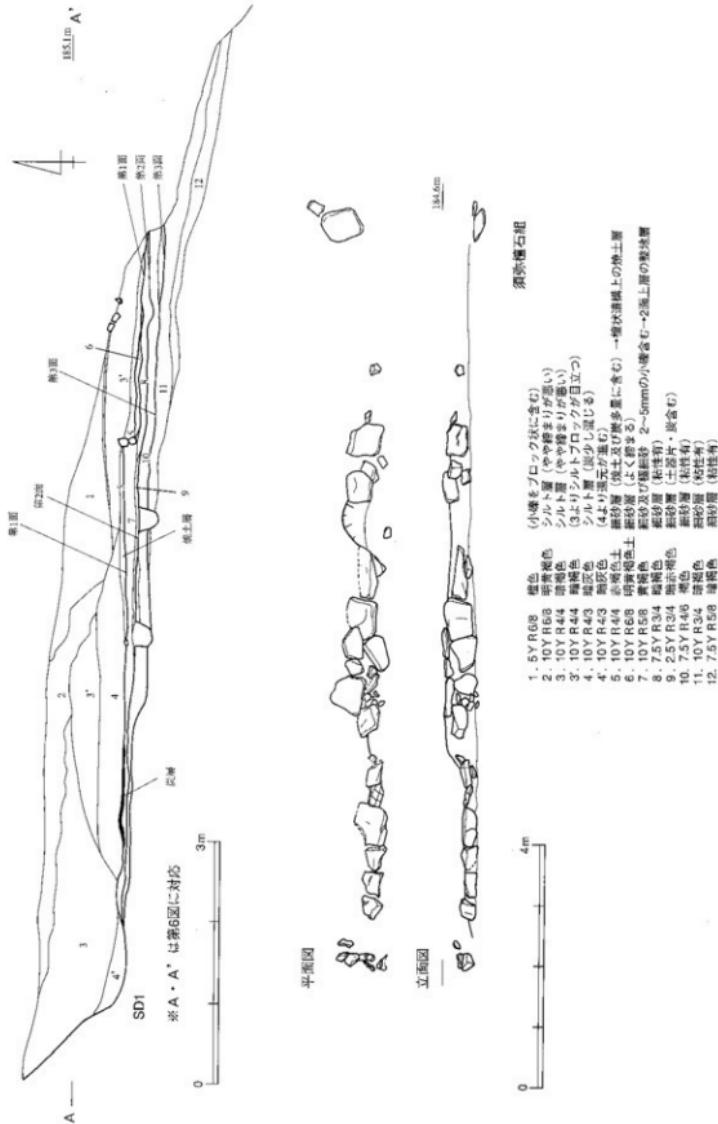
この炭層以外に、石列上層側辺を中心に土器・炭さらには焼土を含む 10YR 4 / 4 赤褐色土經砂層（以下、焼土層）の堆積も認められる。こちらのほうは数センチ大の炭片や、被熱した遺物が含まれるため同層は焼失時の焼土瓦礫の堆積層と推測され、建物は最後に焼失したと考えられる。この焼土層からは多くの土器が出土しているが、特に石組東面に堆積した土砂には須恵器・土師器などの土器に混じって金箔片や釦などが出土している。金箔片は細かい碎片が瓦礫に混じって出土したもので、焼土層の全体から出土している。ただし、上記の炭層からは金箔片は全く出土していない。

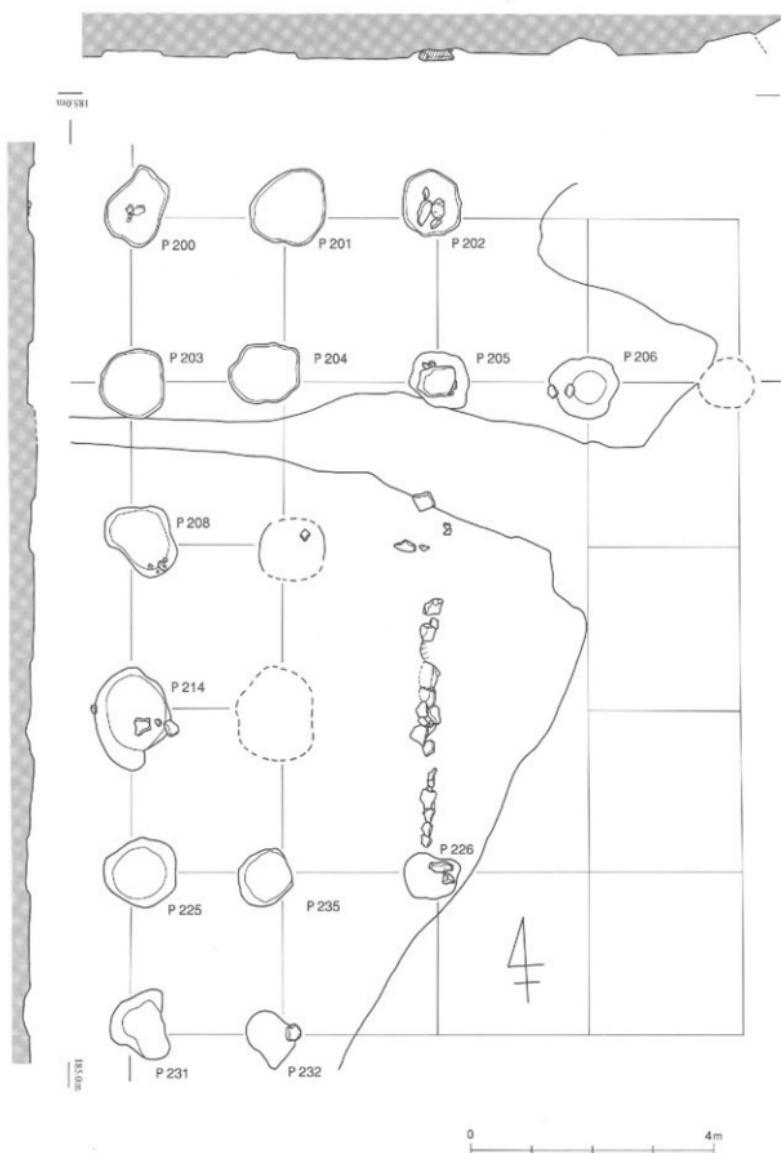
以上のことから、SB 1 はかなり格式の高い建物であると考えることができ、内部に金箔を塗付した建築部材ないし仏像を持つなどの有力者によって建てられたものと考えられる。

### SB 2

SB 1 に先行して建てられた礎石建物で、東西 2 間以上 × 南北 3 間（東西  $6\text{m} \times$  南北  $10.8\text{m}$ ）が検出されたが、東側が失われているため全体の規模は不明である。柱間は東西が  $3\text{m}$ 、南北が  $3.6\text{m}$  で、並び間隔ともにほぼ正確である。





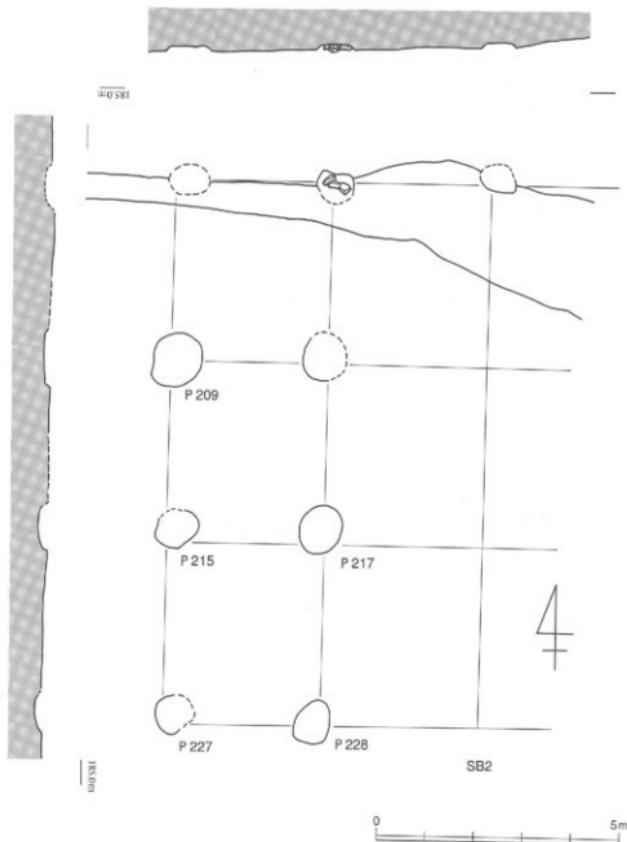


第8図 A地区 SB1

検出できた柱穴はすべて礎石抜き取り痕跡で、このうち北辺の3基とP209はSB1に切られることからSB1より古い建物であることがわかっている。抜き取り痕跡は平面円形で、深さは10cm前後で、SB1のものよりも総じて小型である。北辺の中央のみ根固め石を残していた。

## 第2面

掘立柱建物SB3・4が建てられ、鍛冶炉が多数営まれた時期である。周囲に焼土面や鍛冶炉が点在する。この段階はSB1の石組み造成土である10YR 5/8 黄褐色土層とその下の7.5YR 3/4 棕色細砂層を除去後に検出した。10YR 5/8 黄褐色土層は北側の水路による擾乱以北と西側の雨落ち溝SD1までには及んでいない。また、この時期の遺構は第10図上段の範囲のみに検出される。このため第2面の段



第9図 A地区 SB2

階では壇状遺構は小規模な範囲にとどまっていたと判断される。(図のSD1は第1面のSB1に共存する。)

この他、第2面では多数の焼土坑や焼土面を検出したが、これらは小鍛冶の痕跡と考えられる。従って、この面に立てられた2棟の建物は鍛冶工房の作業小屋と考えられる。

#### SB3・4

SB3は梁行2間×桁行3間(5.4×6.2m)面積33.48m<sup>2</sup>の規模を有する東西棟である。柱構造は総柱となり、柱間は梁行が2.6m、桁行が2~2.5mを測る。

SB4は梁行2間×桁行3間(4.5×6.0m)面積27m<sup>2</sup>の南北棟で側柱構造の建物である。柱間は梁行が2~2.7m、桁行が1.8~2.6mを測る。両者とも柱穴は円形で深さ10~30cmほどが残存していた。

#### 焼土坑および鍛冶関係の遺構

検出できた鍛冶関係の遺構には焼土坑15基、焼土面1箇所、被熱した台石2石、埋土に炭・焼土を充填した柱穴などがある。焼土坑にはSK237・238・239・240・241・242・245・254・260・283・301がある。焼土面の顕著なものは第10図上段図のSK245東に隣接する部分である。台石には台石1・2がある。両者とも平石で上面を水平に据えるが、被熱によって赤く変色している。

#### SK237

円形の土坑で内部に炭が充填されていた。平面椭円形で東西方向に長軸を持つ。規模は長軸が0.55m、短軸が0.44m、深さ13cmである。

#### SK238・239

2基の土坑が隣接して検出された。埋土の状況からするとSK238がSK239に切られると考えられるが、下面には赤変した焼土面の広がりから判断すると同時期に機能していた可能性が強い。このため、一連の遺構の可能性が大きい。土坑内部は炭混じり土が充填される。規模はSK238が平面円形で直径0.55m、深さ5cmである。SK239が平面円形で直径0.47m、深さ5cmである。

#### SK242

直径0.18mの円形の小穴で深さ3cmを測る。この土坑はシルト質の客土を掘り窪めたもので周囲は被熱によって赤変している。

#### SK245

平面円形で直径0.3m、深さ10cmを測る。側壁・底部が被熱のため赤変している。埋土は炭・焼土の混じったシルト土である。

#### SK260

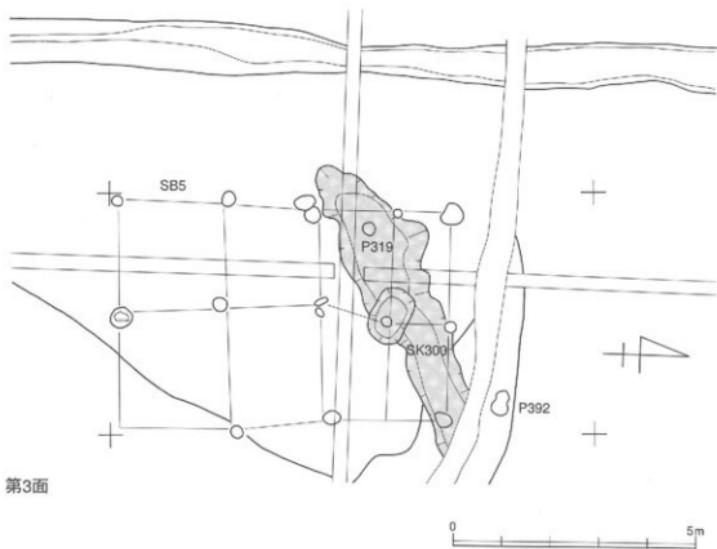
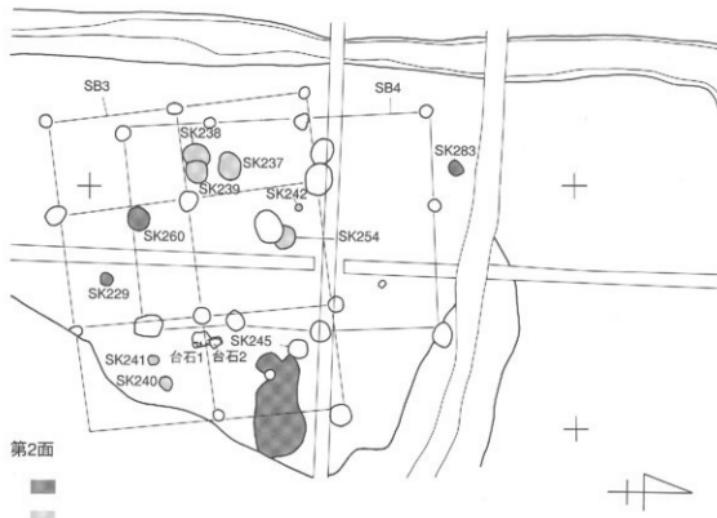
平面円形で直径0.5m、深さ10cmを測る。側壁・底部が被熱のため赤変し、厚さ2cm前後の硬化面となる。

#### SK283

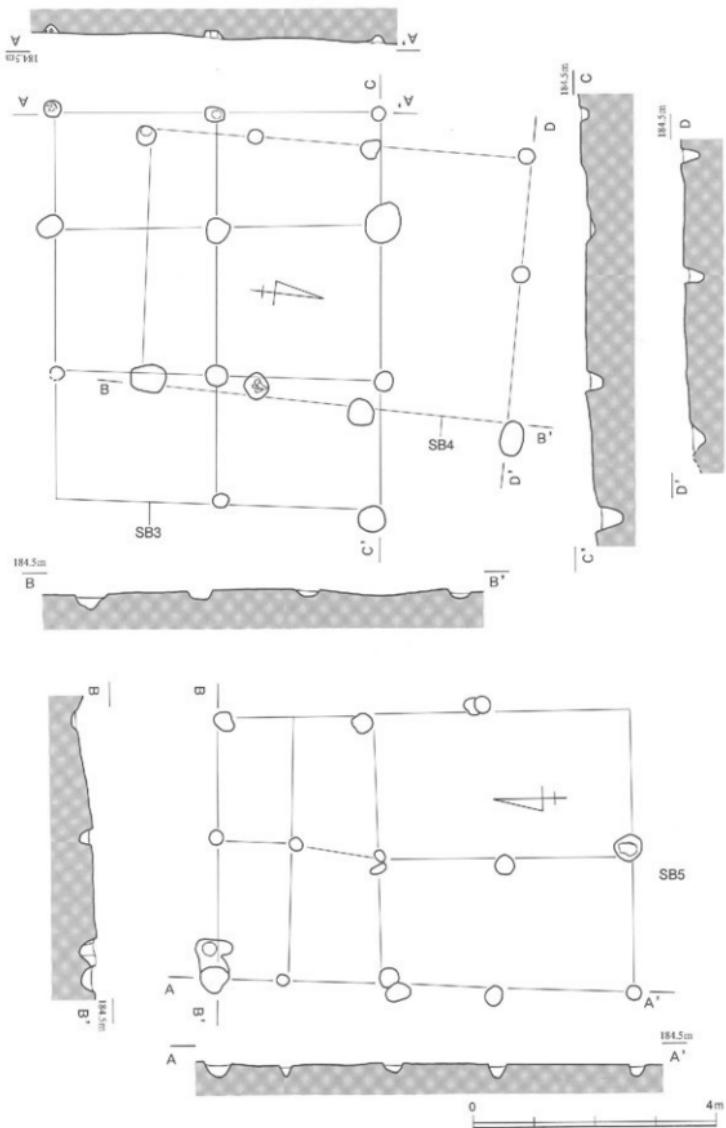
平面やや平面三角形状を呈する土坑で、最大長0.5m、深さ12cmを測る。底面から側面に掛けて広く赤変し、やや硬化面を呈する。

#### 第3面

掘建柱建物SB5が建てられた時期である。この段階はさらに7.5YR4/6褐色細砂層を除去後に検出した。第2面よりさらに範囲が限られ、ほぼSB5の範囲のみが造成面として機能していた時期と考え



第10図 A地区 塚状遺構第2・3面



第11図 A地区 SB3・4・5

られる。このため、第3面はSB5のみを建てるための削平段であったと考えられる。また、焼土面・焼土坑も認められず、遺物の出土も非常に限られている。

SB5は梁行2間×桁行3間、北面庇付きで(4.2×7.0m)面積31.1m<sup>2</sup>の規模を有する南北棟である。柱構造は総柱となり、柱間は梁行が2~2.2mで、庇部分は1m、桁行の柱間が1.7~2.2mを測る。

柱穴は円形のものが多く、直径30~40cm前後のものが多い。

#### 古代の遺構

中世に壇状遺構が形成される以前に、斜面を侵食して形成されたと思われる小規模な谷地形が検出された。この遺構(SK300)は第3面と同一面で検出されたが、第3面形成時に谷地形の上面を削平されたと考えられる。この遺構の内部には10YR4/3暗灰色シルト層が充填されていたが、内部からは埋土に混じって多量の瓦片が出土している。

## 2. 薬師堂下層地区

薬師堂下層区周辺は西から東に向かって下る傾斜面であるが、中世前半にこの周囲を造成し建物を築くための造成段を形成していることが判明した。この造成段は西側尾根上を大きく削平し、東側に土砂を盛り出すことによって平坦地を造り出すもので、規模は南北14m、東西14m、面積200m<sup>2</sup>前後を測る。内部は標高187.0~187.3m前後に立地し、背後の崖上は標高190mを測る。このため、この造成によってできた薬師堂下層地区の西側崖上と平坦面の比高差は、最大3.0m前後と大きな高低差をもつことになる。

調査によって、この平坦地に4棟の建物が重なって検出された。最も古いものは掘立柱建物のSB9である。次に礎石建物SB8→SB7→SB6の順で繰り返し建物が建ったことがわかっている。最後のSB5は現薬師堂の1世代前の建物と思われ、礎石抜き取り穴に近代の遺物を伴っていた。他の建物はすべて13世紀後半~近世前後の建物と考えられる。

但し、出土遺物(14~15世紀の堤・備前焼擂鉢・近世の陶磁器・寛永通宝など)や柱穴の数量から考えて、建物は中世前半から断続することなく建て替えられていたと思われる。近現代の改築に伴う工事によって、かなり搅乱が行われていた。近世~現代の薬師堂建設によって繰り返し土砂が掘り返されたことや、東側が近年大きく削平されているなど下層への影響は甚大であった。このため、多くの礎石が改築の度に移動しており、残念ながら全ての建物を復元することは出来なかった。

#### SB6・7

両者とも礎石建物である、SB6の南辺に1基、SB7の北辺に同じく礎石1基が残されていたが大半の礎石は抜き取られてしまっている。さらにSB6では東側の礎石据え付け痕の大半が削平によって失われている。SB6では復元は一応3間×3間と考えた。建物の規模は南北10.5m、東西10.5m、面積110.25m<sup>2</sup>である。柱間は東西辺、南北辺とも3.5mを測る。

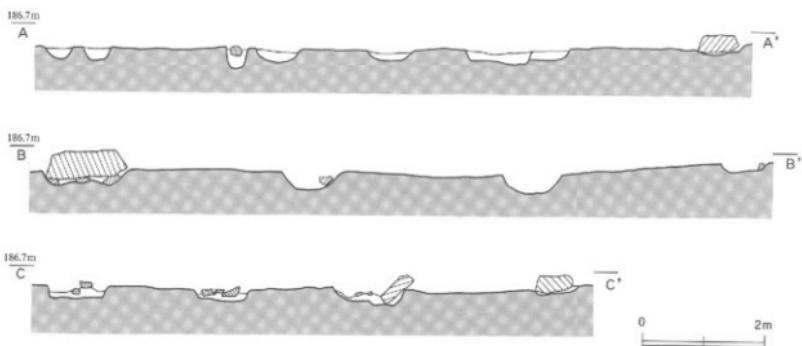
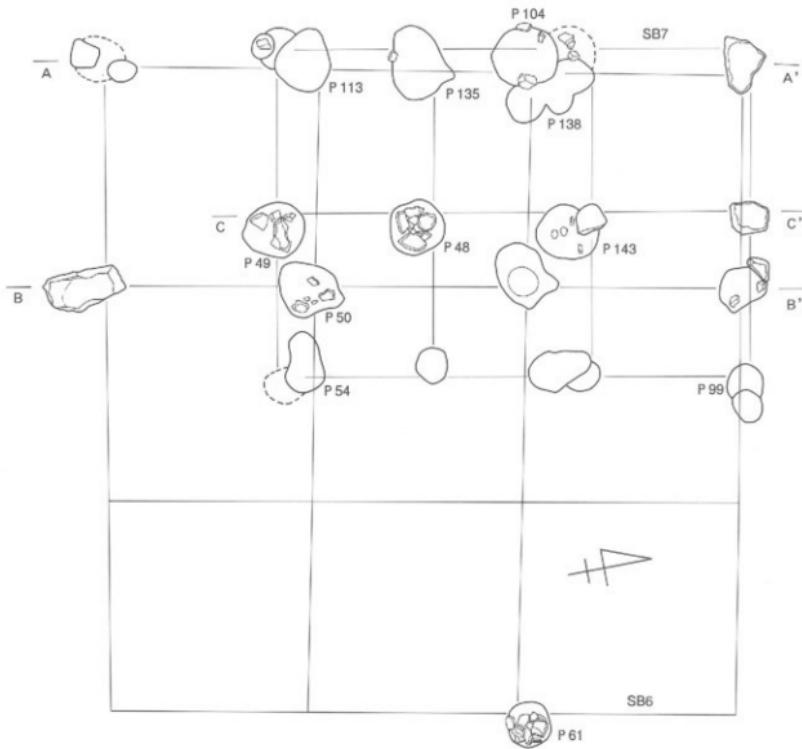
SB7についても3間×2間として復元したが東側の残りが悪く、規模の詳細については不明な部分が多い。検出できた範囲では南北9.5m、東西6.5mを測る。ただし、この2棟はかなり大型の建物で柱間寸法も大きいことから、薬師堂の前代の建物であったと推定される。

#### SB8

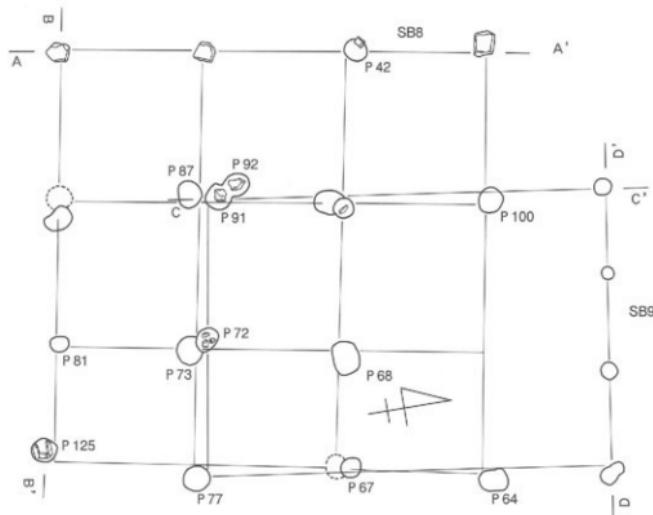
3間×3間の総柱建物である。規模は南北7m、東西7mのほぼ方形を呈し、面積49m<sup>2</sup>を測る。柱間



第12図 A地区 薬師堂下層



第13図 A地区 SB6・7



第14図 A地区 SB8 + 9

は2.2~2.4mである。柱穴は平面円形ないし梢円形で、直径は40cm前後のものが多く、検出面からの深さは最大で20cm前後である。

#### SB9

2間×3間の掘立柱建物で、東柱ではなく側柱構造である。規模は南北7m、東西4.7m、面積32.9m<sup>2</sup>での南北に軸をもつ。柱間は2.2~2.4mである。柱穴は円形ないし梢円形のものが多く、直径は30~40cm前後、検出面からの深さは深いもので25cmを測るなどSB8に酷似した状況である。

#### 鍛冶炉関係の遺構

SK117~119の3基の遺構はいずれも小規模であるが、被熱による硬化面が認められることや、埋土が炭で充填されることから鍛冶関連の遺構と推定される。また、これらの遺構は南西隅の一角に限定されるため、中世段階で周辺が鍛冶工房であった可能性が大きい。

さらに、SK117~119は配置から一連のものと推定される。SK117は中央の遺構が底面に赤く変色した被熱面をもつ。両側の土坑には内部に炭を充填している。中央が直径0.36m、深さ5cm、南側が直径0.45m、深さ5cm、北側が直径0.30m、深さ2cmをそれぞれ測る。

SK118は直径0.36mの円形を呈する遺構で厚さ3cm前後の被熱による硬化面をもつ。硬化面は赤色から一部青色に変色する。

SK119は直径0.24m、深さ2cmの円形を呈する遺構で底部に厚さ2cm前後ほどの赤色の硬化面をもち、内部には炭を充填する。

### 3. 堂山東麓区

本区周囲は堂山北側の堀没谷の上に立地する。矢ノ谷区同様不安定な場所で、常に湧水が流れ出し建物の立地には最悪の場所である。本区の堀没谷は幅15mで堂山の山裾に沿って南東に下り、末端は円山川に合流している。また、A地区の南東端で矢ノ谷の堀没谷と合流している。

#### SB10

堀没谷の上に立地する掘立柱建物で梁行2間、桁行3間の東西棟である。規模は梁行4.5m、桁行7.35m、面積33.08m<sup>2</sup>を測る。谷中の湿润な場所に立地したためP160, 161, 162, 164, 168で柱材が遺存していた。このうちP160, 161, 162, 164について樹種同定（第6章第3節参照）を行ったところ前3者はスギ材、P164はヒノキ材であることが判明した。これらの柱材は直径18cm前後で、表面は面取りが施されている。柱穴は円形で直径30~40cm前後を測る。建物の柱間は桁行が2.45m、梁行が2.25mである。柱間の狭長の幅が小さく、柱通りも正確である。建物の周囲には多くの土器が出土したが、範囲は建物周囲の100m<sup>2</sup>前後に集中する。おそらく、建物を中心にこの範囲が屋敷地に相当したと思われる。

### 4. 矢ノ谷区

本区は字「矢ノ谷」の開口部にあたり、遺構面は谷底地形に堆積した軟弱な地盤の上に形成されている。堆積土は大半が土石流による土砂でシルト層や淘汰の悪い砂礫が互層に厚く堆積していた。また、山地からの湧水が常時流れ出しており、建物の立地には適さない場所である。

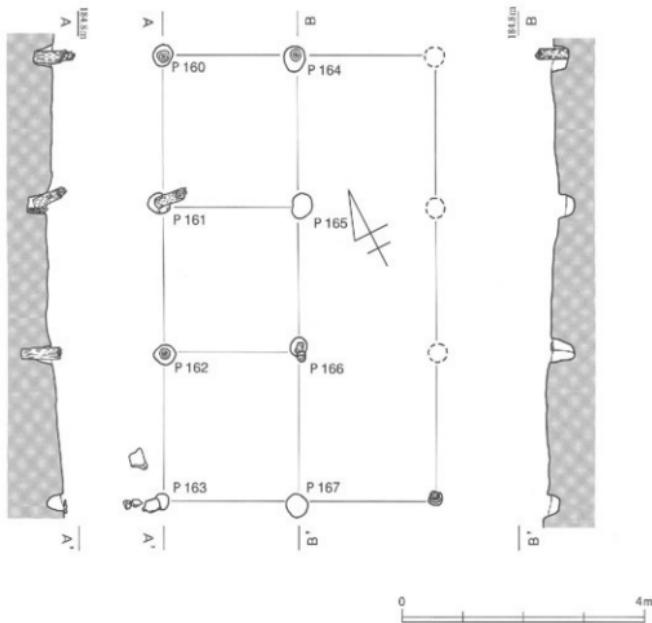
この矢ノ谷にSB11を中心とする遺構が検出された。この建物の立地は南側が一部地山上にのるもの

の、建物の北側および建物周囲の屋敷地の大半は堆積谷の上に立地している。

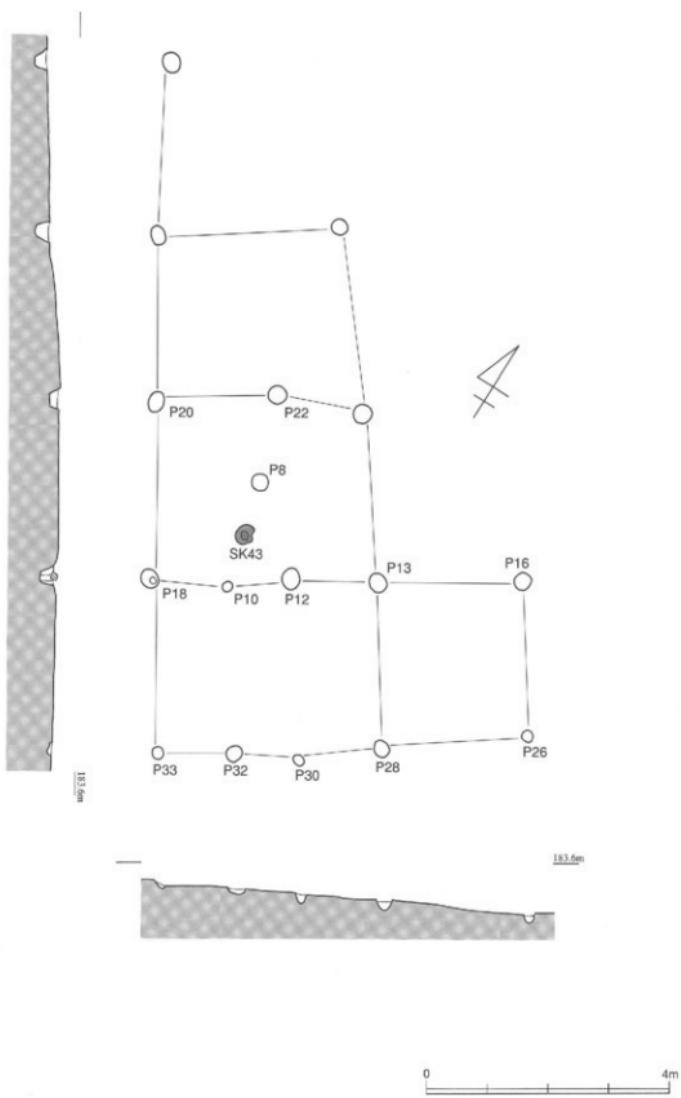
屋敷地は SB11を中心約180m<sup>2</sup>前後の広がりの空間と推定される。近世遺構の水田造成でやや平坦となるが、雨落溝4・5が傾斜をもって検出されたこと、建物が正な平面形状を呈していることなどから、旧地形も元々傾斜地であったと推定される。但し、屋敷地の東側、下方には柱穴が盛土の上に検出された部分もあることから、多少の造成は行ったことが推察される。また、建物周囲には雨落溝あるいは屋敷域を区画する溝が西側に数条検出された。この溝は南側で一部膨らみ土坑状を呈する。

#### SB11

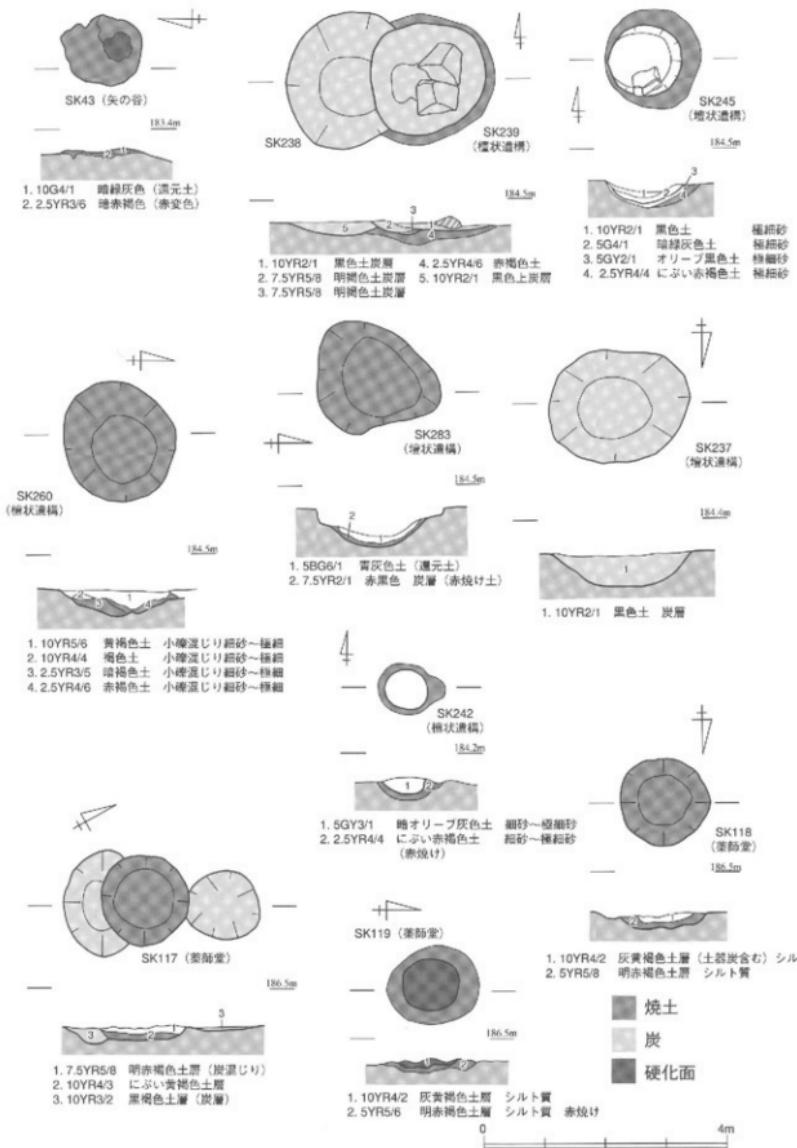
SB11は梁行3間、桁行4間の南北棟である。規模は梁行6.3m、桁行11.5mの規模を有する掘立柱建物である。東柱は一部抜ける中抜け構造となる。棟方向は南北を向く。柱穴は直径30~40cmで、柱間は2.5~3.0mと狭長の差が大きい。さらに柱通りも悪く、建物全体にやや台形を呈する。柱穴P8からは土師器皿(242)が出土した。



第15図 A地区 SB10



第16図 A地区 SB11



第17図 A地区 土抗・鍛冶炉

## 第3節 遺物

### 1. 遺物概要

A 地区から出土した遺物はコンテナ15箱分の土器と10箱分の瓦がある。主として中世前半段階の遺物が多いが、その他、古代・中世後半～近世の遺物も少量出土している。

中世前半の遺物には様々な器種が含まれている。出土した器種は以下のとおりである。土器類小皿・中皿・托・椀・杯・壺・須恵器皿・碗・鉢・甕・瓦器碗、中国製青磁碗・白磁碗などの土器、下駄・曲物などの木製品、釘・刀子などの鉄製品がある。

この他、古代に属する遺物には須恵器杯・杯蓋などの土器、軒丸瓦・丸瓦・平瓦などの瓦類がある。また、中世後半～近世頃に属する遺物には唐津焼碗・中国製染付碗、伊万里系の染付碗、などの土器・陶磁器類、銅鏡などの金属製品などがある。

なお、中世の土器分類については、多種類の出土があったもののみ以下のように分類した。

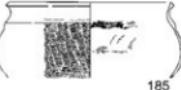
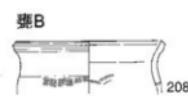
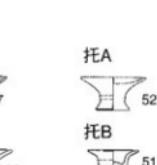
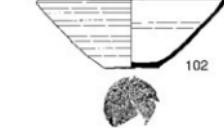
- 土器器小皿 A 底部糸切り手法のもの  
B 底部手づくね手法のもの  
中皿 A 口縁部を1段ないし2段ナデするもので、体部が丸く立ち上がるもの。  
B 低体部の境が明瞭でくの字に折るもの。  
C 体部中位でナデによる屈曲をもつ。  
杯 A 体部中位にナデによる屈曲が出来るもの。  
B 体部中位に屈曲のないもの。  
椀 A 低部内面に段ができるもの高台内部が中実のもの。  
B 高台内部が中空で低部内面に段ができるもの。  
托 A 高台内部が中実のもの。  
B 高台内部が中空で低部内面に段ができるもの。  
羽釜 A 口縁部が内傾し小さい鉢が横方向に張り出すもの。  
B 体部が斜め上方に立ち上がり断面台形に近い厚手の鉢が付くもの。  
甕 A 外面平行タキで、胴部は球形ないし長胴。口縁部は外反する。  
B 調整はAと同じであるが、口縁部が縁帯状に拡張するもの。  
C 外面タケ刷毛、内面は横方向の板ナデ調整。短く外反する口縁部を持つ。  
壺 A 羽釜の鉢部が退化したもの。外面にタタキ成形痕跡を残す  
B 球形状の胴部を持ち、口縁端部を折り曲げておえるもの。  
C 外開きの体部で、口縁の外面直下に鉢の痕跡を残すもの。  
D 厚手のもので、くの字に折れる頭部から外反する口縁部を持つ。胎土はやや砂粒が多く、色調は暗茶褐色を呈する。  
E 口縁部が屈曲して受け蓋状になるもの。  
須恵器 皿 糸切り底のもの。  
椀 A 内面底部の段が認められないもの。  
B 内面底部に段が出来るもの。

※須恵器鉢・甕・磁器などの器種については特に分類を行っていない。

土器器



須恵器



白磁碗



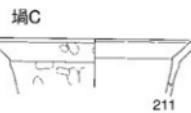
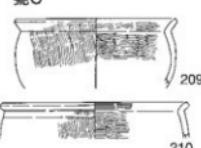
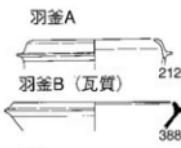
77

スケールは1/8

青磁碗



355



第18図 中世 遺物分類図

## 2. 墳状遺構区

### 柱穴

遺物が出土した柱穴は少數にとどまる。図化できたものは中世が10点、古代が2点である。SB 1に関連する遺物はP226の土師器小皿A(3・4)、SB 2に関連する遺物はP205の須恵器碗(8・10)、10は椀A、8も形態から椀Aになると推測される。10は口径15.9cmである。SB 3に関連する遺物ではP264から土師器碗A(7)が出土した。SB 5に関連する遺物ではP312から土師器小皿A(2)・土師器杯B(9)がそれぞれ出土している。2は口径9.8cm、9は14cmである。

この他、P392からは土師器小皿A(1)と中皿A(6)が出土した。1は口径8.9cm、器高2.1cm。6は口径15.3cm、器高3.1cmを測る。またこのほか、P319からは古代の土器が出土している。(古代の11・12については後述。)

### 埋納關係

墳状遺構第1面周囲には、人為的に据えたと思われる遺物が(13~18)数点出土している。これらの遺物はすべて石積み上層から出土しているため、SB 1建築時に地鎮めなどの目的で据えられたものと考えられる。ただし、建物の北端から出土した14・18については、祭祀に関するものでない可能性も残される。

13は瓦質の壺である。くの字に折れた頭部からラッパ口状に開いた口縁部をもつ。頭部と口縁部の接合部が大きく屈曲する特徴がある。口径17.4cm、器高25.8cm、底径10.9cmである。また、口縁端には凹線が退化したナデによる段をもつ。底部は未調整である。

14・15は土師器杯Bである。口径14.8~15.8cm、器高4~4.1cm、底径7.5~8.6cmを測る。14は直線的に立ち上がる体部を持つ。15は底部がやや大きく腰部を湾曲させながら立ち上がる。16~18は須恵器碗Aである。口径15.7~16.7cm、器高4.6~5.2cmで、16・17は大ぶりな個体である。18は底径が小さく背が高くなる。

### 第0面

墳状遺構埋没後の遺物である。土器が比較的集中して出土した土器溜まりと、その他の包含層とにわけて報告する。土器溜まりの遺物は土師器皿を中心とするもので、限られた範囲からの出土である。土器溜まり周辺の土砂は均質に馴染んだシルト層であることから、中世段階に投棄された状態の一群と判断した。

土師器小皿Bは24・25・30の3点がある。いずれもてづくね皿で、口径7.6~9.6cm、器高1.3~2.1cmを測る。

中皿Cは26~29・31~45までの19点を図化した。口径は11.8~14.0cm、器高2.1~3.1cmを測る。小振りなものが多く、小皿に近い口径のものもある。いずれも体部下半は丸く立ち上がり、口縁部上半をナデ仕上げするもので全体的に体部中央に屈曲部を持つ特徴がある。個体によって丁寧に口縁端部をつまみあげるものがある。

篋Bは46がある。口径24.2cm、体部がくの字形からや立ち上がり気味で、口縁部はややシャープさに欠ける。外縁のタキは頭部上半まで残している。

須恵器は鉢47が口径24.0cmで、口縁部が肥厚して上方に拡張される。須恵器壺48は堅緻な焼成で、胎土が精良な個体である。

その他の第0面包含層遺物には土師器小皿B(49)・中皿C(50)・托A(52)・托B(51)・須恵器椀(53~56)がある。小皿Bは口径7.4cm、器高1.45cm、中皿Cは口径13.9cm、器高2.5cmである。托は52が皿部を欠くが、51は全形を知ることが出来る。皿部の口径は7.8cm、器高2.75cmである。須恵器椀は口径14.6~16.2cm、器高3.5~5.15cmで、54~56の3個体は椀Aである。また、プロポーションから判断すると、53も椀Aの可能性が大きい。

#### 第1面 上層盛土層

SB1(第1面)廃絶後壇状遺構は多量の土砂によって埋められるが、この土砂の中に多くの遺物が混入していた。出土した遺物には土師器小皿A(57~59)・小皿B(60)・中皿A(61)・杯(62~64)・托A(65)・須恵器小皿(66~68)・椀A(69~73)・鉢(74~75)、青磁碗(76)・白磁碗(77)がある。

土師器小皿Aは口径7.8~8.6cm、器高1.1~2.3cm、小皿Bは口径8.6cm、器高2.1cm、中皿Aは口径15.6cm、器高2.9cmである。中皿は器高の低い個体で、口縁部を丸くおえる。杯・托は細片が多く全形を知ることが出来るものはない。

須恵器小皿は口径8~8.4cm、器高1.5~2.1cm、椀Aは口径15.7~16.3cm、器高4.2~5.45cm、鉢は口径26.1・29.2cmを測る。鉢74は端部を内側上方につまみ、75は断面台形状に仕上げる個体である。

青磁碗76は口縁部の破片である、内面に草花文が描かれる。口径17.9cmである。白磁碗77は白磁碗第IV類になるもので、厚手の器壁を有している。口径15.2cm、器高6.8cm、高台径7.4cmを測る。

#### 第1面 SB1周囲の炭層

土師器小皿A(78~82)・小皿B(83~85)・中皿A(86~91)・杯A(92)・杯B(93・94)・椀B(103)・須恵器小皿(95)・椀(96~98)・椀B(99~101)・鉢(102・103)が出土した。

土師器小皿Aは口径7.2~8.2cm、器高1.2~1.6cm。小皿Bは口径7.8~8.8cm、器高1.5~2cmである。中皿Aは小型品が多い、口径11.8~16.5cm、器高2~3.1cmを測る。杯Aは口径13.8cm、器高3.3cm、杯Bは口径12.6~15.4cm、器高3.2~3.9cmである。椀Bは底部の破片で、焼成は堅緻である。

須恵器は小皿が口径8cm、器高2cm。椀Bは口径15.6~17.8cm、器高5cmを測る。鉢は102が直線的に立ち上がる体部を有し、口縁端部は上方に面をもつが肥厚しない。口径30.2cm、器高11.3cm、底径8.8cmを測る。103は底部片である。底径6cmを測る。

#### 第1面 SB1焼土層

SB1の瓦礫の中に混じって出土したもので一部に被熱を受けた個体も認められた。

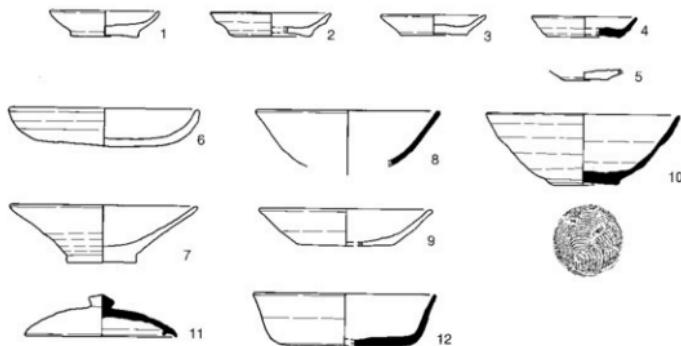
土師器小皿A(104~106)・中皿A(108~109)・杯A(107・111)・椀A(112)・托A(110)・須恵器皿(113・114)・椀(115~117)が出土した。

土師器小皿Aは口径8~9.6cm、器高1.3~1.8cm、中皿Aは口径13.8~16.2cm、器高2.5~2.9cm、杯Aは口径12.5cm、器高4.8cmである。椀は底部片である。須恵器は皿が口径8.4cm、器高1.65~2cm、椀が口径15.2~16.2cmである。

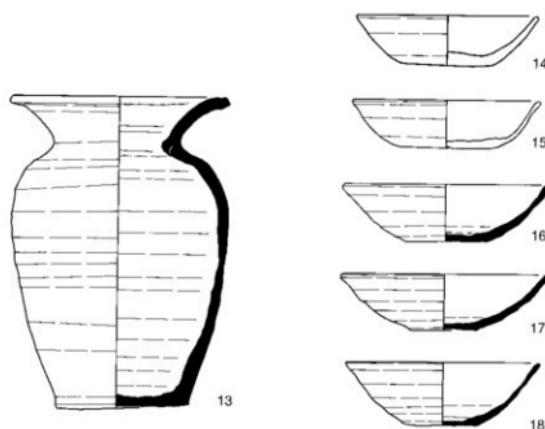
#### 第1面 石列下層

須弥壇前面の石組を除去した下層から出土した土器群である。SB2廃絶後、SB1の建築時に造成された土砂から出土した遺物群と判断して第1面に加えた。ただし、下層からの遺物がかなり混じった状態の遺物群と考えられる。

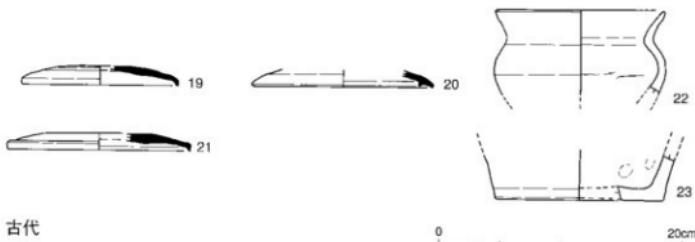
土師器小皿A(118~122)・小皿B(123・124)・中皿A(126・127)・杯B(125・128・129)、須



柱穴



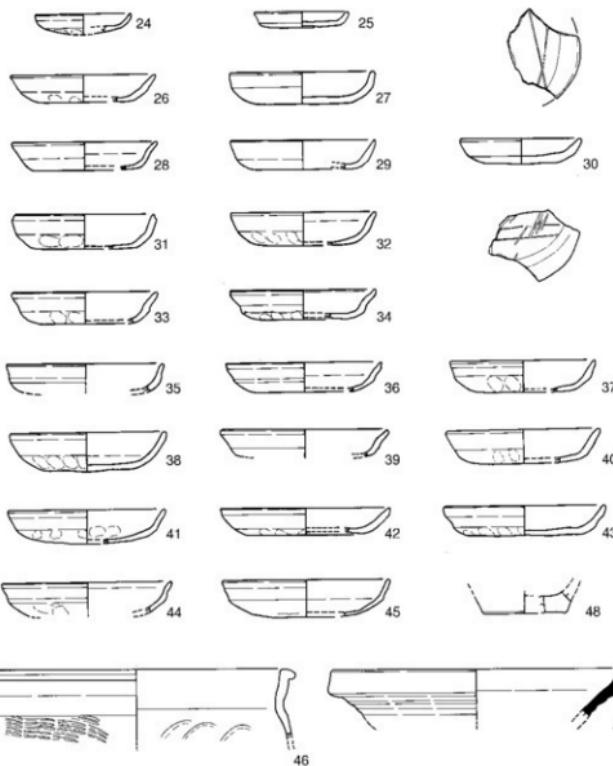
埋納關係



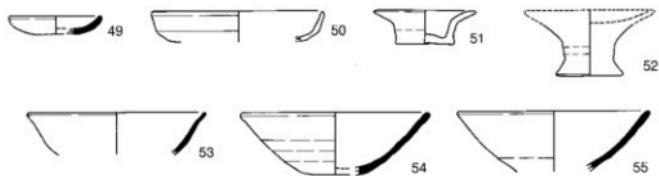
古代

0 20cm

第19図 A地区 塚状遺構出土遺物1



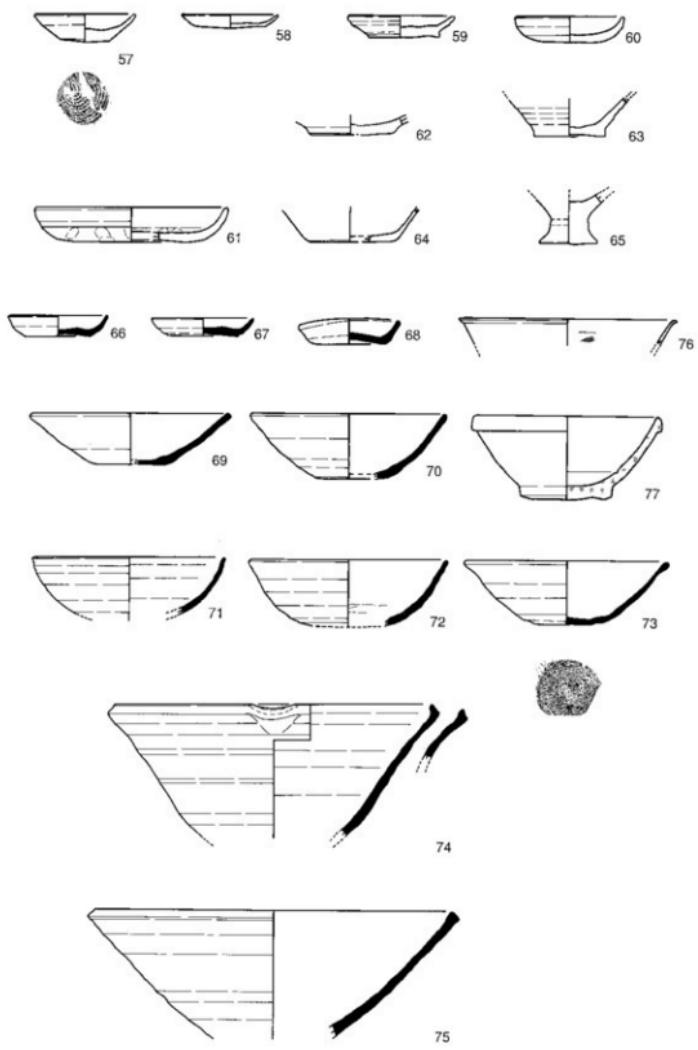
第0面 土器窪り



第0面 包含層



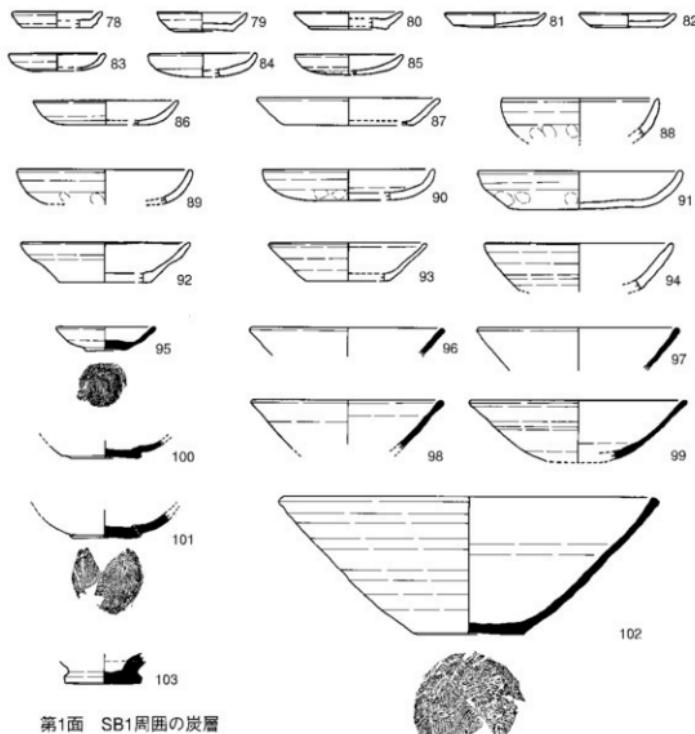
第20図 A地区 塚状遺構出土遺物2



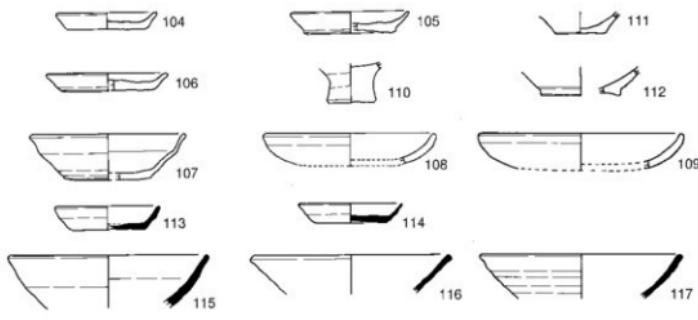
第1面 上層盛土層



第21図 A地区 墓状遺構出土遺物 3



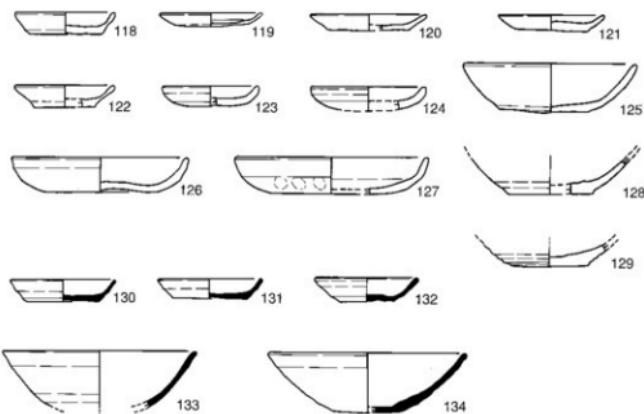
第1面 SB1周囲の炭層



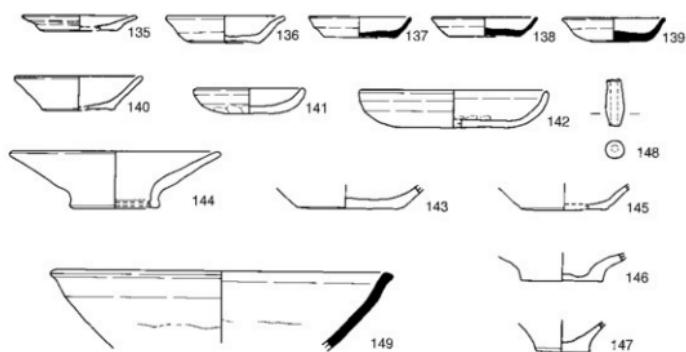
第1面 SB1焼土層

0 20cm

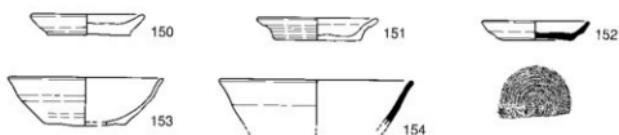
第22図 A地区 塙状遺構出土遺物 4



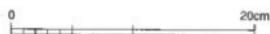
第1面 石列下層



第2面



第3面



第23図 A地区 塙状遺構出土遺物5

恵器皿（130～132）・椀 A（133・134）がある。

土師器小皿 A は口径 8～9.3cm、器高 1.2～1.8cm、小皿 B は口径 7.8～9.4cm、器高 1.7～2cm を測る。中皿 A は口径 14.2～15.8cm、器高 2.8～3cm、杯 B は口径 13.9cm、器高 4.1cm、須恵器皿は口径 8.4cm、器高 1.7～2cm、椀 A は口径 15.8～15.9cm、器高 3.6～4.7cm それぞれ測る。

## 第2面

土師器小皿 A（135・136）・小皿 B（141）・中皿 A（142）・杯 B（140・143・145）・碗 B（144・146・147）、須恵器皿（137～139）、鉢（149）がある。

土師器小皿 A は口径 9～9.4cm、器高は 135 が 1.25cm と低く、136 が 2.3cm と高くなる。中皿 A は口径 15.25cm、器高 3.1cm、杯 B は底部片である。椀 B は 144 が口径 17cm、器高 4.6cm を測る。

須恵器皿 137～139 は口径 8.4～8.6cm、器高 1.2～1.9cm、底径 4.8～6.6cm を測る。139 は底部が厚手で背高になる製品である。鉢 149 は口縁部を屈曲させて上方に面をもつ個体である。口径 26.7cm を測る。

## 第3面

埴状遺構最下層の遺物である。この段階の遺物は量が少なく、器種も限定される。出土したものには土師器小皿 A（150・151）・杯 A（153）、須恵器皿（152）・椀（154）がある。

小皿 A は口径 9～9.8cm、器高 1.7～1.9cm である。151 は体部中位で外反し、こまかに横ナデ段を顯著に残す個体である。杯 A 153 は体部中位にナデによる屈曲を持つもので、薄手で良好な焼成の個体である。口径 12.5cm、器高 4cm を測る。椀は体部を欠くが、口縁部がやや丁寧なつくりである。

## 2. 薬師堂下層区

薬師堂の下層からは土師器皿を中心に多くの土器が出土した。出土遺物は柱穴から出土した 2 点を除くと、土器溝りからの遺物および包含層の遺物である。

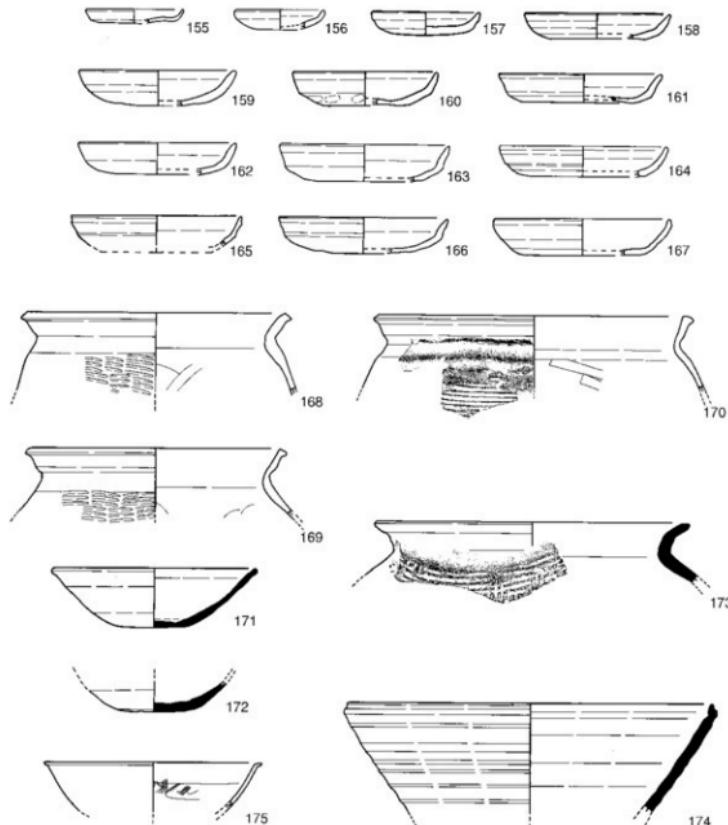
柱穴出土の遺物は SB 7 の P50 から出土した土師器皿 A（176）、P144 から出土した土師器壺 A（177）がある。ただし、SB 7 は他の柱穴で近代の遺物が出土しているため、176 は混入と考えられる。177 は口径 25.8cm で口縁部直下に短い鈎がつく。

土器溝りの遺物は土師器小皿 B（155～157）・中皿 B（167）・C（158～166）・甕 A（168～170）、須恵器椀 B（171・172）・甕（173）・鉢（174）、青磁碗（175）がある。合計 21 点を図化した。

土師器皿には糸切り底のものは認められない。小皿 B は口径 7.2～8.8cm、器高 1.2～1.9cm である。中皿 B 167 は器高が高く底部と体部の境が屈曲する特徴がある。中皿 C は口径 11.8～14.2cm、器高 2.1～3cm である。甕 A は口径 20.2～25.4cm を測る。口縁部がくの字に外反し、端部を外方に折る。外面は平行タタキ、内面は板ナデ調整によって仕上げるが、168・169 ではわずかに當て具痕跡を残す。

須恵器椀 B は 171 が口径 16.8cm、器高 4.9cm。甕は口径 25.8cm の口縁部片である。外面の平行タタキとタテ方向の痕跡がわずかに観察される。鉢（174）は口縁端部を上方につまむもので口縁の内面直下に凹線状の段を持つ。口径は 30cm である。青磁碗（175）は口径 18cm で、口縁端部を外反させる個体である。内面には草花文が観察される。

包含層から出土した遺物には土師器小皿 B（178・179）・中皿 B（180～182）・中皿 C（183）・壺 B（185）・壺 E（184）、須恵器皿（186・187）・椀（188）・鉢（189・190）がある。



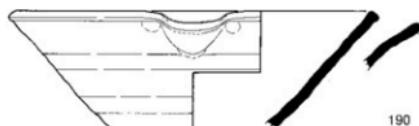
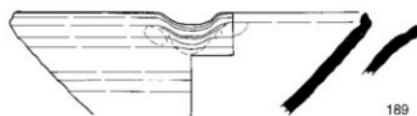
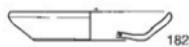
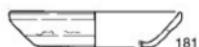
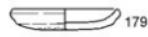
土器溝り



柱穴



第24図 A地区 薬師堂下層出土遺物1



包含層

第25図 A地区 菜蒔堂下層出土遺物 2

土師器の皿には糸切りのものは含まれない。

土師器は小皿 B が口径8.3~8.5cm、器高1.6~1.8cm。中皿 B は口径10.7~14.0cm、器高2.4~3.0cm を測る。中皿 B は壇状遺構周辺や薬師堂下層の土器群よりからも出土していない。当地点の遊離遺物のなかから唯一出土した中皿 C は口径14.5cm、器高2.7cm である。壇 E は口径26.9cm で、受け蓋状に口縁を折る個体である。外面は体部下半より下にタタキ痕跡を残す。体部中位より上方は指押さえ後、横ナデ調整によって仕上げている。鍋 B は口径26.6cm で、外面平行タタキ、内面板ナデ調整を施す。

ただし、内面には一部にあて具痕跡が観察された。

須恵器は小皿が口径8.2~9cm、器高1.6cm。椀が口径15.9cm である。鉢は口径28.9~29.2cm で、189は口縁内面直下に凹線状の段、190は口縁を台形状に終える個体である。

### 3. 堂山東麓区

この区では SB10周辺に多数の土器が出土している。このうち215・216はP162、218はP166からの出土である。この他、木製品も多数出土しているが、これについては後述する。また、この区では土師器に比べ須恵器の量がやや多く、全体の様相からすると他地区より古い傾向が認められる。

土師器小皿 A (191~194・197・198)・小皿 B (195)・中皿 C (196・199)・椀 B (200・202)・托 A (201)・壇 A (203~207)・壇 B (208)・壇 C (209・210)・羽釜 (212)・鍋 D (211)・瓦器椀 (213)、須恵器皿 (214~216)・椀 (217~239)・鉢 (240)・白磁碗 (241) がある。

土師器皿は小皿が大半を占める。小皿 A は口径6.9~9.2cm、器高1.3~2.4cm、小皿 B は口径7.8cm、器高2.0cm、中皿 C は口径11~13.3cm、器高2.2~3.3cm である。

托 A は201の1点を図化した。托は少量の出土であるが、すべて体部上半の破片を欠く個体で、全形を知ることができるのはなかった。

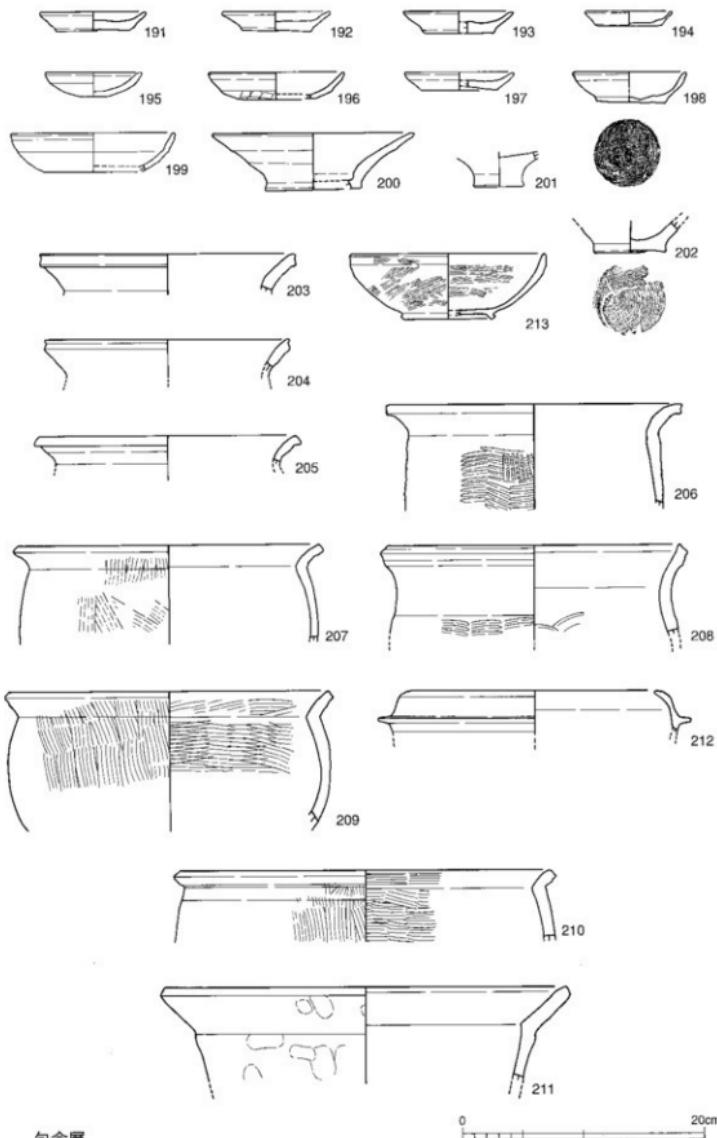
椀 B は200・202があるが、全形を知ることが出来るのは200のみで、口径16.4cm、器高4.6cm を測る。外面は暗褐色から部分的には黒色を呈する個体で、高台が器高に比べ大きくなる特徴がある。

壇 A は口径20~24.7cm を測る。口縁部のみの破片が多く全形を知れるものはなかった。壇 B は口縁部を帶状に肥厚させるもので、口径24.0cm である。壇 C は口径26.2~30.2cm、で短い口縁部を外反させる。羽釜は口径19.8cm で内傾しながら立ち上がる口縁部をもち、外面口縁直下に細く小さい鈎をもつ。

鍋 D は口径33.2cm を測る。厚手の器壁をもつ個体である。頸部をくの字に折り、口縁部を外傾しながら立ち上げる。

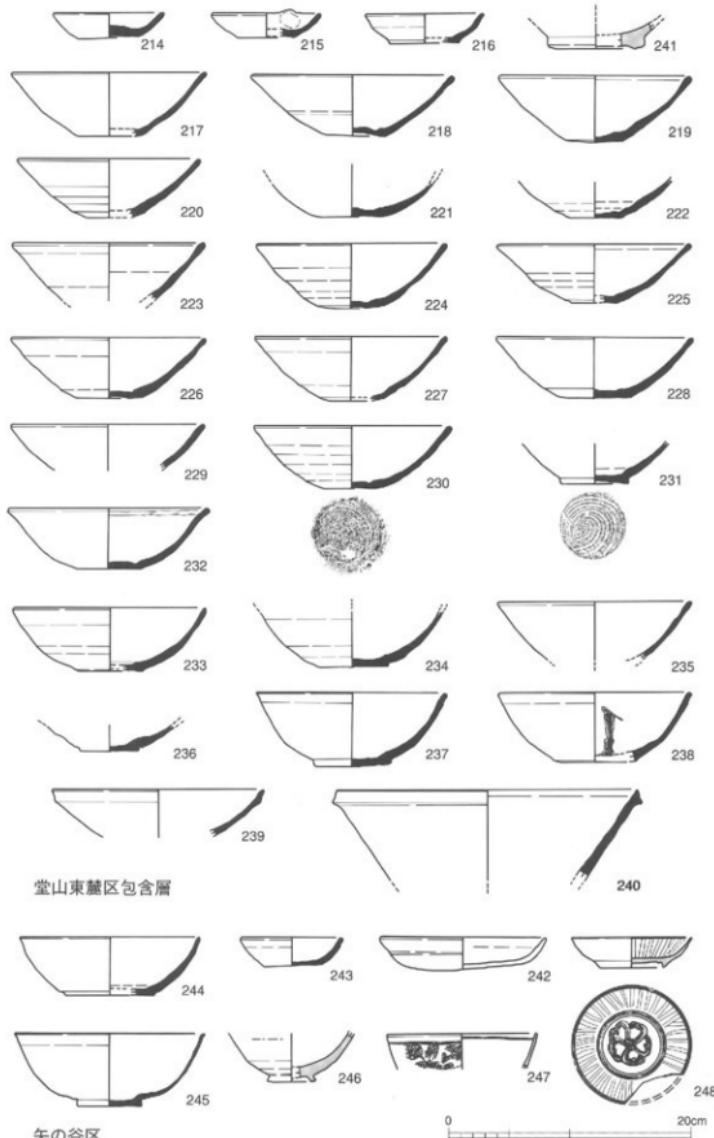
瓦器椀は213の1点があるが、A 地区では唯一の個体である。口径11.9cm、器高5.3cm、高台径7.6cm を測る。全体に器表が磨滅し、調整は不明である。

須恵器は比較的多く出土しているが、図化したのはこのうち27点である。皿は深手のものが多く、216は体部中位が屈曲する。また、215は体部の一部に膨らみが認められる。口径8.6~9.4cm、器高2~2.4cm を測る。椀は口径14.7~17.2cm、器高4.8~5.8cm を測る。器形の明瞭なものでは217~222・224~228・230・232~234が椀 A、226・236・237が椀 B である。内面に明瞭な段を持つものは少ないが、高台をもち、体部下半のいわゆる腰部がカーブをもちながら立ち上がり、背高になる個体が多くを占めている。これらの点は他の地区的椀より古い様相である。



包含層

第26図 A地区 堂山東麓区出土遺物



第27図 A地区 堂山東麓・矢の谷区出土遺物

鉢240は口径24.8cmで口縁部の断面が小さな三角形になる個体である。外開き気味に直線的に立ち上がるプロポーションをもつ。

白磁碗は体部より上を欠く個体であるが、口縁部が玉縁状となる白磁碗第IV類の製品である。

#### 4. 矢の谷区

土師器中皿A(242)・須恵器小皿(243)・椀A(244)・椀B(245)、唐津焼碗(246)、染付碗(247)、染付皿(248)がある。

このうち土師器中皿Aは柱穴P8から出土した。他の遺物はすべて遺構面周囲からの出土である。土師器中皿Aは口径13.4cm、器高2.7cmである。須恵器小皿は口径8.2cm、器高2.3cm、碗Aは口径14.6cm、器高4.8cm、碗Bは口径15.5cm、器高6.1cmである。唐津焼碗は口縁部を欠く個体で、高台脇を2段ケギリする。染付碗は外面に草花文を描き、口縁内外面に匁線を描く。口径12.2cmである。近世染付け磁器皿は口径9.8cmで見込みに花文を描く。この皿は江戸期後半の製品である。

#### 5. その他の遺物

##### 木製品

堂山東麓区からは木製品が出土した。このうち図化できたのは8点で曲物の底板・折敷の底板・下駄・簀串がある。

W1～4は曲物の底板である。W1が直径14.75cm(復原径)、厚さ0.6cmである。底面の一部が炭化する。W2は直径12.8cm、厚さ0.6cm、W3は直径22.65cm、厚さ0.75cmである。W4は直径28.85cm、厚さ0.9cmである。W1の内面には部分的に漆痕跡が残る。W3には曲物側面との閉じ合わせのための紐通し穴が観察される。

W7は折敷の底板である。長さ33.35cm、残存部分の幅6.1cm、厚さ0.65cmである。端部の中ほどに穿孔が認められる。

W5・6は連歛下駄である。W5は長さ15.3cm、幅7.9cmで、台部の厚さは最大で2.4cmを測る。W6は長さ16.3cm、幅9.7cmである。两者とも先端のほうが幅広になるもので、平面長椭円形を呈する。また、使用による摩滅のため歯が短くなっている。

W8は簀串である。長さ21.55cm、幅3.1cm、厚さ0.25cmを測る。

##### 鉄製品

17点の鉄製品を図化した。図化したものはM1～M16が壇状遺構からの出土である。M17は薬師堂下層区からの出土である。このうちM1～15までが釘・M16が不明。M17が刀子、M18銅鏡である。

釘はすべて和釘であるが、折れや歪みの立つものが多い。M1～4が長さ4.8cm、M5～8が6.5cm前後、M9・11・13が9cm前後、M10・12・14が12cm前後、M15が14～15cm前後の釘と推定される。このことから、それぞれの釘はM1～4が1寸5分、M5～8が2寸、M9・11・13が3寸弱、M10・12・14が3寸5分、M15が5寸の釘と推定される。これらの釘は断面が方形で、頭の部分を折り曲げている。

M16は断面長方形の板状の棒である。両端とも折れており詳細は不明である。残存部での長さは

17.95cm、幅1.95cm、厚さ1.25cmである。

M17は刀子である。長さ14.9cm、幅1.95cm、厚さ0.45cmを測る。この刀子は現薬師堂の基礎部分からの出土であるため時期は近世以降のものである可能性が大きい。

F18は寛永通宝で薬師堂下層の現薬師堂基礎部分から出土した。直徑2.3cmを測る。

#### 金箔

壇状遺構1面の上層焼土層（第6回スクリーントーン部分）には炭混り土や遺物に混じって金箔片15点が出土した。金箔片の出土箇所は石組み周囲に広がっているが、特に北側に集中して見つかっている。細かく破碎された状態のものが多く、折り込まれた状態で出土したものも含まれるなど、かなり傷んだ状況であった。最大のものでM63の最大長1.8cm前後で大半が不定形を呈している。また、これらの破片は何かに塗布したものと考えられるが、破片の分析からは明確にすることは出来なかった。成分分析の結果によれば、金箔片には金（Au）・銀（Ag）が含有されており、漆と思われる膜の上に張られていることがわかっている。おそらく、建築部材か仏像などに貼付されたものの断片と考えられるが、いずれも細片であるため用途は結論づけられなかった。

## 6. 古代の土器

出土した土器には須恵器杯蓋（11・19～21）・杯A（12）・壺（23）、土師器壺（22）などの土器と、軒丸瓦（249）・丸瓦（250～253）・平瓦（254～264）などの瓦類がある。B地区に比べ平安時代中期や古代の土器は少ないが、瓦片がコンテナ10箱分出土したこと、溶着した須恵器片（400）が出土するなど注目される成果も上がっている。これらの遺物群は大半が壇状遺構の最下層から出土した。特に、瓦片は大半がSK300からの出土である。また、溶着した須恵器片も壇状遺構付近から出土しており、周辺にこの時期の痕跡が存在したことが疑われる。

#### 土器

須恵器杯A12は口径14.8cm、器高4.3cmを測る。底部から体部下半にかけてケズリ調整を施す。杯蓋は宝珠つまみで口縁部に返りがつく11・20と、つまみのない19・21がある。11・20は直徑12.3～14.65cm、19・21は直徑12.7～14.9cmである。

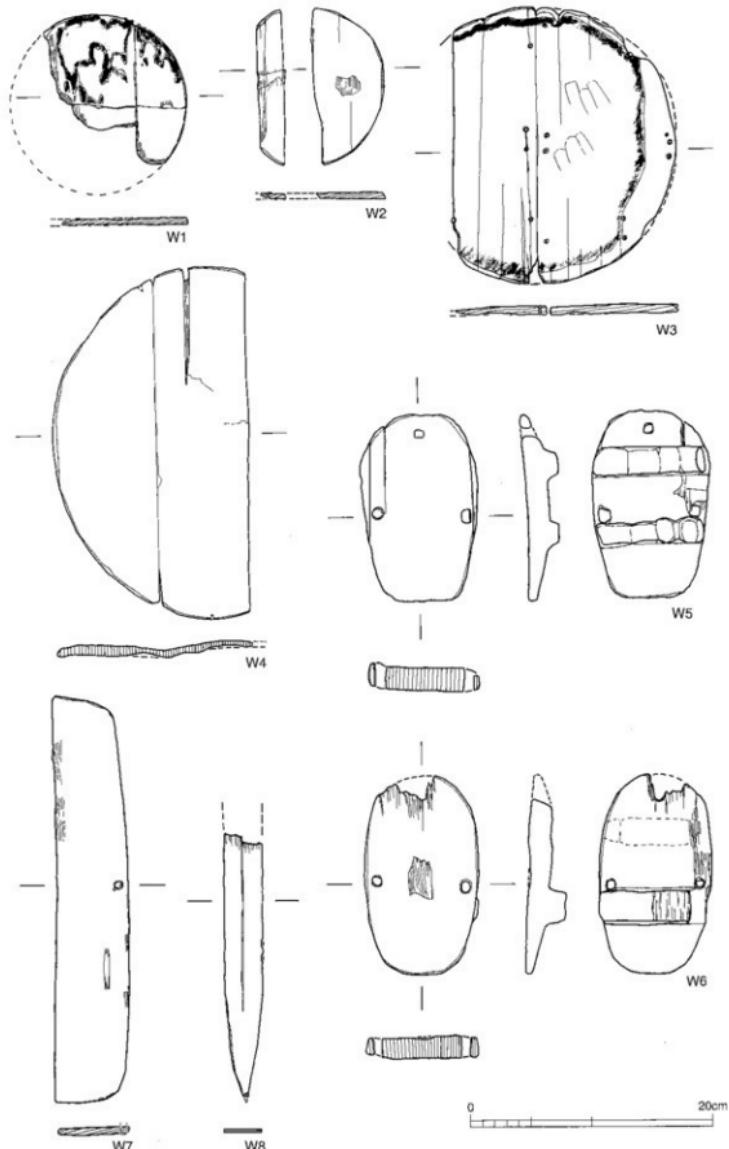
壺23は底部の破片である。底径13.6cmを測る。土師器壺22は口径13.8cmを測る。

#### 瓦

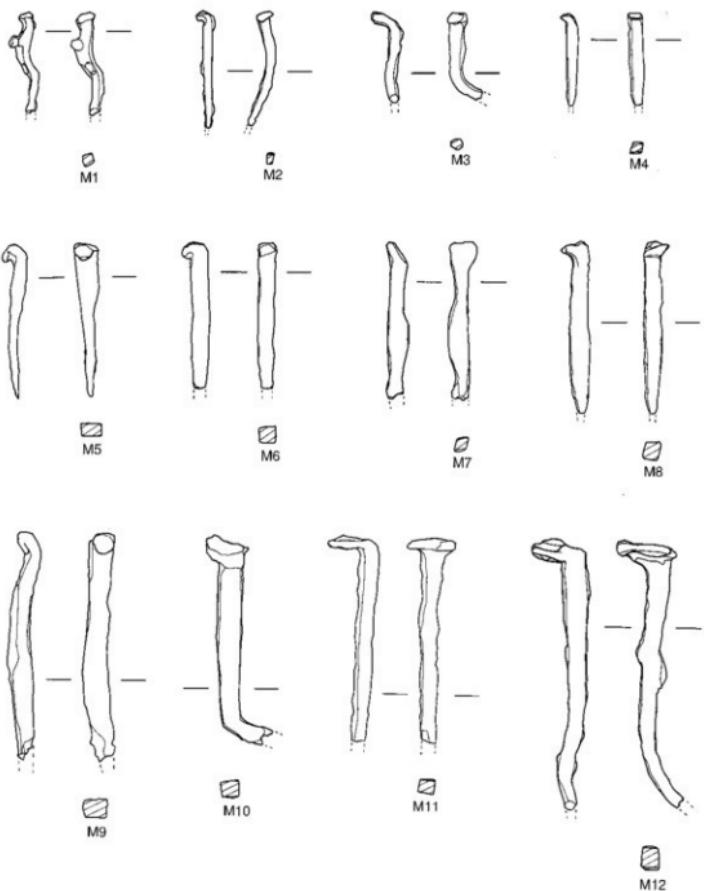
多数の瓦片が壇状遺構周辺から出土した。ただし、掲載したものはすべてSK300からの出土品で、連弁文軒丸瓦1点、丸瓦4点、平瓦10点がある。

軒丸瓦は249の瓦頭片1点がある。残存部の直径は8cmであるが、復原系は24.1cmと推測される。瓦頭面の装飾は蓮弁文で1重圓線をはさんで周囲に珠文を配置する。珠文は残存部で4個観察できるが部分であるため全容は不明である。蓮弁は14葉であるが、やや不均等な配置となっている。頭部の剥離状況からすると瓦頭貼り付け形式の軒瓦と推測される。

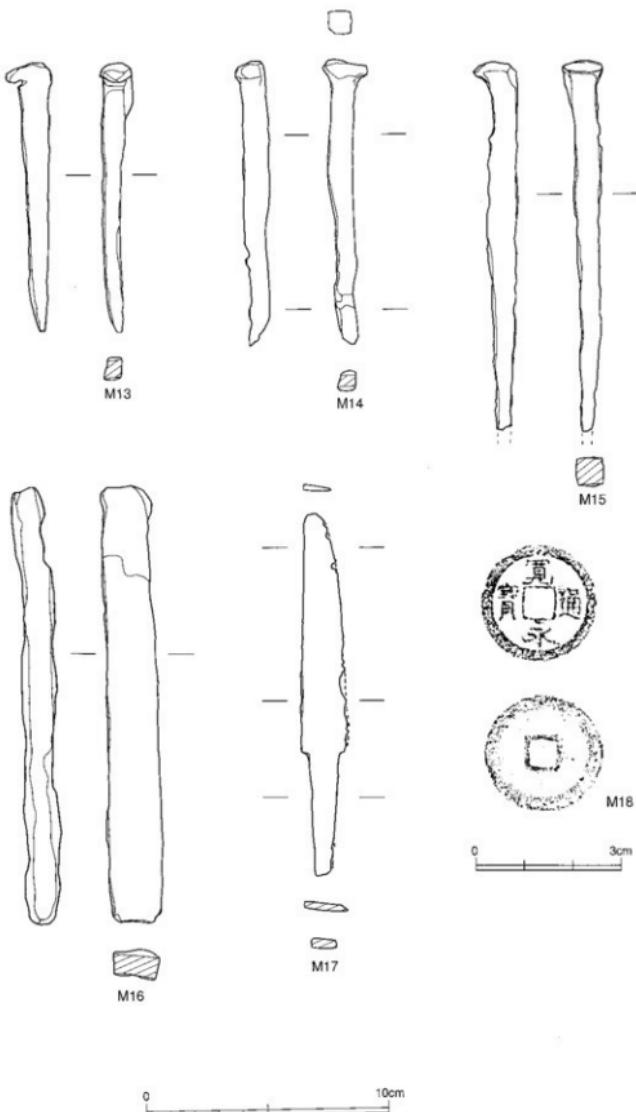
丸瓦は（250～253）いずれも同一の製作技法で作られる。すべて破片であるため寸法を正確に把握しがたいが、252で観察すると長さ37cm、幅14.8cm、厚さ2.6cmを測る。凸面に継方向のヘラケズリ、凹面に布目痕跡が残る。丸瓦は382が長さ37cm、幅15cmであるが他の個体も、おおむねこの法量と推測される。



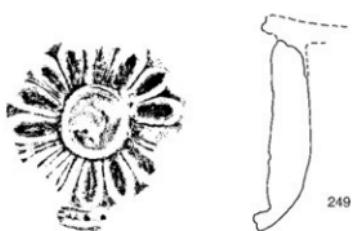
第28図 A地区 木製品



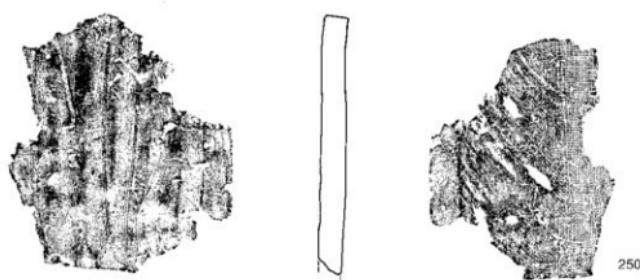
第29図 A 地区 鉄製品 1



第30図 A地区 鉄製品2



249



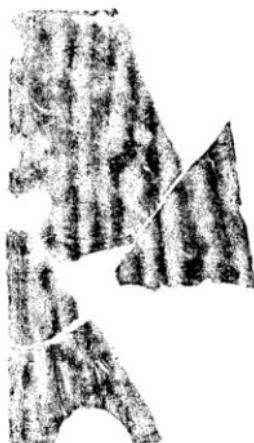
250



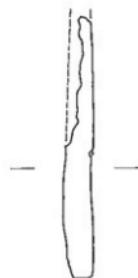
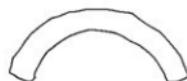
251



第31図 A地区 瓦1



252



253



第32図 A地区 瓦2



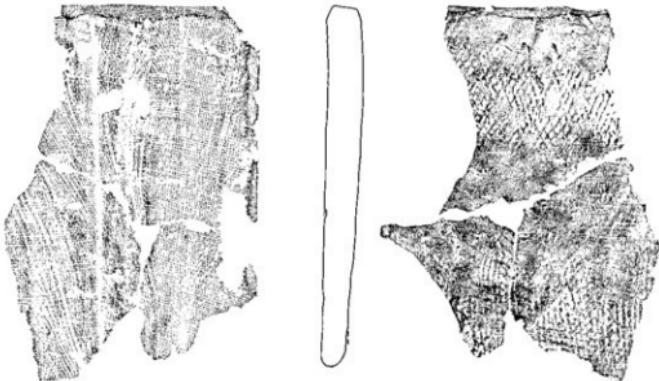
254



255



第33図 A地区 瓦3



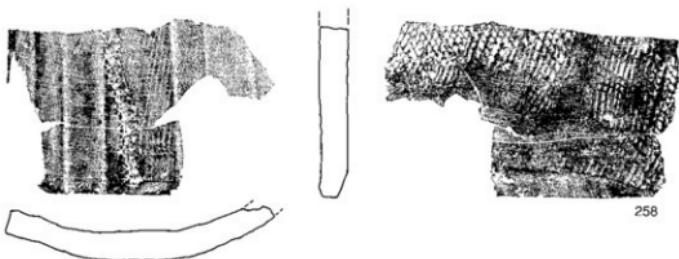
256



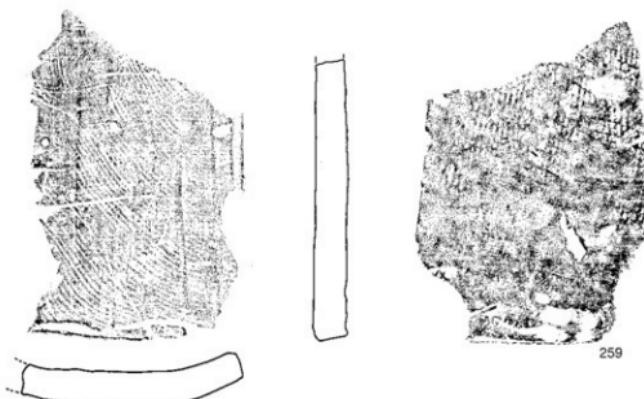
257



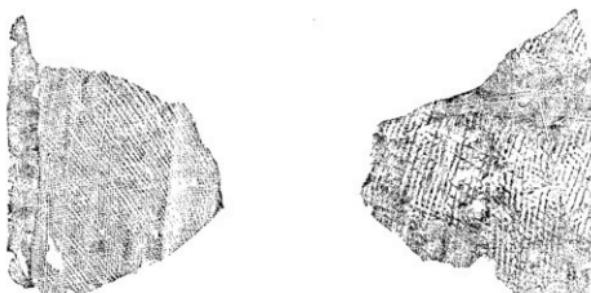
第34図 A地区 瓦4



258



259



260



第35図 A地区 瓦5



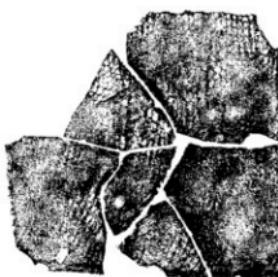
261



262



263



264



第36図 A地区 瓦6

252は凸面に縦方向のヘラケズリが4～5cm単位で施される。凹面に布目痕跡を施す。

平瓦（254～264）はいずれも同一の製作技法で作られる。破片であるため寸法は正確に把握しがたいが、256で観察すると長さ32.7cm、幅22.7cm、厚さ2.6cmを測る。凸面に縦方向のヘラ削り、凹面に網目文様がある。

平瓦の凹面には3cm～4.5cm単位の種痕跡が残る。凹面には布目痕跡と、放射線状のコビキ痕跡が残る。凸面は格子状タタキ痕跡が観察され、横方向へのヘラケズリを施す。

註 金箔の分析は奈良国立文化財研究所において、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所岡本一秀が、同研究所肥塚隆保氏の指導の元に行っている。なお、採取された金箔片は上記埋蔵事務所において保存処理した上で保管している。

## 第4節 小結

### 1. 遺構の概要

A地区では古代・中世の遺構が検出された。このうち中世の成果が圧倒的に多く、12世紀末～13世紀代の時期のものを中心とするが、薬師堂下層区のみは中世後半から近現代まで継続していた。遺構には壇状遺構区および薬師堂下層区の2箇所の堂宇建築を中心に、掘立柱建物・鍛冶炉・焼土土坑・焼土面などがある。遺物は土師器・須恵器や鉄製品・木製品など多種類のものが出土したが、なかでも壇状遺構区から出土した金箔片は焼土層の中に混じって見つかったもので注目される。

一方、古代は7～8世紀代頃の瓦を含む遺物が壇状遺構区から出土している。特に壇状遺構第3面で検出されたSK300からはコンテナ10箱分の7世紀後半～8世紀前半頃の瓦片が出土した。これらの瓦片は同一技法で製作されたもので、軒丸瓦1点を含む丸瓦・平瓦がある。遺構の検出には至らなかったものの、庶民片が付着した400の遺物の存在などから、調査区周囲に瓦を焼成した窯跡が存在したことが推測される。

検出された遺構の時期は各区とも基本的に13世紀前後では共通して機能するようであるが、古代を含めその前後について各区ごとに消長が異なるようである。

まず、壇状遺構区では12世紀後半～13世紀初め頃に平坦地の造成が開始され、13世紀前半には堂宇遺構（第1面）が建てられる。しかし、この壇状遺構区は少なくとも13世紀中頃には埋め立てられ、建物は薬師堂下層区に移転するようである。つまり、壇状遺構区と薬師堂下層区は堂宇建築の移築によって移動したもので、同一時期には存在しないようである。この一方、壇状遺構の第2・3面の段階では堂宇建築は検出されず狭い範囲が使用され、異なる様相をもつようである。つまり、第2面では作業小屋を中心とする鍛冶工房、第3面では掘立柱建物が検出された。このため、もともとこの平坦地は鍛冶工房などの作業場として開発されたものが、のちに拡張され堂宇建築の敷地として再利用されたと考えられるのである。

薬師堂下層区では4棟の建物を復原したが、SB6（最後の建物）は近代以降、SB7が15世紀以降であることが出土遺物から判明している。また、遺構の前後関係からはSB9→SB8→SB7の順に建っていたことが遺構の切り合いや、検出状況から明らかにできた。従って、それぞれの時期はSB9→SB8

が確実に中世で、SB 7 が15世紀から近世頃、SB 6 が近代以降と推測できる。

さらに、遺物の時期からは、最も古いものが土器溜りの13世紀前半代。この他、包含層遺物に14~16世紀の遺物が含まれ、現薬師堂の基礎部分から近世以降（寛永通宝などを含む）の遺物が少量出土している。のことから建物は4棟の復原に止まり、時間的な断絶がないとは断定できないが、同一地区に数度の堂宇建築が建った事実からすると、建物は13世紀以降継続し、現在の薬師堂が最後に建てられるまで建て替えを繰り返しながら、現在に至ったのではないかと推測される。（ただし、SB 9 は掘立柱建物で規模も小規模であるため、堂宇建築とは考えられない。）

また、薬師堂下層に形成された平坦地は、現在150m<sup>2</sup>ほどの広さとなっているが、SB 8 や土器溜りが敷地西側に立地する点から、13世紀の早い時期からほぼ現在の広さに造成されていたと思われる。

矢の谷区や堂山東麓区では谷中の湿润で地盤が軟弱な場所にも関わらず掘立柱建物が立地していた。しかしこれらの建物遺構は短期間で廃絶したと思われ、堂山東麓区では12世紀末頃、矢の谷区では13世紀初頭の一時期に限られたようである。（ただし、矢の谷区周囲からは中世後半の遺物も出土するため、この時期にも何らかの遺構が存在した可能性が残されている。）

## 2. 遺物の様相

中世の遺物は堂宇建築周辺を中心に多量に出土した。全体的には土師器が多く、特に皿類が目立った。さらに、土師器には皿・杯などの供膳具や、壺・釜・甕などの煮沸具がある。皿は壇状遺構周囲の炭層や、薬師堂下層の土器溜りを中心として出土している。以下、各地区毎の土器様相を見てゆきたい。

壇状遺構区では埋め立て後の第0面を含めて4時期が推定された。しかし、これらの遺物群の中心は質・量ともに第1面前後にある。特にSB 1が建築された前後の土器量は当地区全体のなかでも大きな割合を占めている。そして、第1面の土器は大きく①SB 1周辺の炭層と②SB 1上の焼土層、③埋納關係の遺物に分かれるが、①・②は細片が多く図化できたものは少量に限られた。遺物を器種ごとにみると土師器の皿・杯・托の3器種が大勢を占める。杯は杯Aと杯Bが共存し、皿は小皿A・Bが共存し、中皿ではAが圧倒的である。また法量では中皿が口径11~16cm前後（ただし、中心は12~13cm前後の小型品がある）、小皿が口径8cm前後である。大型の中皿Aは第1面以後では認められなくなり、以後は小型化の傾向がある。そしてタイプも中皿Cに移行する。その他、煮沸具は少数であるが、含まれたものを観察する限りでは甕が含まれず、壺Bのみで構成されている。（図化した物はない）また、須恵器についても碗は碗Aが多く、100や101などのようにわずかに内面底部の段の痕跡を残すものが含まれた。

第2・3面については遺物量が減少する。しかし土師器杯は杯Aのみで構成され、皿も中皿A・Bが大半を占め、中皿Cは含まれない。また、小皿では小皿Aの含まれる比率が上層よりもやや高くなる。須恵器は個体数が少なく皿・碗・鉢をわずかに数えるのみである。

薬師堂下層区では土師器中皿Cが大勢を占める。皿Cは壇状遺構第1面以降量が増加する傾向にあるが、薬師堂下層では大半が中皿Cで占められている。特に図化したものの中では中皿C以外のものは含まれない。また、ここでは須恵器碗の量も減少している。

堂山東麓区では須恵器は碗を中心として多量に出土し、土師器に比べ高い比率を示している。一方、土師器も量的には一定量出土するものの、煮沸具の割合が高く、碗・皿などの供膳具は少數に止まっ

た。そして、土師器小皿は糸切り底のものが多く、煮沸具に甕の占める割合が高いなどの傾向がみられ、他地区とは異なる点が多い。さらに、この地区では唯一瓦器椀が出土している。須恵器では椀にいわゆる碗形のものが多く、内面底部に段を持つ個体が少数ながら含まれた。

矢の谷区から出土した遺物は時期を特定できるものは少ない。細片までを観察する限りでは土師器(皿など)の比率が高く、中心を占めている。SB11のP8から出土した中皿Bなどから13世紀前半頃としておきたい。ただし図化した遺物には須恵器碗Bとなるものや唐津焼・中国産の染付磁器などさまざまなもののが含まれる。途中の断絶はあるものの、16~17世紀に再び土地利用が始まったのではないかと推測され、この周辺が長く利用されたと思われる。

### 3. 各地区的時期

各地区的遺物概要を説明したが、これら全体の遺物を通して時期をまとめると、次のようになる。まず、壇状造構区の第2・3面と堂山東麓区が最も古い。遺物からこの時期は12世紀後半~末頃と考えられる。次は、壇状造構区第1面と矢の谷区のSB11がある。時期は13世紀前半頃である。さらには、薬師堂下層区の土器窪りおよび壇状造構区第0面の土器集中地點が13世紀中頃と推定される。これ以降は薬師堂下層区が継続するのみで、A地区には生活の痕跡はない。

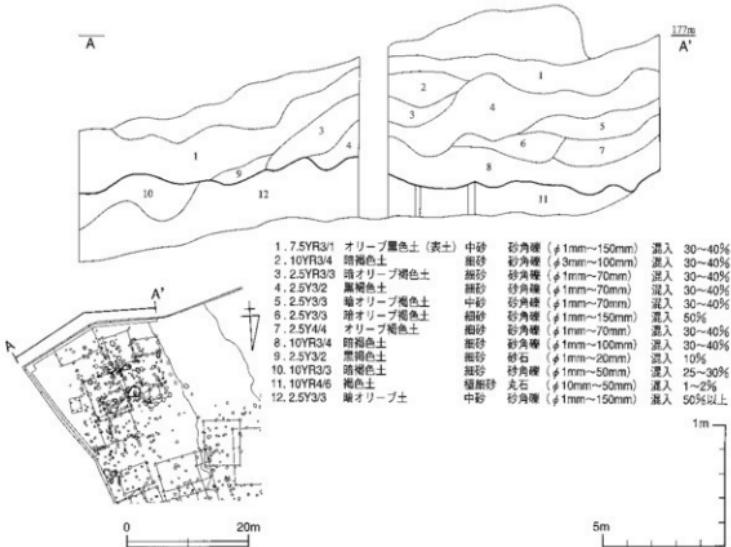
## 第4章 B地区の調査成果

### 第1節 地区概要

B地区は、南北約70m、東西最大約25mの不整形な台形を呈し、今回の発掘調査で最も広い面積(2,953m<sup>2</sup>)の地区である。そのため拡張区を含めて調査区を第39図のように11の地区に分けて調査を行った。

調査区の東側を中心として、ほぼ全域で遺構を検出した。調査区の西側は背後の山地から伸びる山裾斜面となっており、調査区の東約400mにある円山川へと緩やかに傾斜する地形となっている。これは、調査区が山地からの土砂流出によって形成された地形に位置しているからである。土砂流出の範囲は調査区の西側南部(1区～4区)を中心とするもので、この部分では数十cmにわたる礫層の堆積が認められる。礫層は1区から6区へと堆積の厚さを減少させながら、調査区を横断して広がる。そのため、この礫層が分布する1区～6区および拡張区においては、礫層を境として上面で12世紀～13世紀頃、下面で9～11世紀の遺構面が存在した。土砂の堆積は中世段階でおきており、下面においても中世の遺構を検出している。しかし、5区・6区・拡張区では礫層の堆積が薄いため、上面と下面の区別がつきにくく部分的に同一面での遺構検出となっている。そのほかの地区(7区～10区)においては礫層の堆積がほとんどないため、遺構面の検出は1面となっている。

この地区からは、掘立柱建物20棟、墓2基、集石遺構2基、焼土、土坑、溝、柱穴が確認された。以下それぞれの遺構について述べる。



第37図 B地区 南壁断面図

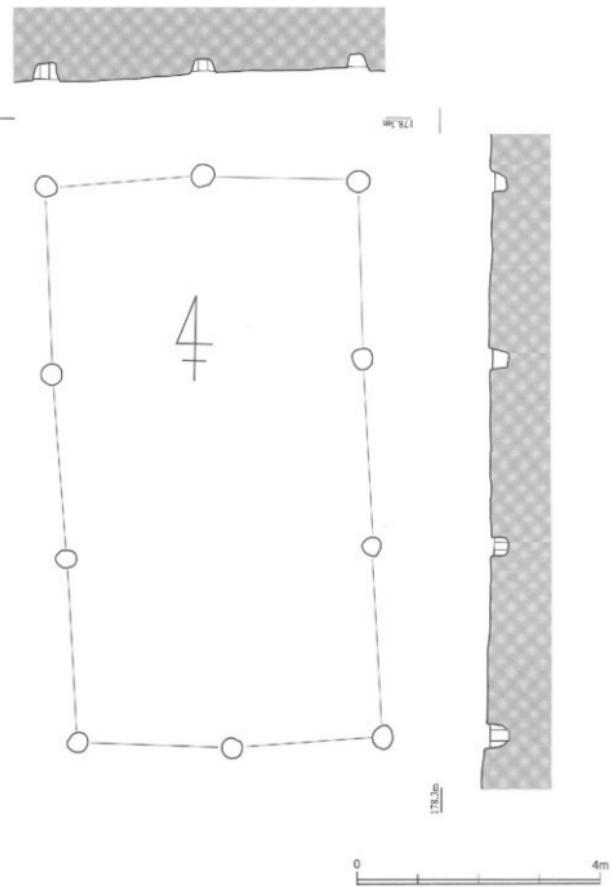
## 第2節 遺構

遺構面は上下2面が存在する。しかし、上面が存在するのは前述したように礫層が覆い被さっている部分だけであり、それ以外の地区は基本的に遺構面は1面であった。

### 1. 挖立柱建物

SB 1

3区中央にある3間×2間(9m×5m)、南北棟の側柱建物である。柱穴は直径30cm~40cm前後、



第38図 B地区 SB 1



第39図 B地区 全体図

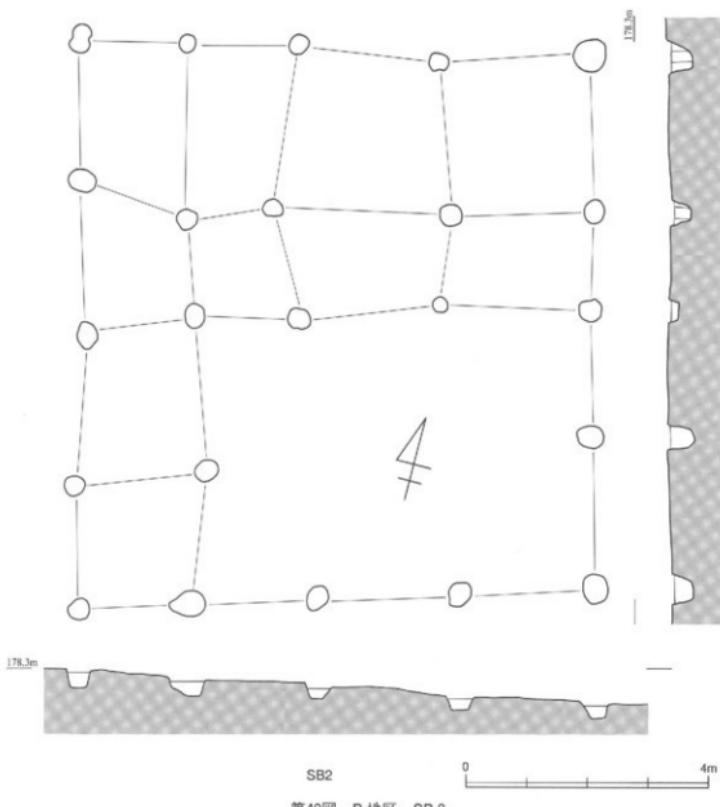
柱通りは比較的良好く、身舎の柱間は桁行が3.1m、梁行が2.4mである。柱穴の断面から、柱痕が確認でき、柱の太さは16~20cmである。柱穴から須恵器鏡 A が出土した。11世紀終わり~12世紀ごろの建物である。

#### SB 2

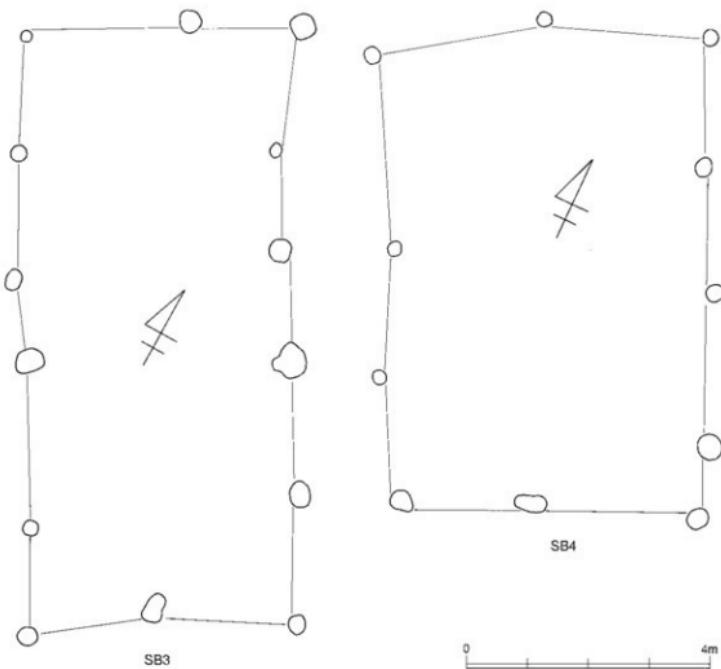
5区と6区にまたがる4間×4間（9m×8.5m）、南北棟の総柱建物である。一部柱穴を欠くため、土間があった可能性も考えられる。柱穴は直径40cmほどである。柱痕の残りは悪いが、検出できた柱の太さは約20cm前後である。SB7・SB16と一緒に構成する建物であり、その中心となる建物である。床面積は76.5m<sup>2</sup>であり、B地区で検出した建物で最も大きなものである。中世の建物である。

#### SB 3

5区、6区にある5間×2間（10m×4.4m）、南北棟の側柱建物である。柱穴は30cmほどの円形をしている。柱通りは悪く柱穴の間隔も均等ではない。SB14・SB15の柱穴を切って建てられている。中世の建物である。



第40図 B地区 SB 2



第41図 B地区 SB3・4

#### SB 4

8区にある3間×2間(8m×5m)、南北棟の側柱建物である。柱穴は直径30cm~40cm前後、柱通りは良い方である。柱間は桁行が2mと3.2m、梁行きが2.2mと2.6mを測る。SB15の柱穴を切って建てられており、中世の建物と考えられる。

#### SB 5

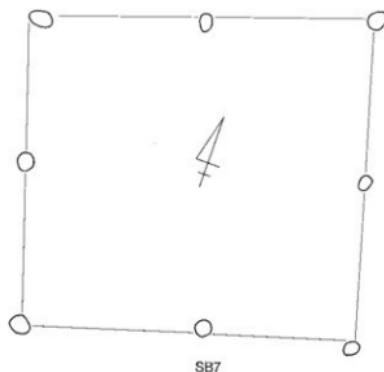
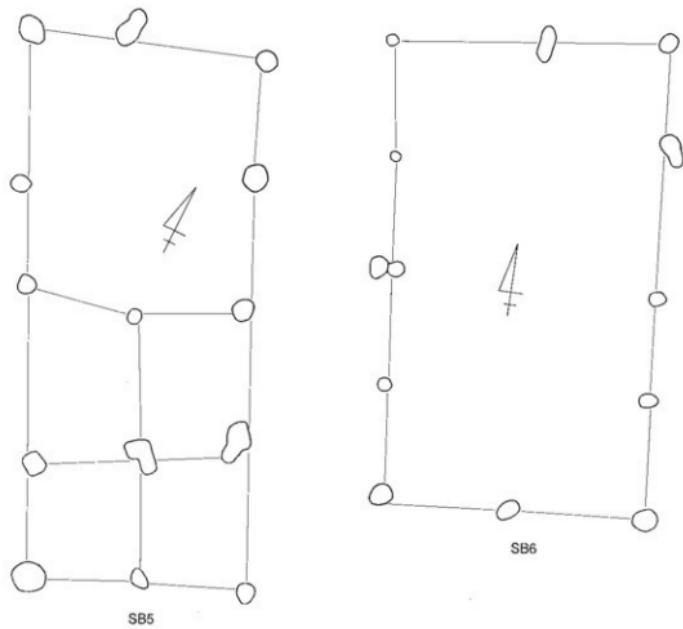
6区と9区にまたがる4間×2間(9m×3.6m)、南北棟の側柱建物である。柱穴は直径40cm前後、比較的柱通りは良い。建物の南部分が総柱となっているため、この建物は調査区東外側に伸びる総柱建物であった可能性もある。柱穴から出土した須恵器皿から、9~10世紀の建物と考えられる。

#### SB 6

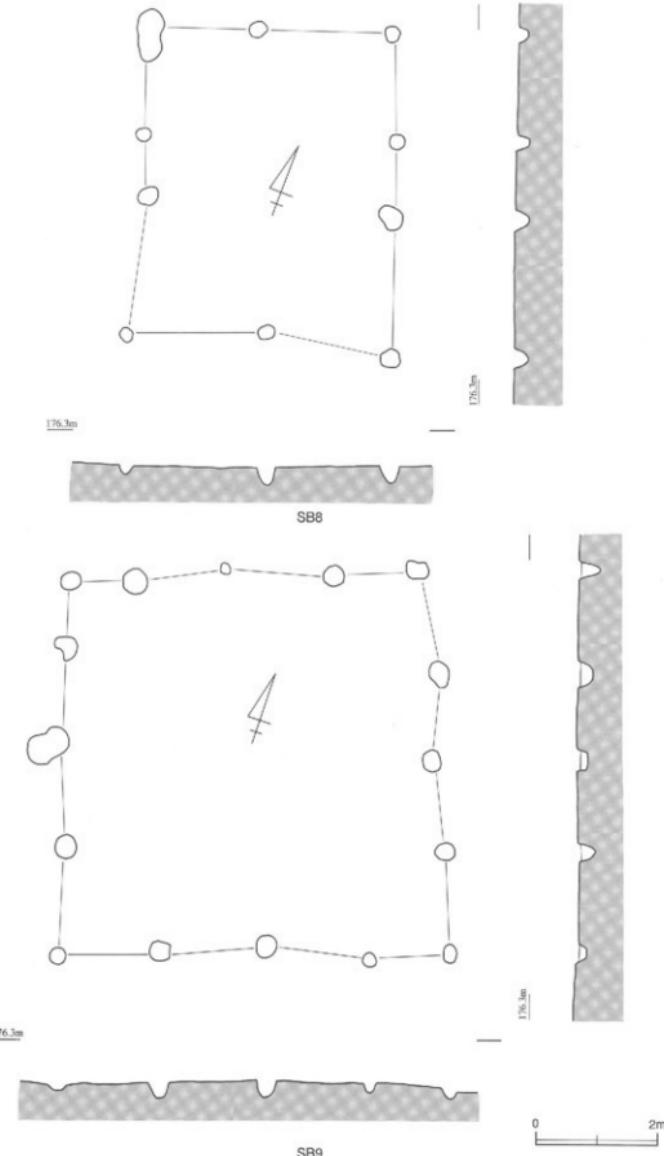
8区にある4間×2間(8m×4.2m)、南北棟の側柱建物である。柱穴は直径30cm~40cm前後、柱通りは良い方である。柱間は桁行きが1.8mと2.4m、梁行き2.1mを測る。SB1・SB11とは同じ棟方向をとる中世の建物である。

#### SB 7

8区にある2間×2間(5.6m×5.2m)、ほぼ正方形の建物である。建物の中心に同規模の柱穴があり総柱建物になる可能性があるが、若干ずれるためここでは側柱建物として復元した。柱穴は直径



第42図 B地区 SB5・6・7



第43図 B地区 SB8・9

30cm~40cm 前後、柱通りは比較的良い。柱間は桁行きが2.6mと3m、梁行きが2.6mとなる。

#### SB 8

拡張区にある3間×2間(5.4m×4m)、南北棟の側柱建物である。柱穴の直径30cm~40cm前後、柱通りは悪く、若干南に広がる平面形となる。桁の長さも東西で異なり、柱間も等間隔にならない。そのためSB 8は住居ではなく、小屋のような簡易な建物であったと考えられる。また、建物の南東隅から焼土1を検出した。

#### SB 9

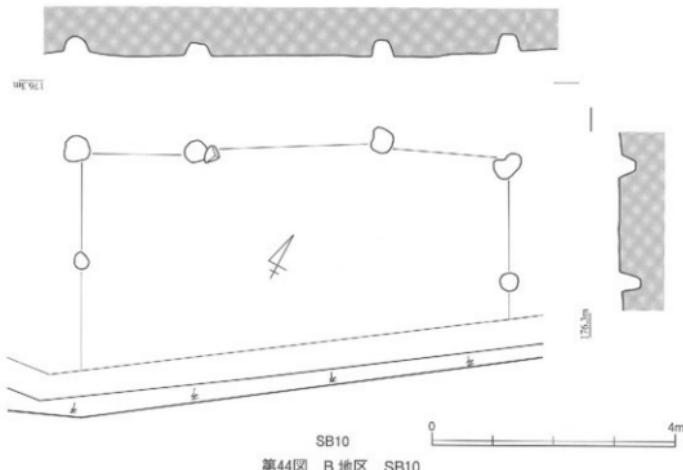
拡張区にある4間×4間(6.2m×6m)のほぼ正方形の建物である。柱穴の直径20cm~40cmであり、柱通りは比較的良い。しかし、柱間にはばらつきが多く桁行、梁行共に1m~1.8mの間隔を持つ。SB 8と同様に建物の南東隅に焼土5を検出したが、建物に伴う遺構かどうかは不明である。SB 9は他の建物と比較すると出土遺物が多く、須恵器の椀B・皿、土師器壺C等があり、13世紀の建物と考えられる。

#### SB10

拡張区南端にある4間×2間以上(7m×3.6m以上)の側柱建物である。建物が調査区外に延びるため、柱穴の全てを検出することはできなかった。検出できた柱穴の直径は約40cmである。SB 8やSB 9と同じく柱間が等間隔でないため、小屋であった可能性が高い。建物内から焼土6を検出した。

#### SB11

7区あり、4間×2間以上(7.6m×1m以上)の建物である。柱穴は直径約30cmの円形を呈しており、柱通りは良い。SB 1・SB 6と棟方向を同じくする。7区は山側を削り込み平坦面を作っているが、東側部分が後世に削り取られているため建物の一部を検出したにすぎない。建物の西側には溝2が巡っている。南西部には半坦面を区画するような溝3が巡っている。この平坦面からは多数の柱穴が検



第44図 B地区 SB10



第45図 B地区 SB11

出されているため SB11以外にも建物が存在したと考えられる。

#### SB12

10区にある2間×2間（3m×3m）、正方形の建物である。柱穴の直径50cm～60cm、柱通りは良く柱間は1.5mである。柱穴の大きさや並びなどの構造から古代の倉庫と考えられる建物である。

#### SB13

3区と5区にまたがる3間×3間（7.4m×6m）の南北棟の側柱建物である。柱穴は直径30cm～40cm、柱通りは良い。しかし桁行きの柱間が2m～3mとばらつきがある。建物内から焼土4を検出している。またSB13は疊層の下より検出したため、SB1・SB2に先行する中世の建物である。

#### SB14

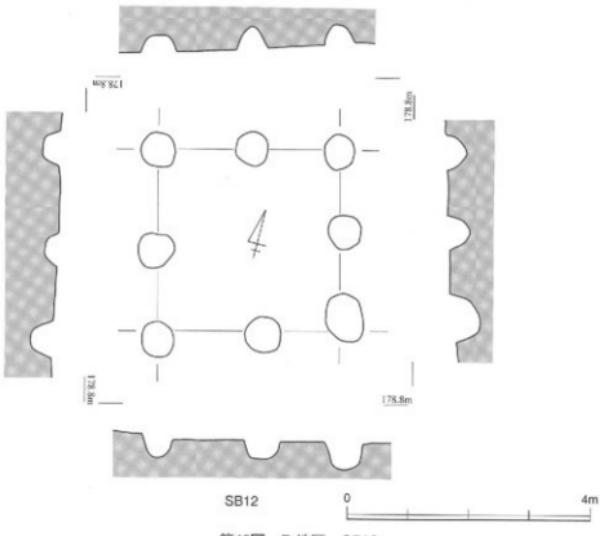
5区にある2間×2間（5.2m×3.8m）の東西棟の側柱建物である。柱穴の直径は40cm～60cm、柱通りは良い。柱間は桁行き2.6m、梁行き1.8mと2mとなっている。柱穴から11世紀後半～13世紀ごろの托Aが出土している。

#### SB15

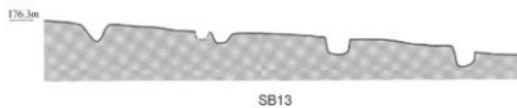
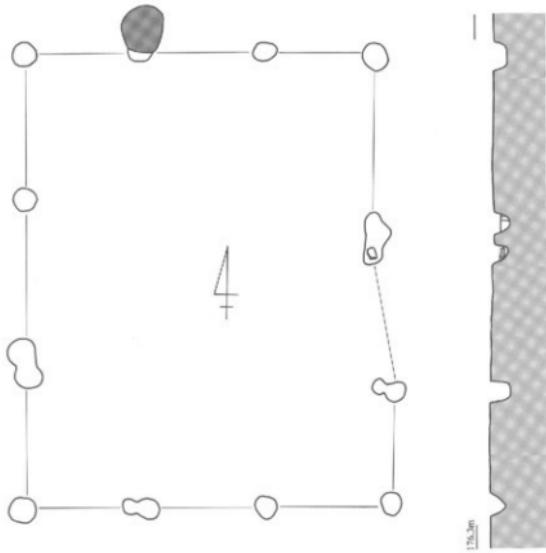
6区にある4間×3間以上（10.4m×7m以上）の総柱建物である。柱穴は直径約50cmの楕円形を呈しており、柱通りも良い。検出した範囲での床面積は約73m<sup>2</sup>あり、SB2に次いで大きな建物である。このことから、集落の中心的な建物と考えられる。また、柱穴の切合いからSB3・SB4に先行する中世の建物である。柱穴から土師器壺が出土している。

#### SB16

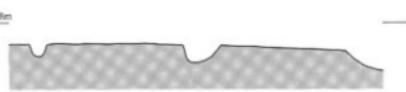
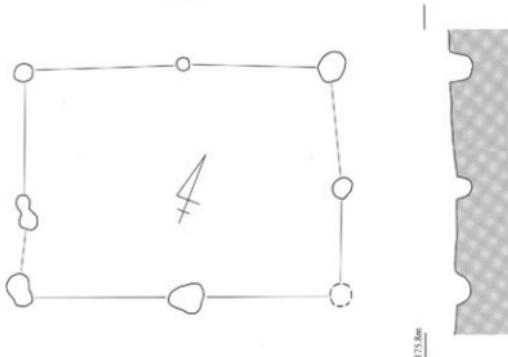
6区にある3間×2間（7m×5.6m）の側柱建物である。柱穴の直径は30cm～40cmの円形を呈し、



第46図 B地区 SB12

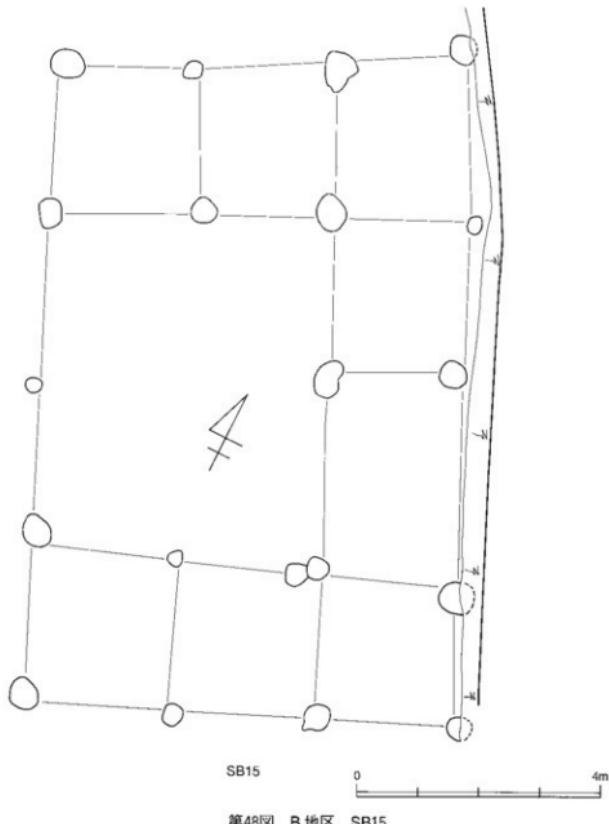


SB13



SB14  
第47図 B 地区 SB13・14





第48図 B地区 SB15

柱通りは良い。建物内に焼土2を検出した。また、建物のすぐ西側にも焼土を5箇所検出している。SB16からは、須恵器皿・檻が出土しており、これらの遺物からSB16は12世紀～13世紀の建物と考えられる。  
SB17

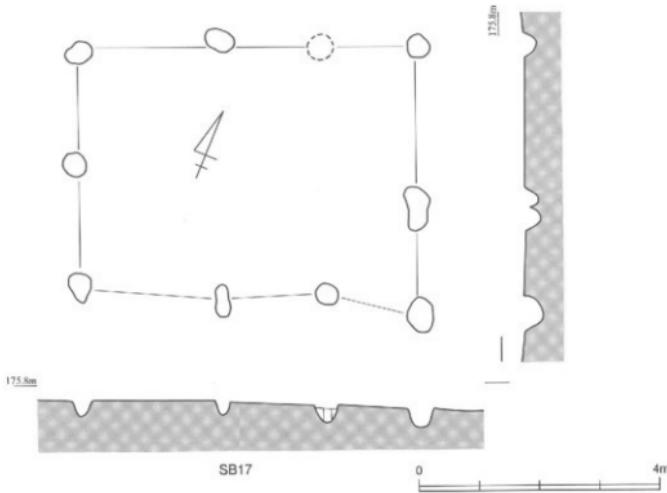
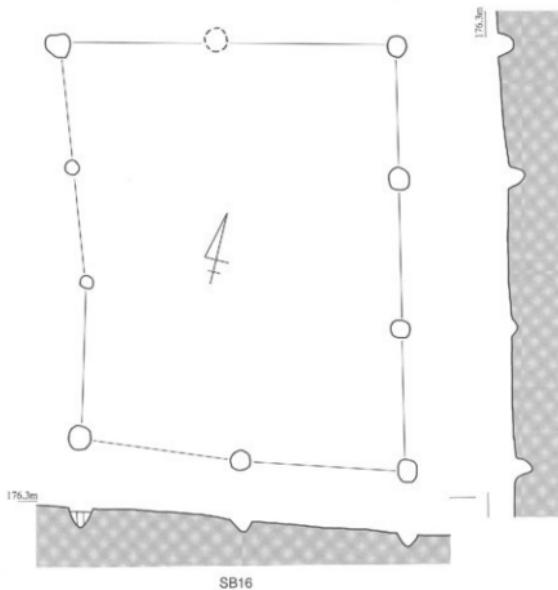
拡張区にある3間×2間（5.6m×4m）の側柱建物である。柱穴の直径は40cm～50cm、不整形な梢円形を呈している。柱間は桁行きで1.6m～2.4m、梁行きで2m～2.4mとばらつきがある。

#### SB18

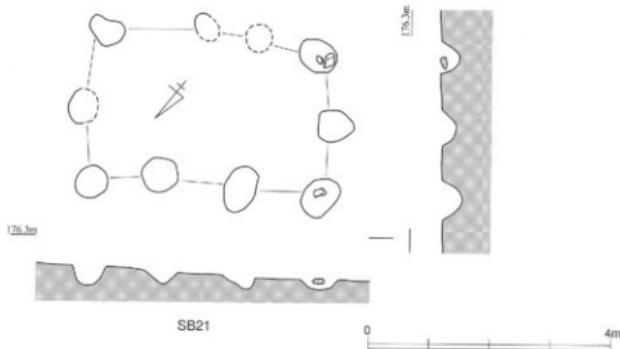
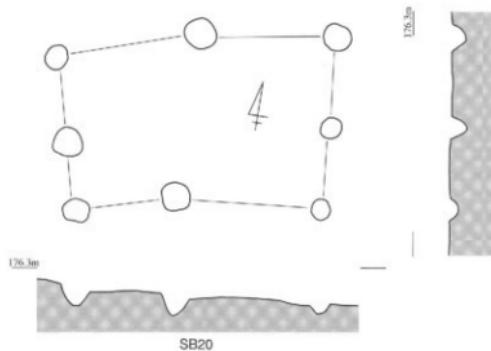
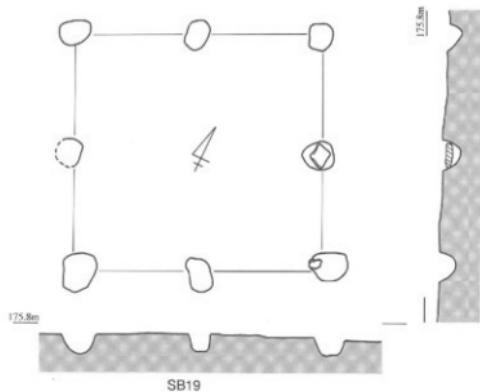
拡張区にある2間×2間（4m×4m）の側柱建物である。柱穴の直径は40cm～60cmあり、不整形な梢円形を呈している。柱通りはよく、柱穴のひとつには模石が据えられている。柱穴から須恵器の蓋・坏Aが出土しており、これら遺物からSB18は9世紀の建物と考えられる。

#### SB19

拡張区にある2間×2間（4m×2.6m）の側柱建物である。柱穴の直径は約50cm、円形を呈してい



第49図 B地区 SB16・17



第50図 B地区 SB18~20

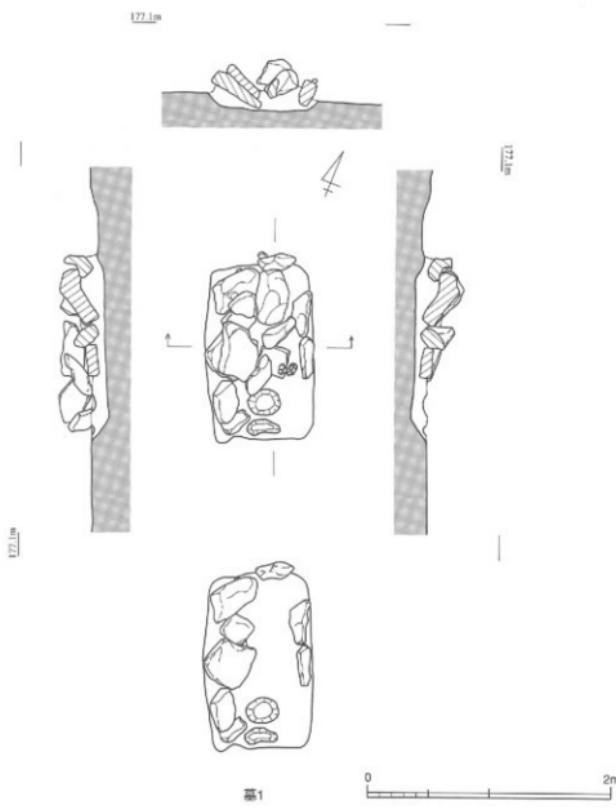
る。柱通りは悪く、柱間は桁行で1.6mと2.4m、梁行は1.3mとなっている。建物の規模が小さく、小屋のような建物であったと考えられる。

#### SB20

拡張区にある3間×2間(3.8m×2.4m)の側柱建物である。柱穴の直径は約60cmあり、梢円形を呈している。柱通りは悪く、柱間が1.2mと極端に狭い。二箇所の柱穴から根石を検出した。

#### 墓1

扁平な石を側石として配し棺としている。現存している墓壙の深さは0.14mである。検出時、側石は外側に広がり、棺内に入りこんでいた。南東隅および、南小口部分の石はすでに無くなっていた。側石が原位置をとっていた時の復原される棺は、長さ1.45m、幅0.9mの長方形となる。棺内からは土師器皿と人骨が出土した。人骨はごくわずかであり、埋葬者の性別や年齢などを知ることはできなかつ

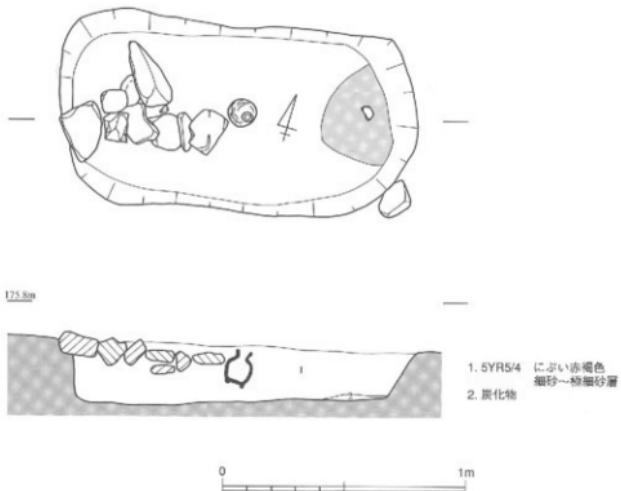


第51図 B地区 墓1

た。出土した遺物からこの墓は12世紀のものと考えられる。この時期、墓1の周辺には掘立柱建物数棟による集落が形成されているため、墓1はこの集落の屋敷墓であったと考えられる。

#### 墓2

拡張区に位置する土壙墓である。土壙は長さ1.47m、幅0.8m、残存部の深さ0.27mの隅丸長方形を呈している。土壙内の西側部分には、遺構検出面に入頭大の石10個が石の上面をほぼ水平に並べられている。石の間隔は隙間無く並べられており土壙を覆うかのようである。また、土壙の東側底部からは炭化物が層をなして体積していた。土壙の中央から短頸壺1点が出土した。遺物はこのほかに、須恵器の碗、甕、土師器の壺、土錐などが出土した。これら遺物からこの土壙墓は9世紀～10世紀のものと考えられる。



第52図 B地区 墓2

### 集石遺構 (SK1526)

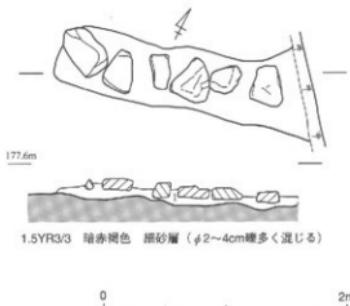
拡張区と5区の境にあり、調査区の東端に位置する。大きさ0.2~0.4m、厚さ0.1mほどの平らな石6点を溝に並べている。石は若干隙間をおいて並べられ、石の上面は水平に揃えられている。溝の深さは0.1mほどであるが、地形的に高くなる西側部分は削平をうけている。溝は調査区外へと延びているが、調査区の壁で石を検出していないので、石列が調査区外へと続くかどうかは不明である。遺構から遺物の出土がなく、時期の特定はできない。

### 溝

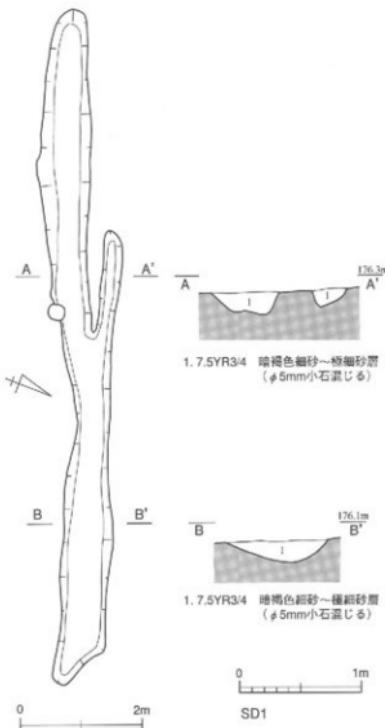
溝は上面で5本検出した。そのうち3本は区画溝と考えられるものであり、残りの2本の性格は不明である。

### SD1

6区に位置し、幅平均0.8m、深さ約0.2mほどの溝である。SB2の北側で東西に長さ11mにわたって検出された。SB2とは若干軸がずれるため、SB2を区画する溝や雨落溝とは考えにくい。少し距離が離れるが、SB14やSB9とは軸が合うため、これらの建物に伴う区画溝であった可能性がある。溝内から遺物の出土がなく時期の特定はできない。



第53図 B地区 SK1526



第54図 B地区 SD1

SD 2

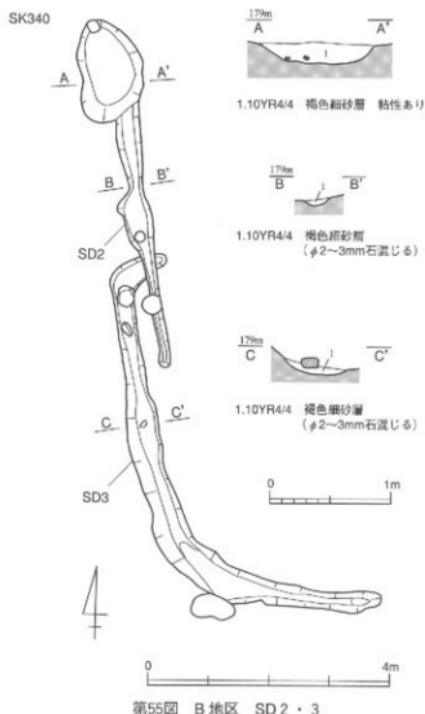
10区に位置する溝である。溝の幅は0.1~0.5mあり、南側にいくにしたがって細くなっている。深さは平均0.1mほどである。溝はテラス状になった平坦面を区画するように巡っているが、若干内側に入りこんでいる。溝の東側1mのところにはSB11があるため、SD 2は雨落ち溝である可能性が高い。

SD 3

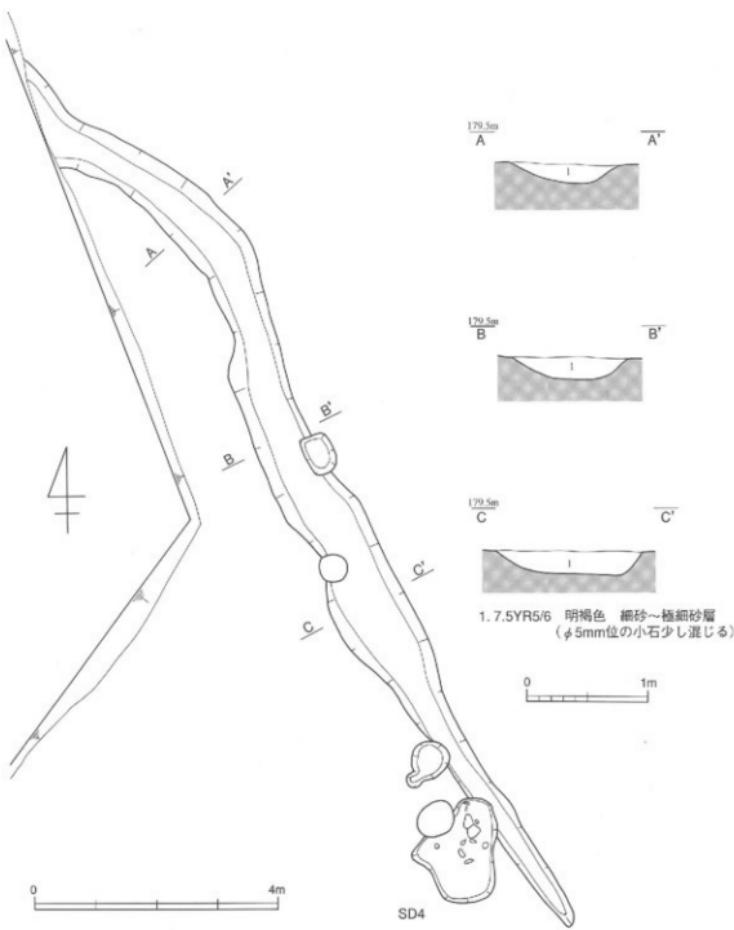
10区に位置し、溝 2 に切られる形で検出した。溝の幅は0.3m~0.6m、深さは平均0.1mほどである。溝は、テラス状になった平坦面を巡っており、南東に向かって下がっていく。平坦面を作り出す時に、区画を明確にし、排水を容易にするために作られた溝だと考えられる。溝から遺物の出土はなく、時期の特定は行えなかった。

SD 4

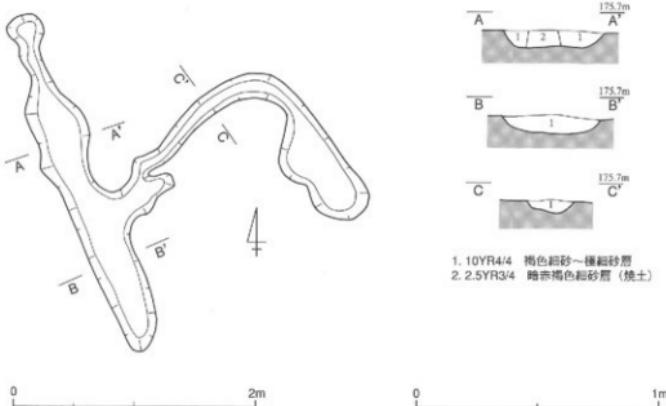
10区に位置し、平坦面へと続く斜面で検出した。溝の幅は約1m、深さは平均0.2mである。丘陵の裾を流れる自然流路である。



第55図 B 地区 SD 2・3



第56図 B 地区 SD 4



第57図 B地区 SD 5

### SD 5

拡張区に位置する。溝は「h」の形をしており、その軸はやや西に傾いている。東側の溝の幅約0.4m、深さ0.07~0.08m、溝の底はほぼ水平である。この溝の埋土からは焼土が検出された。溝の周辺には、掘立柱建物や焼土、用途不明の土坑などが多数検出されているため、これらと何らかの関係を指摘できるかもしれない。しかし、溝から遺物の出土がなく時期の特定が出来ないため、焼土や建物との関係は不明である。

#### 焼土

4区、6区、拡張区で焼土を検出した。焼土は比較的まとまりをもって分布しており、掘立柱建物内に位置する焼土もある。しかし、建物と焼土の関係を示す遺構や遺物を確認できていないため、焼土が掘立柱建物に付随していたかどうかはわからない。また、包含層から羽口の細片や鉄滓が出土しているため、これら焼土が鍛冶と関連していた可能性がある。しかし、鍛造薄片などの物的証拠を示すことができないため、ここでは鍛冶の可能性を指摘するのみにとどまる。

焼土は、主に断面観察によって焼土坑と焼土面の2種類に分類した。焼土坑は焼土面が土坑状に検出され、埋土が存在し多くの場合は炭化物を含む遺構、焼土面は、焼土が面で検出され埋土は存在しない遺構を基準に分類している。

#### 焼土1

拡張区に位置する焼土坑である。掘立柱建物（SB 8）と重なって検出されている。南北に長い隅丸長方形を呈しており、北辺と東辺にそれぞれ0.1mほど突出する部分がある。西辺には東辺の突出と対応する位置に焼土のくびれがある。長軸の長さ1m、短軸の長さ0.7mを測り、断面の形状は皿状で深さは最大0.2mである。土坑の壁は均一に赤化しており、底に多量の炭がたまっていた。

#### 焼土2

6区に位置する焼土坑である。掘立柱建物（SB16）と重なって検出された。焼土坑の平面形は、東西

にやや長い椭円形である。西辺と東辺に突出する部分がある。突出部は、台形を呈し炭がたまっている。長軸の長さ1.08m、短軸の長さ0.94mを測り、断面の形状は皿状で深さは最大0.16mである。土坑の底部には炭が多量にたまっていた。土坑の壁は均一に赤化している。この遺構は下層で検出した。

#### 焼土3

4区に位置する焼土坑である。焼土2の西側約9mのところで検出した。焼土の平面形は、隅丸の正方形である。北辺には、焼土1と同じような突出部分が2箇所あり、先端部分がわずかに東に曲がっている。土坑底部はほぼ水平であり、赤化部分はまばらであった。土坑底部から炭を多量に検出した。この遺構は下層で検出した。

#### 焼土4

5区に位置する焼土坑である。掘立柱建物(SB13)と重なって検出した。焼土坑は不整形な椭円形を呈しており、北辺に突出部がある。深さは最大0.08mである。後世の削平がひどいため焼土坑底部のみを検出したと考えられる。焼土坑の壁の赤化はほとんどみられなかった。焼土には多量の炭が混ざっている。この遺構は下層で検出した。

#### 焼土5

拡張区に位置する焼土面である。掘立柱建物(SB9)と重なって検出した。長軸約0.9m、短軸約0.8mの不整形な椭円形を呈している。焼土の中心部分が良く熱を受け、硬く赤化している。炭や遺物の出土はなかった。

#### 焼土6

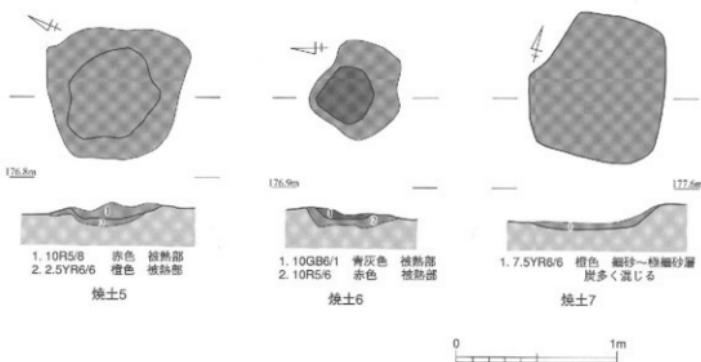
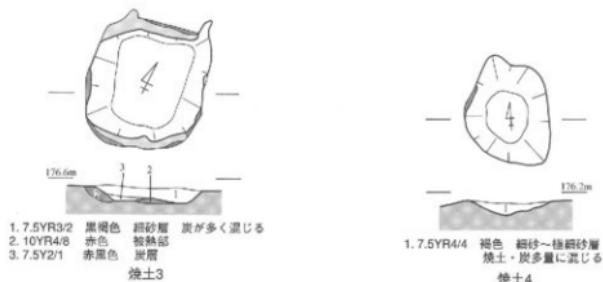
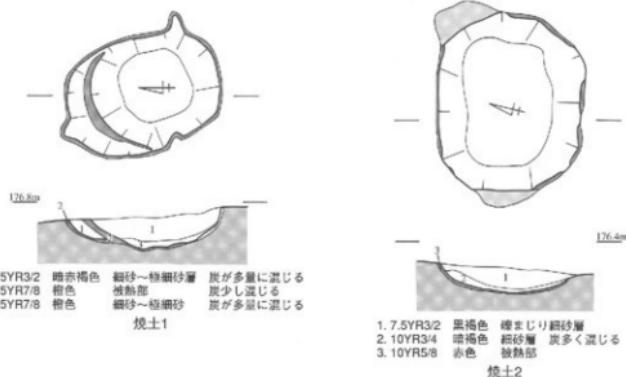
拡張区に位置する焼土面である。掘立柱建物(SB10)と重なって検出した。焼土は不整形な椭円形を呈し、長軸の長さ0.6m、短軸の長さ0.5mを測る。最大0.1mの深さまで比熱部分を確認できた。焼土の中心部分が還元しており、かなりの高熱をうけたと考えられる。遺物の出土はなかった。

#### 焼土7

4区に位置する焼土面である。焼土3の南約4mのところで検出した。焼土の平面形は長方形を呈している。焼土の北西隅が後世の削平によって削りとられている。長軸の長さ0.9m、短軸の長さ0.8m、最大0.03mの深さまで比熱しており、炭が多量に混じっている。遺物の出土はなかった。

#### 焼土8~12

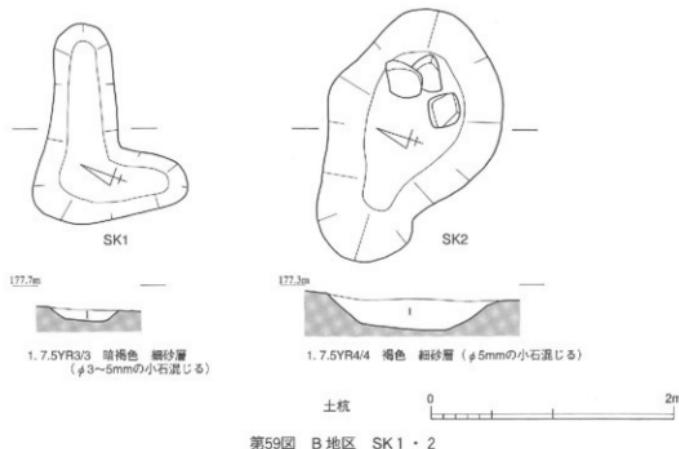
すべて焼土面である。焼土8はSB4に隣接して検出されている。焼土9・10は掘立柱建物が集中している6区でみつかっている。焼土11・12は長さ約1.8m、幅最大0.6mの細長い焼土面として検出した。



第58図 B地区 焼土

## 土坑

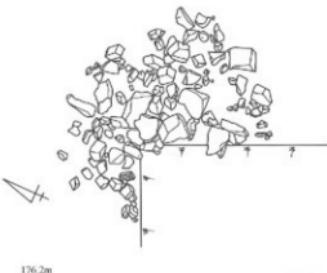
調査区から多くの土坑を検出した。しかし大半の土坑からは遺物の出土はなく、自然地形と考えられたため現地での実測は行っていない。SK1・SK2はともに8区で検出された土坑である。SB7の北側に隣接して掘られている。SK1はL字に曲がった比較的浅い土坑であるが、8区は水田開発ため後世に削平が行われているので、SB7にともなう溝であった可能性も考えられる。SK2は土坑の底に石が据えられているが、遺物の出土はなく性格は不明である。



第59図 B地区 SK1・2

## SX1

5区で検出された集石遺構である。一部攪乱坑で破壊されているが、長辺180cm、短辺90cmの範囲に石が集められている。石の下部には厚さ20cmほどの盛り土があるが、土坑などの遺構は検出されなかつた。集石の間からは古代の土器が出土した。



1. 10YR4/6 暗褐色 細砂層  
( $\phi$ 3~5mmの小石混じる)  
2. 10YR6/6 明黄褐色 細砂～極細砂層

第60図 B地区 SX1

## 第3節 遺物

### 1. はじめに

遺物は遺構からの出土と包含層から出土のものがある。遺構から出土した遺物の数は相対的に少ない。包含層から出土した土器は、遺構出土遺物より相対的に多く、比較的残りの良い遺物もあった。またB地区は、土砂によって層位が大きく乱れているため、包含層出土遺物は上層・下層とともに新旧の遺物が混在している。出土した遺物の年代は縄文・弥生時代、古代・中世など多種にわたる。

### 2. 縄文・弥生土器

上層の包含層から縄文土器と弥生土器が出土した。時期は縄文晩期と弥生前期の土器と考えられる。

縄文土器は3点を図化した。265は深鉢の口縁部である。外面には条痕紋が施されており、口縁部分に孔が2ヶ所あけられている。266は丸底深鉢の底部であり、条痕紋が施されている。267では刻み目突体紋が施されている。

弥生土器は2点を図化した。268は削りだし突体がある土器片である。269は甕の口縁部である。2条の沈線がある。

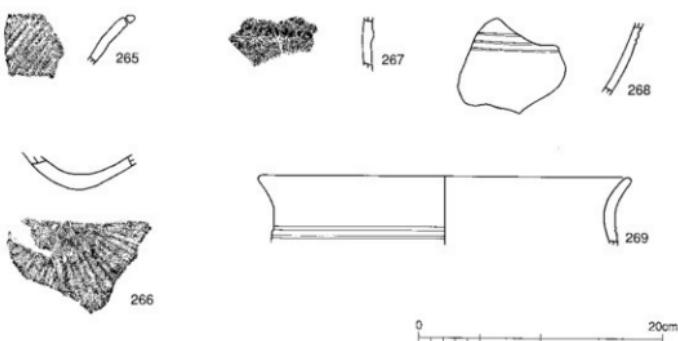
### 3. 古代中世の遺物

#### 掘立柱建物柱穴

建物を構成する柱穴からいくつかの遺物の出土があったがいずれにしても少数である。このため建物個々の時期を詳細にできなかったものが多い。

#### SB 1

P116から出土した須恵器焼A270が図化できた。内面の見こみに段を持つ個体で、底径6cmを測る。



第61図 B地区 縄文・弥生土器

時期は12世紀頃の製品と考えられる。

#### SB5

P781から出土した須恵器皿271が図化できた。輪高台をもち、口縁端部は外側に屈曲する。口径14.0cm、器高2.6cm、高台径6.6cmを測る。9～10世紀頃の製品である。

#### SB9

P1053出土した須恵器碗B(272)・P1342から出土した壺C(273)・P853から出土した須恵器皿(274)の3点がある。272は口縁が底部から体部にかけて湾曲しながら立ち上がる個体で、口縁端部外面に重ね焼きの痕跡を残す。273は体部内面および外面上半を横ナデ調整で仕上げている。外面は胴部から下半にタタキ痕跡を残す。口径21.0cmを測る。274は口縁端部に面をもつ個体で、口径10cm、器高3.6cmを測る。272・273は13世紀代の製品であるが、274は9～10世紀頃の製品である。前者2点の時期から建物は13世紀代の遺構と考えられる。

#### SB13

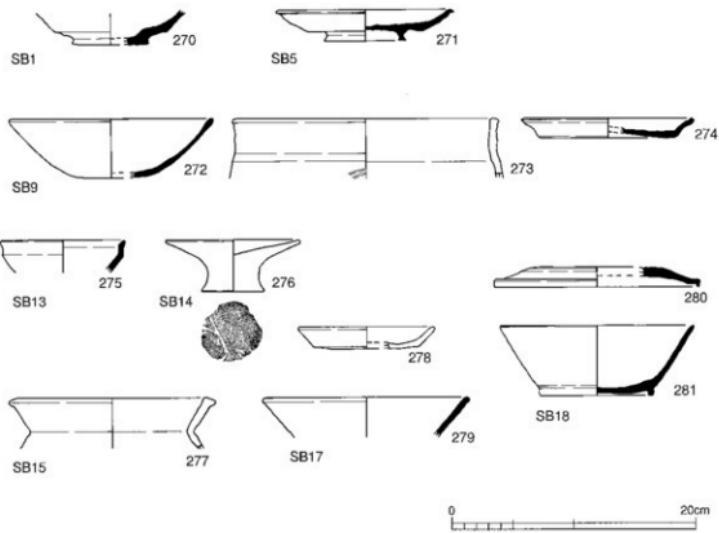
P923から出土した須恵器壺275の1点を図化した。口縁端部が「く」字に屈曲し、体部は丸みをもっている。口径10cmを測る。

#### SB14

P868から出土した托A276の1点を図化した。底部は糸切り。平高台で内面の段はなくなっている。口径10cm、器高4.2cm、底径5cmを測る。遺物の時期は12世紀後半～13世紀前半頃のものである。

#### SB15

P980から出土した土師器壺277の1点を図化した。「く」字形の口縁部をもち、口縁端部を外側に拡



第62図 B地区 遺構出土遺物1

張する。口径15.5cmを測る。時期は12世紀後半頃のものである。

#### SB16

P854から出土した土師器皿278・須恵器碗279の2点を図化した。278は底部と体部の境目が明瞭で、口縁は直線的に開き、内部にわずかに煤が付着している。口径10.7cm、器高1.8cmを測る。279は体部が直線的に開き、口縁端部外面に重ね焼きの痕跡を残す個体である。口径16.6cmを測る。両者とも12世紀後半～13世紀前半頃のものと考えられる。

#### SB18

P1292から出土した須恵器蓋280・坏B281の2点を図化した。280は体部がやや丸みをもち、口縁端部を屈曲させる。口径16.7cm、器高1.6cmを測る。281は内外面はナデ調整。体部はほぼ真っ直ぐに立ち上がる。口径15.9cm、器高5.8cm、高台径9.2cmを測る。両者とも9世紀前半頃の製品と考えられる。

#### 遺構

##### 墓1

土師器中皿282の1点がある。中皿は手づくねで成形後、ナデ調整を行う。口縁部は極端に直立する。

##### 墓2

須恵器壺B283・壺285・甕287・土師器甕284・土鍾286の5点がある。

須恵器碗B283は底部が糸切り、見込みの落ち込みは小さく口縁部は内湾しながら開き、端部は外反し丸く仕上げている。口径15.9cm、器高5.3cm、高台径6cmを測る。甕285は卵形の体部をし、頭部はやや外反する。底部は輪高台。口縁端部は上方につまみあげる。法量は口径6.1cm、器高14.5cm、高台径6.5cmを測る。甕287は口縁部を外側に折り返し、板状に肥厚した口縁部をつくる。2本の波状文を持ち、波状文の下には凹線を巡らしている。口径46.4cmを測る。

土師器甕284は口縁部が短く「く」の字に外反する。体部外面に継ハケを施す。土鍾286は手づくねのあとナデ調整で仕上げる。法量は長さ4.3cm、幅1.3cm、重さ7.9gを測る。これらの遺物の時期は10世紀～11世紀頃と考えられる。

##### SX1

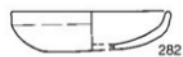
須恵器壺A288・坏B290・291・甕292・土師器坏A289の5点が出土した。288は底部をヘラ切り後、軽いナデ調整を施し、内外面ともにナデ調整で仕上げる。口径16.9cm、器高3.6cm、底径9.8cmを測る。須恵器壺B290・291はともに輪高台がハの字に踏ん張るもので、291では底部の境付近に高台をもつ。高台径8.4～11.4cmを測る。土師器杯A289は内外面を横ナデ調整し、底部は未調整である。口縁部にやや強めのナデを外反気味に施すため口縁部下半に屈曲をみせる。内面にはミガキ調整が観察される。口径13.7cm、器高2.7cm、底径10.6cmを測る。

須恵器甕292は口縁部が短く「く」の字に外反する。体部外面には右上がりの平行タタキを施した後、若干の微調整を行っている。口径24.5cmを測る。

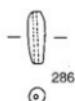
##### SK20

土師器皿293の1点を図化した。底部はヘラ切り後未調整。口縁部は直線的にのびる。口縁部に一度強い横ナデ調整を施し、体部外面に凹を持つ。口径11.8cm、器高2.4cm、底径6.3cmを測る。時期は12世紀頃のものである。

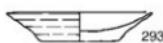
##### SK698



墓1



墓2



SK20



SK698

SX1



SK56



第63図 B地区 遺構出土遺物2

須恵器坏294の1点を図化した。ヘラ切りの底部をもち、口縁部はわずかに外反して開く。内外面はナデ調整。法量は口径12cm、器高3.4cm、底径6.8cmを測る。

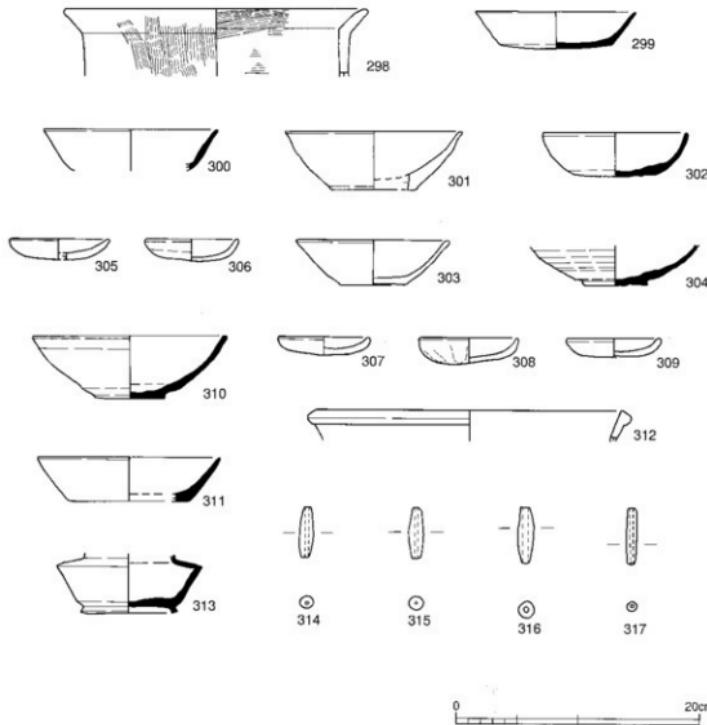
#### SK56

土師器坏295・堀297・綠釉陶器皿296の3点がある。土師器坏295はヘラ切りの底部をもち、口縁部は直線的に開く。口径12.4cm、器高3.7cm、底径6.3cmを測る。堀297は内面は横ハケを施し、外面は縱ハケを施す。口縁端部に面をもつ。口径36cmを測る。

綠釉陶器皿296は口縁部がわずかに外反するもので、口径16.7cmを測る。色調はやや淡い黄緑を呈し、胎土は精良である。これらの遺物の時期は9~10世紀前後と考えられる。

#### 建物以外の柱穴

掘立柱建物を復原した柱穴以外からも土器が出土している。これら柱穴出土の土器は細片を含め280点以上あるが、図化できるものは限られた。図化した土器には土師器小皿B・椀A・椀B・堀・壺・須恵器坏A・椀B・壺・土錘などがある。



第64図 B地区 遺構出土遺物 3

土師器小皿Bは305(P765)・306(P765)・307(P1078)・308(P1078)・309(P1078)の5個体がある。いずれも体部と底部の境目が不明瞭な個体で、口縁端部を丸く終える。口縁端部を横ナデ調整し、底部には指頭痕跡を残すものが多い。特に308では顕著に指頭痕跡を観察できる。口径7.3~9.5cm、器高1.5~2.1cm、底径5.4~6.1cmである。

椀Aは301(P667)の1点がある。底部糸切りで、体部上半で軽く屈曲を持つ。口径14.3cm、器高4.8cm、底径6.8cmを測る。椀Bは303(P789)の1点がある。底部は糸切りで、口径12.4cm、器高3.2cm、底径5.4cmを測る。底部から口縁部が直線的に開き、口縁端部がやや外反する。

壺312(P1078)は口縁端部を外側に折り返し、玉環状の口縁端部を作っている。口径25cm、器高2.5cmを測る。壺298(P6)は口縁部が小さく「く」の字に折れ、端部は丸く仕上げる。体部外面には継ハケ、口縁部内面には横ハケを施す。口径24.7cmを測る。

須恵器壺Aは299(P57)・311(P1291)・302(P721)の3個体がある。299は底部をヘラ切り後、未調整で体部から上半は横ナデ調整し、口縁端部を外方につまむ。外面とともに火燐が観察される。311(P1291)は体部が直線的に立ち上がる個体で、同じく外面に火燐が観察される。299・311の2個体は底部と体部の境が明瞭で類似した器形である。この2個体の法量は口径13~14.9cm、器高3~3.6cm、底径8~10cmを測る。302(P721)は体部が丸く内弯しながら立ち上がる個体で、底部がヘラ切り後未調整で、外面とともに横ナデ調整を施す。口径11.7cm、器高4.8cm、底径6.8cmを測る。

椀は300(P65)の1点がある。体部が直線的に立ち上がり、口縁端部はやや外反する。体部外面に火燐を観察する。口径14.2cmを測る。

椀Bは304(P818)・310(P968)の2点がある。304は底部片で底部は糸切り。見込みの段が小さく観察される。高台径3.2cmを測る。310(P968)は底部は糸切り。見込みの段がわずかに観察される。体部はやや内弯しながら立ち上がる個体でいわゆる椀形を呈する。口径15.8cm、器高5.2cm、高台径5.6cmを測る。

壺313(P1473)は肩のはった体部をなし、高台は外側に傾く。一部に自然釉がかかる。

土鉢は314(P1016)・315(P534)・316(P696)・317(P1190)の4点が出土している。すべて土師質の管状土鉢である。いずれも手づくねで成形後、ナデ調整を施す。法量はそれぞれ314が長さ4.2cm、幅1.2cm、重さ4.6g、315が長さ4.2cm、幅1.2cm、重さ5.6g、316が長さ4.7cm、幅1.3cm、重さ7.6g、317が長さ4.7cm、幅0.9cm、重さ4.2gを測る。

これらの遺物群の時期は298・301・303~310が中世12世紀末~13世紀頃のものである。299・302・313は8~9世紀の製品と考えられる。

#### 上層包含層の須恵器

上層から出土した須恵器には古代に属するものと、中世に属するものがある。量的には中世の土器が多く、この面が機能した時期は中世と考えられる。

古代の土器には須恵器壺(318~320)・皿(321~325)・壺A(326~327)・壺B(329~330)・壺(333)・壺(334)、土師器には製塩土器(343・344)・壺(345)がある。一方中世の土器には須恵器椀(335~340)・鉢(341)・備前焼擂鉢(342)、土師器壺(350・351)・壺(352・353)・擂鉢(354)、中国製の青磁碗(355・356・358)、同じく白磁碗(357)、綠釉陶器皿(359)、唐津焼皿(359)がある。ここでは古代の土器と中世の土器に分け、須恵器・土師器の順で説明する。



第65図 B地区 上層包含層出土遺物 1

須恵器蓋は318が天井部をヘラケズりし、体部はナデ調整で仕上げている。319は内外面ともにナデ調整で、口縁部には受け部がつく。320は天井部と口縁部の境に稜をもつ。つまみは扁平なボタン状で、中央部が少しへこむ個体である。法量は口径11.3~17cm、器高2.1~2.5cmを測る。

皿は321が底部糸切り。底部と体部との境は明瞭である。322は短く聞く体部を持つ個体で、口縁端部を丸くおさめる。323は口縁部が外側に水平に開き、底部は糸切り後ナデ調整を施す。底部はベタ高台となる。324は底部ヘラ切り後ナデ調整。体部は短く、口縁部はやや外反気味に立ち上がる。325は底部ヘラ切後ナデ調整を施す個体で、口縁部は外反する。見込み部分に二本線のヘラ記号がある。法量は口径8.6~16cm、器高1.9~2.8cm、底径5~11.1cmを測る。

坏Aは326が底部ヘラ切り後、ナデ調整を施す。327は底部ヘラ切り後、ナデ調整。内面に火拂を観察する。志方窯産（加古川市）の須恵器である。328は底部ヘラ切り後、ナデ調整を施し、内外面に火拂を観察する。体部がやや高く立ち上がる個体であるが、口縁部を欠いているので詳細は不明である。329は底部片である。底部はヘラ切り後未調整で、その他の部分は横ナデ調整で仕上げている。330は底部ヘラ切り後ナデ調整。体部中位から外反気味に立ち上がり、口縁部を尖らせて終える。底部と体部の境に段がつく。

法量は口径12.7~13.5cm、器高2.8~3.5cm、（ただし328は4.4cm以上を測る。）

坏Bは331が底部ヘラ前り、体部はまっすぐ立ち上がり輪高台をもつ。332は口縁部がやや内湾しながら立ち上がり、縁部を外反させる。外面に火拂を観察する。口径10.9~15.4cm、器高4.4~5.4cm、底径8.4~9.1cmを測る。

壺333は断面四角形の張り付けの突帯をもつ個体で、耳付の壺と考えられる。胴部径は20.5cmである。壺334は口縁端部が方形で外面上方に向けて面をもつ。2条の波状文と間に圓線をもつが、かなり退化した描き方である。

製塙土器は343が厚い器壁をもち、あらいナデ調整を施す。内面に指頭痕跡を観察できる。344は器壁が厚く、調整はあらい。内面に布痕跡を残す。法量は口径11.2~16cmを測る。壺345は外面が縦ハケ後、口縁部は横ナデ、口縁内部は横ハケを施す。古代の壺である。

次に、中世土器について須恵器・備前焼・土師器・中國製磁器の順に説明する。中世の土器は古代に比べ土師器の量が増加しているが、比率としては須恵器がやはり多い。以下中世の遺物について説明する。

須恵器碗 A335は底部糸切りで、体部は内湾しながら聞く。見込み部は明確に落ち込み段を持つ。口径14.0cm、器高5.9cm、底径5cmを測る。

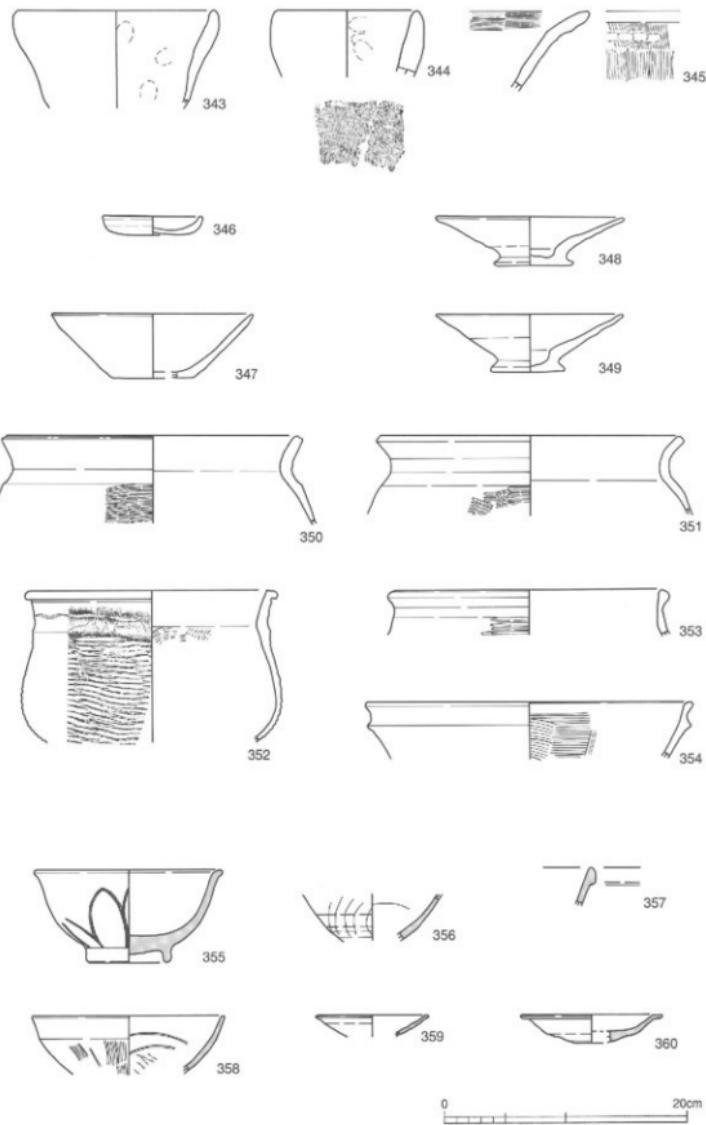
椀 B338は底部糸切り。体部はやや内湾して立ち上がる。見込みの落ちは小さい。339は底部糸切り。体部はやや内湾して立ち上がる。口縁部外面に重ね焼きの痕跡がある。340は底部糸切り。体部から口縁部にかけて直線的に聞く個体である。法量は口径15.8cm、器高5~5.4cm、底径5.9~6.1cmを測る。

椀336・337は底部を欠いた破片である。338は体部に削りだしの段をもつ。口径がもう少し大きくなる可能性もある。337は口縁端部が「く」字に屈曲する。法量は口径13.4~14.8cmを測る。

鉢341は口縁端部を上方に拡張する個体で、内面にやや強いナデを施す。口径27.2cmを測る。

備前焼鉢342は口縁端部にいわゆるごまだれ釉がかかる。外面に重ね焼きの痕跡を残す個体である。IVB期の遺物である。

土師器は小皿 B346が手づくね後ナデ調整。口縁端部は短く直立する。口径7.7cm、器高1.55cmを測



第66図 B地区 上層包含層出土遺物 2

る。

椀347は口縁部が底部から直線的に開く。調整は摩耗のため不明である。口径16.2cm、器高5.2cmを測る。

椀B348・349は平高台をなし、内部の見込みは明確に段をもつ。口径15.1~15.3cm、器高4~4.8cm、底径6.1cmを測る。

甕A350は口縁部が「く」字に曲がり、口縁端部に沈線を施す。体部外面はタタキを施す。351は口縁部が「く」字に曲がる。体部外面はタタキを施し、煤が付着する。口径23.7~24.4cmを測る。鍋C352は口縁部が若干「く」字に曲がり、口縁端部は水平方向に拡張する。体部外面はタタキを施す。353口縁部は玉縁状に仕上げ、体部外面にはタタキを施し、煤が付着する。法量は口径19.1~21.9cmを測る。擂鉢354は口縁部に後を持つ。内面は横ハケの後、擂目を施す。口径26.6cmを測る。

中国製の磁器は4点を図化した。このうち355は調査前にあった墓付近からの表採である。

青磁碗355は体部が内弯して立ち上がり、口縁端部は外反する。外面に単弁の広口連弁文を描くいわゆる蓮弁文碗で、龍泉窯の製品である。口径14.8cm、器高7.6cm、高台径6.2cmを測る。358は外面に飾で文様を施す。同安窯の製品である。

白磁碗356は外面に撚目文を施す。357は玉縁の口縁部の小片で、IV類の製品である。

綠釉陶器皿359は小皿の細片である。口径8.8cmを測る。

唐津焼皿360は高台周辺を欠く。口縁端部は外側へ水平に拡張する。唐津焼の製品である。口径11.4cm、器高2.35cmを測る。

#### 下層包含層

下層からは相対的に古代の土器が多く出土したが若干ながら中世の土器も混入している。このため、下層については古代から中世まで機能していたと考えられる。報告は古代・中世の順で記述する。記述は中世の土師器からおこなう。土師器は4点を図化した。

土師器小皿363は底部が糸切りでハの字に開く体部をもつ。口径9.6cmを測る。中皿362口縁部はやや外反しながら、体部中位で屈曲する彫形である。口径12.9cmを測る。

坏B361は体部は底部から直線的に立ち上がる。調整は摩耗のため不明。口径12.1cm、器高3.2cmを測る。托B364は底部の調整が摩耗のため不明である。見込みに段を持つ個体で、法量は高台径が6.9cmを測る。

須恵器は椀・皿・鉢がある。碗は374・375の2個体がある。374は体部が内弯して立ち上がり、碗形を呈する個体である。375は口縁端部がやや外反する。内面のナデはていねいで、器壁の凹凸は少ない。やや背高になる製品である。法量は口径16.1cmを測る。

須恵器皿373は底部が糸切り、内外面ともていねいなナデ調整を施す。口径8.2cm、器高1.9cm、底径3.9cmを測る。鉢377は口縁端部をわずかに上方につまみあげる。口径27.9cmを測る。

次に、古代の土器について報告する。図化できた個体はすべて須恵器で、土師器は極少量の出土を見たのみである。また、わずかに認められた破片も甕等の煮沸具が多い印象を受けた。

須恵器蓋365は口縁部が屈曲し、端部は丸く仕上げる。366は口縁部が屈曲する個体である。口径16.5~19.9cmを測る。366は大振な個体である。

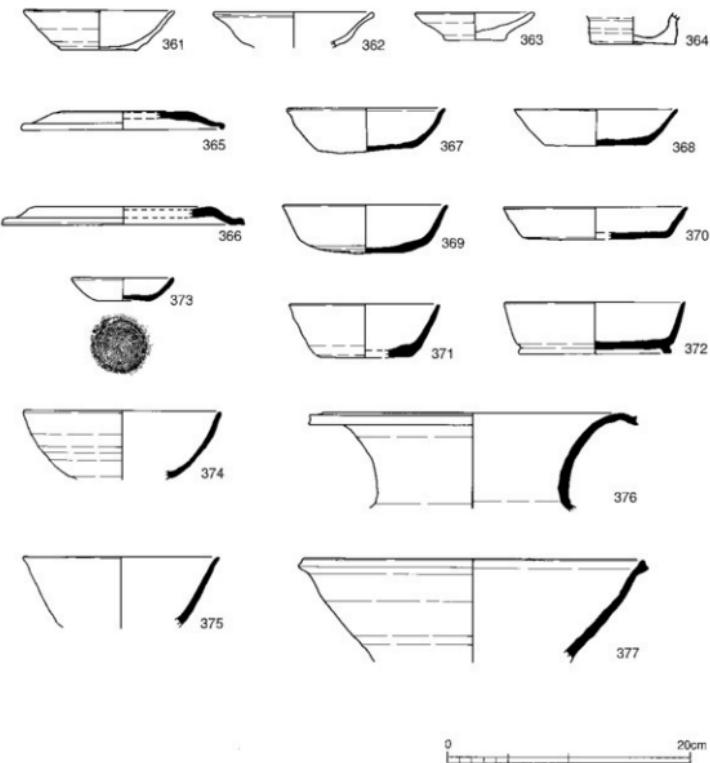
坏Aは367が底部はヘラ切り後未調整。外面全体に火襷が観察される。368は底部ヘラ切り後未調整。

底部と体部との差は明瞭で、内外面とも火捺が観察される。369は底部をヘラケズリし、体部内外面はナデ調整を施す。370は底部がヘラ切り後、ナデ調整を施す。内外面ともに火捺が観察され、体部と底部の境が明瞭である。371は底部がヘラ切り後未調整。体部はまっすぐに立ち上がる個体である。

法量は口径12.3cm、器高2.6~4.5cm、底径7.8~11cmを測る。坏B372は底部がヘラ削り、体部はまっすぐに立ち上がり、輪高台が付く。口径14.6cm、器高4.2cm、底径12.1cmを測る。

壺376は口縁部が大きく外反し、口縁端部を上下に拡張する。外面には自然釉が付着する。内外面ともナデ調整によって仕上げている口径24.7cmを測る。

壺399 外面はタタキ調整を施す。内面に放射状の當て具の痕跡が残る。破片のため実測は行っていない。



第67図 B地区 下層包含層出土遺物

## その他の遺物

### 金属製品

出土した金属製品は銭26枚、鎌、紡錘車、釘、鉄滓などで総数78点が出土した。

しかし、ほとんどの個体では鏽が進行するなど遺存状態が悪く、図化できたのはわずか9点に限られた。

#### 銭 (M19~42)

8区の柱穴 (P151) から渡来銭がまとまって26枚出土した。写真・拓本を掲載できたのはそのうち24枚である。縫の状態で出土したもので、銭中央の穴には綴じ紐の薙が残っていた。銭の種類は、開元通宝、咸平元宝、天禧通宝、天聖元宝、皇宋通宝、治平元宝、熙寧元宝、元

豊通宝、元祐通宝、祥聖元宝、元符通宝、聖宋元宝、政和通宝の13種類であり、唐銭の開元通宝1枚を除き全て北宋銭となる。埋納された銭の中で最も新しい政和通宝の初鋤が1111年であるため、12世紀代に埋納されたと思われる。この他に5区包含層から寛永通宝が1枚出土している。

鎌 M43は刃の長さ12cmの両刃の鎌である。一部に木質が遺存している。また、柄の装着部分には目釘も残っている。

紡錘車 M45は鉄製の紡錘車である。紡輪部分は円形を呈し直径5cm、厚さ最大0.7cmを測る。中心に鉄製の軸部が遺存している。

釘はM47の1点がある。角釘で残存長は約5cm、厚さは0.8cmである。先端が欠けるため、実際の長さは不明である。ただし、釘の太さからすると2~3寸程度の圓筒体と考えられる。M44は用途不明品である。直径0.9cmの鉄棒を環にした製品である。環は長辺6.3cm、短辺4.5cmの隅丸長方形を呈している。M46は残存長4.5cm、厚さ0.3cmの板状の製品である。形状から刀子と考えられるが断定しがたい。M48は残存長4cm、最大径1.3cmの円錐状の製品である。先端に向かい製品の半分まで中空になるが、用途は不明である。

鉄滓は、A・B地区ともに出土している。しかし、多くは細片であり図化することができなかった。ここでは、A・B両地区から出土した鉄滓を掲載する。鉄滓はいずれも楕円形鉄滓と考えられる。

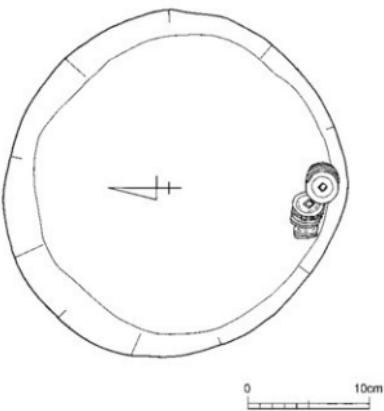
M49 重さ 26.20g 比重 2.556g/cm<sup>3</sup>

M50 重さ 116.66g 比重 0.944g/cm<sup>3</sup>

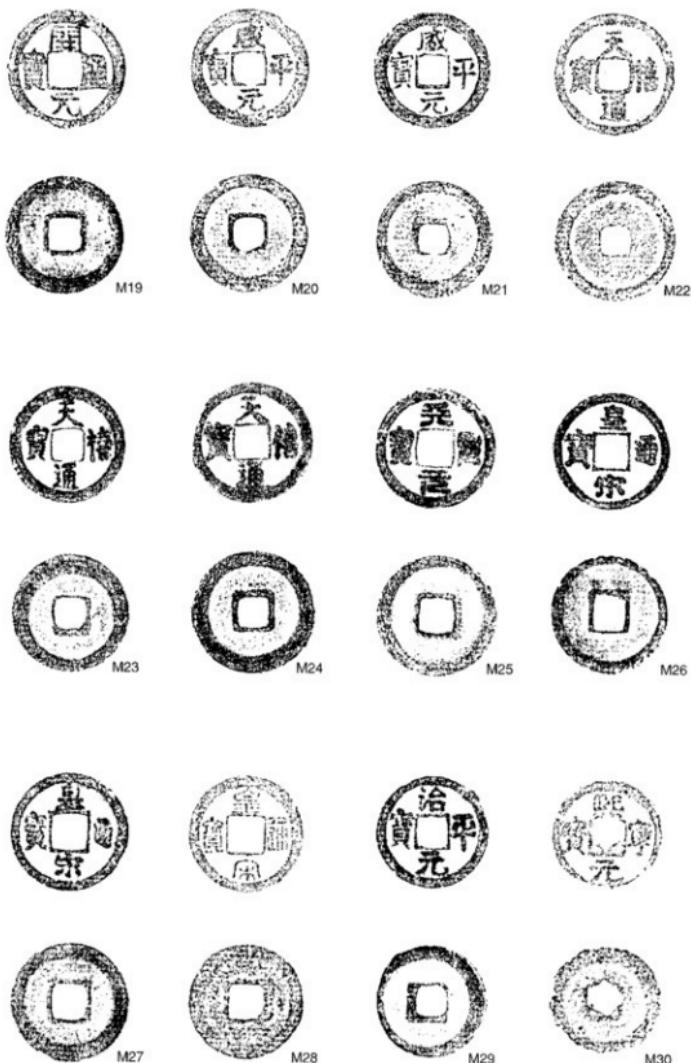
M51 重さ 34.95g 比重 8.804g/cm<sup>3</sup>

### 石製品

砥石2点が出土した。S1は一方が柄頭状を呈し、バナナに似た形状をとる。4面ともよく使われており、溝状に削られている部分もある。石材は砂岩である。S2は疊層下面の柱穴から出土した。最大長18cmの台形をした砥石であり、4面とも良く使われている。一部熱を受け赤変している。石材は砂



第68図 B地区 P151 (銭出土状況)



S=1/1

第69図 B地区 P151 出土銭1



M31

M32

M33

M34



M35

M36

M37

M38



M37

M38

M39

M40



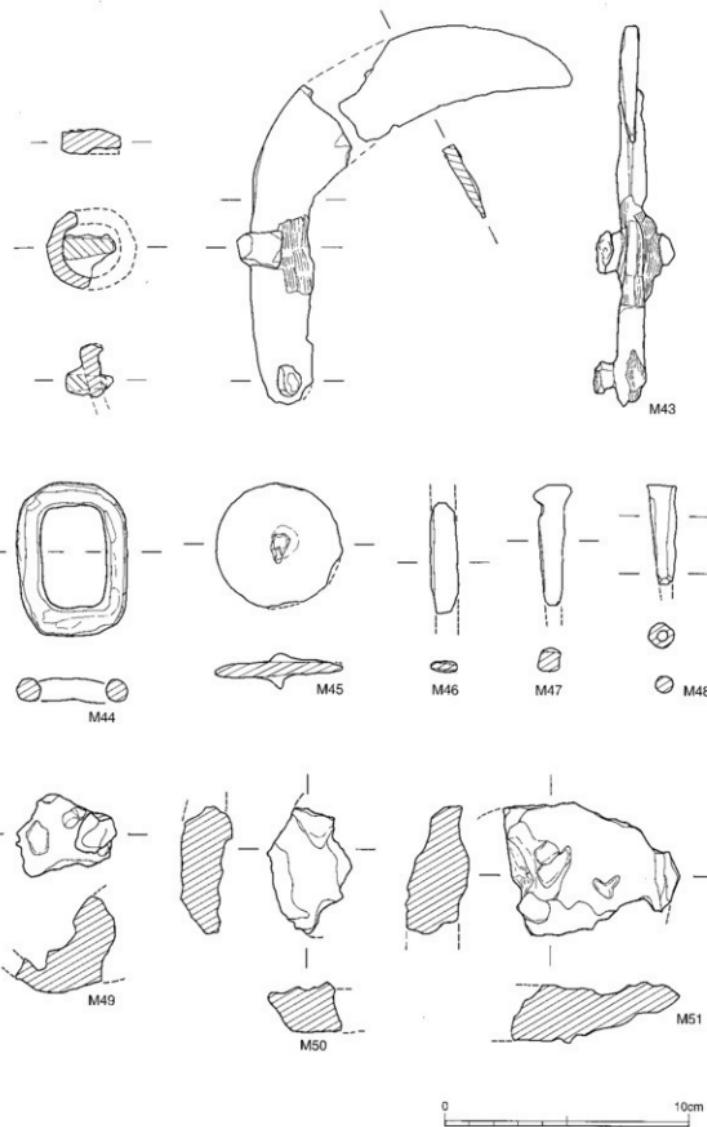
M40

M41

M42

S=1/1

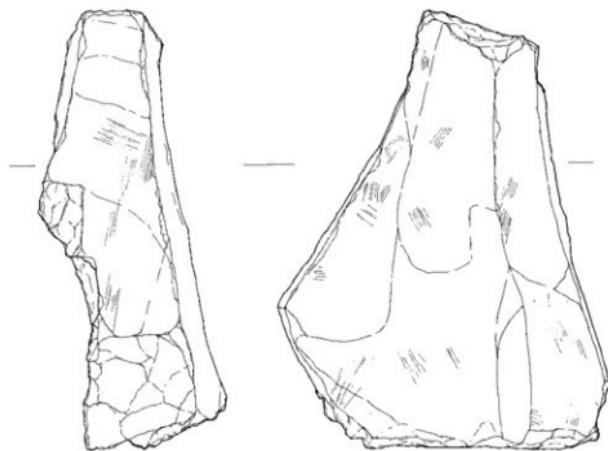
第70図 B地区 P151 出土銭2



第71図 B地区 鉄製品



S1



S2

0 10cm

第72図 B地区 石製品

岩である。

## 第4節 小結

B 地区からは500点を越す遺物が出土した。そのうち、図化できたものは148点になる。遺物は9世紀～10世紀、12世紀～14世紀にかけての遺物が多数を占めている。その中で縄文時代晚期と弥生時代前期に属する土器が数点出土しており、朝来町内では初見の資料となった。薬師前遺跡周辺に縄文時代・弥生時代の遺跡が存在する可能性が高まった。郡内の縄文時代の遺跡は円山川本流からやや奥に入った谷や小河川ぞいに立地することが指摘されており、朝来町内では神子畑、多々良木、伊由谷などが遺跡の候補地になると考えられる。

遺構の数も多く、掘立柱建物20棟、墓2基、溝5本、柱穴、土坑などが検出された。これらの遺構は9世紀～14世紀にかけて営まれたものである。掘立柱建物・墓については、最終章のまとめで詳しく述べるため、ここでは簡単にまとめてみる。

掘立柱建物は、その建物配置によって2つの時期に分けることができた。I期は古代の建物群、II期は古代末～中世の建物群になる。II期はさらに4群の建物配置を想定できる。B地区の集落が大きく変化するのはII期である。12世紀後半に集落はSB02を中心とする「屋敷」を形成する。同じ時期にその屋敷墓と考えられる墓1が造られており、II期の集落が12世紀代に新たに成立したことを見示している。A地区でも12世紀代の掘立柱建物が見つかっており、この時期薬師前遺跡全体に集落がひろがっていたと考えられる。13世紀になるとA地区にお堂が建立され、C地区では経塚が築かれる。この時期B地区の集落は建て替えを行いながら継続して「屋敷」を維持しており、その建物群の様相から在地領主の存在が想定できる。

# 第5章 C地区の調査成果

## 第1節 地区概要

A・B地区の西方には、西から東にのびる3本の尾根がある。この棱線上及び中腹に設定した調査区をC地区（C-1～3区）とよぶ。ここからは、山麓のA・B地区と重複する平安時代末から室町時代にかけての宗教色の強い遺構が検出された。

最も南に位置するC-1区では、尾根の突端において鎌倉時代初頭の経塼が2基検出された。ともに残存状況はよくなかったが、うち1基からは和鏡が、他の1基からは鉄製刀子が出土した。

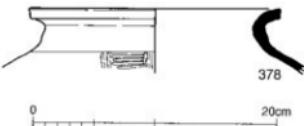
C-2区は、C-1区の位置する丘陵の中腹北斜面にある。ここに築かれた平坦面から、鎌倉時代から室町時代にかけて営まれた掘立柱建物3棟、焼土坑、溝などが検出された。麓からの比高差は約10mと離れているため、通常の居住域とは考えがたいものである。

C-3区では尾根稜線上の突端から、平安時代末から鎌倉時代初頭頃の堂宇と考えられる礎石建物と、その基壇が検出された。また、隣接して経筒外容器と考えられる埋設土器が検出された。

また、C-1・3区間にかつて存在した尾根からは、調査前に施工された工事のあと、中世の遺物が採集されている。378は、体部から内傾する頭部を経て、外傾する口縁部へ至る須恵器甕である。詳細は不明なもの、他の調査区と同様、この尾根上にも経塼あるいはそれに類する施設があったことが推測される。

薬師前遺跡西方の尾根のうち、麓の集落を見渡せる突端部には、このように経塼等の宗教施設が広く展開していたといえよう。地元に残された伝承のなかにもそれを暗示する内容のものもあるため、以下に紹介したあと、各調査区の調査結果の記述を行う。

- C-1区の尾根を「墓山」と呼んでいた。かつて無縫仏を弔うための墓地があった。
- C-2区にあったケヤキの大木に登ると惡事が起きるというので、近寄らなかった。
- C-3区の尾根を「堂山」とよび、かつて尼寺があったと伝え聞いている。
- 昭和30年くらいまでは、C-1区南側の尾根から、C-3区北側の尾根にかけての広い範囲を村人総出で山刈りをし、春には山焼きをするなど、入念な手入れをし、農作業に使う牛を放していた。耕運機等の普及後は山に植林をした。
- 春の山焼きのあとには新芽が出るが、その時に、C-1・3区間にあった尾根頂部付近で円形の変色部が姿を見せ、「蛇輪（じゃわ）」と呼んでいた。直径20mほどのドーナツ状で、北側の一部が切れている。



第73図 C-1・C-3間尾根採集遺物

## 第2節 C-1区

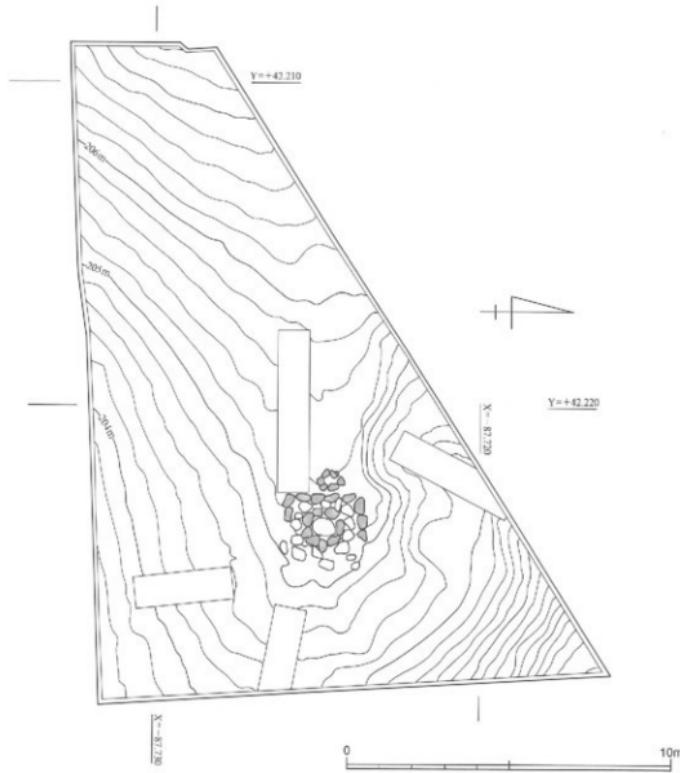
C-1区は、東に派生する尾根の緩傾斜地に立地し、薬師前遺跡の最も南に位置している。調査区の

東端は、後世の削平あるいは自然崩落により、急傾斜地形を呈している。調査地の標高は、およそ205mを測り、A・B地区とはおよそ20m、C-2区とはおよそ10mの比高差がある。調査前の状況では、多数の石材が露頭しており、経験あるいは中世墓の存在が予想された。調査区は、それら多数の石材が散乱する尾根の突端部を中心に設定した。調査面積は192m<sup>2</sup>である。

調査の結果、尾根突端部の高まりを中心にして東西約5.5m、南北約4mの範囲に多量の石材が検出された。石材は、川原石および軽角礫が混在しており、順次それらを取り除いていくと、方形に川原石を並べたと考えられる石列（以下、集石遺構1）とその西側に隣接する円形の石列（以下、集石遺構2）が発見された。

#### 集石遺構1

調査区のはば中央より検出された石列は、高さ0.4m程の基壇状に盛り上げた表面に川原石が貼り付けられており、約2.5m四方に配石されていたものと考えられる。それらのうち西辺および北辺と南辺の西側（山側）の残存状態が良好であり、調査では9石を確認することができた。しかし、東辺および



第74図 C-1区 全体図



第75図 C-1区 集石遺構1・2検出状況図

北辺と南辺の東側（谷側）では、現位置をとどめている石材はほとんどみられず、東下方に流失したものと考えられる。方形の石列の内部には円形の石列が2重に巡らされており、外側の円形石列は東側（谷側）の一部に欠損がみられるが、内径約1.4mを測り、12石が残存していた。また、内側の石列（以下、内円石列）は、内径約0.8mを測り、8石が巡っていた。これら3重の石列から構成された集石遺構1は、すべて川原石によって構築されており、残存していた35石の総重量はおよそ800kgを測る。35石の平均は22.3kg、最も軽いものは4.7kg、最も重いものは47kg（49×30×24cm）を測り、20~25kgのものがほぼ半数を占めている。

集石遺構1および後述する集石遺構2は、石材検出時にはこぶし大程度の川原石と亜角礫によって覆われており（以下、覆い石）、取り除いた石材はおよそ650石、1,270kgに及んでいる。覆い石は、川原石1：亜角礫2の割合で、平均1.9kgを測る。覆い石は集石遺構全面に積まれていたわけではなく、比較的はやい段階から内円石列が確認されており、東西両側、特に西側に偏って分布していたことなどから、構築当初の位置から移動した2次的なものと考えられる。このため、礫の使われ方に差異は認められなかった。

内円石列のほぼ中央部より、須恵器の壺（381）が確認された。壺の中からは、直径8.9cmを測る和鏡（M52）が1面、鏡背面を上にした状態で出土したほか、別個体の須恵器の壺（382）の破片多数と須恵器の鉢（379）の破片が出土している。これらの遺物を取り上げると、内円石列の内部から、石の上面から深さ約0.4mの不整形な掘り込みが確認された。掘り込みの断面形をみると、南北断面では、南側はほぼ真っ直ぐに落ち込み、中央部まで深く平坦に掘られている。そこから北側へは緩く直線的に立ち上がっている。東西断面は、中央部が深い若干歪んだ椀形を呈している。掘り込み内は、自然堆積によると思われる土砂で埋まっており、381の壺は掘り込み底部からおよそ0.2m上方より出土したが、上半部の破損は著しく、底部は欠損していた。掘り込み上面には、土器の破片とともに川原石や亜角礫が多数みられたが、内部および壁面から石材は確認されておらず、掘り込みは小石室などを構築していない素掘りの土坑である。

382の壺および379の鉢は、ほとんどその原形をとどめない状態で出土しており、381の壺を含め、これら3個体の土器は、いずれも2次的に移動したものと考えられる。382については後述するが、381の壺は内円石列の構築時、掘り込みの底部に据えられていましたと考えられ、その後当初の位置から抜き取られ、放置されたものと思われる。これは、掘り込みの大きさが壺を据えるのに十分な深さをもつことや破損している壺の上半部が内円石列内の限られた地點からのみ出土している状況などから推定される。

内円石列からは、壺と鉢の土器類と和鏡が出土しているが、人骨は確認されなかつたため、集石遺構1は、中世墓の可能性は低く、内円石列の掘り込み内に壺（381）を外容器として据え、鉢（379）を蓋にして経典および経筒を収めた埋納施設、いわゆる経塚の可能性が考えられる。

### 集石遺構2

集石遺構1の西辺ほぼ中央部の傍らに位置する石列は、6石が内径約0.4mの円形に巡って検出された。この6石が巡る円形の石列（以下、円形石列）は石材検出時、さらにはそれらを順次取り除いていく過程でもその存在は明確に理解しえなかつた。周辺の石をほぼすべて取り除いてようやく、須恵器の鉢（380）とともにその存在を確認することができた。円形石列は、集石遺構1に隣接しているが、独立した遺構であり、ふたつの遺構に切り合い関係は認められなかつた。わずかな盛土の表面に川原石が貼り付けられている状況は、集石遺構1と同様であり、石の上面はそれよりおよそ0.1m低くなっている。



第76図 C-1区 集石造構1・2完掘状況図

円形石列の内部には、石の上面から深さ約0.3mの掘り込みが確認された。掘り込みの南北および東西断面は、ともに椭形を呈し、内部には土砂が堆積していた。掘り込みの中からは、逆位の鉢（380）が中央東側の上方より割れた状態で出土した。また、その下層からは鉄製の刀子（M53）が出土し、底部には川原石が数枚残存していた。それらの石によって掘り込み内に小石室が構築されていたとは考えられず、集石遺構1と同じく素掘りの土坑であったと思われる。

円形石列を構成している石材は、すべて川原石が使用されており、円形に巡る6石のはかに、内部に残存していたものも含めた14石の総重量はおよそ85kgを測る。石の平均は6.0kg、最も軽いものは0.8kg、最も重いものは14.8kgを測り、集石遺構1の内円石列よりも規模や使用石材はかなり小さなものである。

集石遺構2についても、集石遺構1と同様に、経典および經筒を収めた埋納施設、いわゆる經塚の可能性が考えられる。集石遺構1からほとんどその形状をとどめず出土した382の壺は、集石遺構2の円形石列内部に經筒の外容器として掘えられ、逆位の状態で出土した380の鉢がその蓋として納められていたものが、後世抜き取られ、破壊されたものと推定される。

以上のように、集石遺構1・2から、和鏡や鉄製刀子が出土していることや、遺構（集石遺構）と遺物（外容器の壺と鉢の蓋）が2組存在することなどから、ふたつの經氣が隣接して建造されていたと考えられる。

集石遺構1・2ともに、円形石列の内部の土坑には、他の經塚にみられるような小石室が構築されておらず、經塚と定義付けされる「經典」が出土していないことなどを考慮すれば、これらの遺構を經塚と結論付けられない部分が一部残っている。しかし、兵庫県の經塚では、播磨の魚住（明石市）・神出（神戸市）・三木（三木市）の窯で生産された片口の鉢や壺を經筒の外容器に転用して地中に埋納する例が多く<sup>10</sup>、また、ふたつの遺構から出土していない經筒については、竹あるいは木製のものが利用されていた例も報告されている<sup>11</sup>ことから、經典とともに腐朽し、残存しなかったとすれば、經塚の可能性は非常に高いと考えられる。

#### 集石遺構出土遺物

集石遺構1・2からは、前述したように須恵器の鉢（379・380）と須恵器の壺（381・382）2組と和鏡（M52）1面、鉄製刀子（M53）1本が出土した。

そのうち、集石遺構1からは、379の鉢と381・382の壺、さらに和鏡1面が出土した。

379の鉢はおよそ1/2が残存しており、口径27.2cm、器高10.3cm（ともに復元値）を測る。口縁端部は外側に傾斜し、壺部を上方につまみ上げている。

381の壺は口径21.0cm、器高30.0cm（復元値）、腹径32.4cmを測り、体部外面には平行タタキによる調整が全面にみられる。内面の頸部には同心円文のあて具痕が残り、体部の同心円文の痕跡はナデ仕上げによって消されている。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、端部を上下方ともに若干つまみ出している。全体の形状は肩部に張りがなく、ほぼ球形を呈している。382の壺はほぼ完形で、口径17.6cm、器高30.3cm、腹径32.1cmを測る。体部外面には平行タタキによる調整がみられ、内面のあて具痕はナデ仕上げによって消されている。口縁部はやや外反ぎみに立ち上がり、壺部を上下方ともつまみ出している。底部は平らで、体部は球形に近い形状を呈している。ふたつの壺は、その形状から13世紀前半頃のものと考えられるが、382の口縁端部の下方へのつまみ出しが顕著であることから、382は381よりも時期が下がるものである。

和鏡は直径8.9cm、周縁部の高さ4mm、鉢の高さ2.5mm、重量76.4gを測る。鏡背には、州浜に花の咲き誇る梅の木や2羽の鳥が描かれ、「梅樹双鳥文鏡」と呼ばれるものである。鏡背の文様および形態的な特徴から、12世紀後半から13世紀前半に製作されたものと考えられる（詳細は第6章 第2節に記載）。

また、集石造構2からは380の鉢と鉄製刀子1本が出土した。

380の鉢はほぼ完形で、口径27.3cm、器高10.7cmを測る。底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、口縁端部を上方につまみ出している。379の鉢とともに、12世紀後半から13世紀前半のものと考えられ、壺や和鏡とはほぼ同時期のものである。

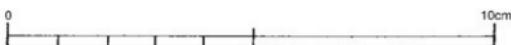
鉄製刀子は、全長20.8cm、幅1.9cm、厚さ0.45～0.55cmを測るもので、一部に木質が残っている。柄部には目釘穴がひとつ穿たれている。

#### その他の出土遺物

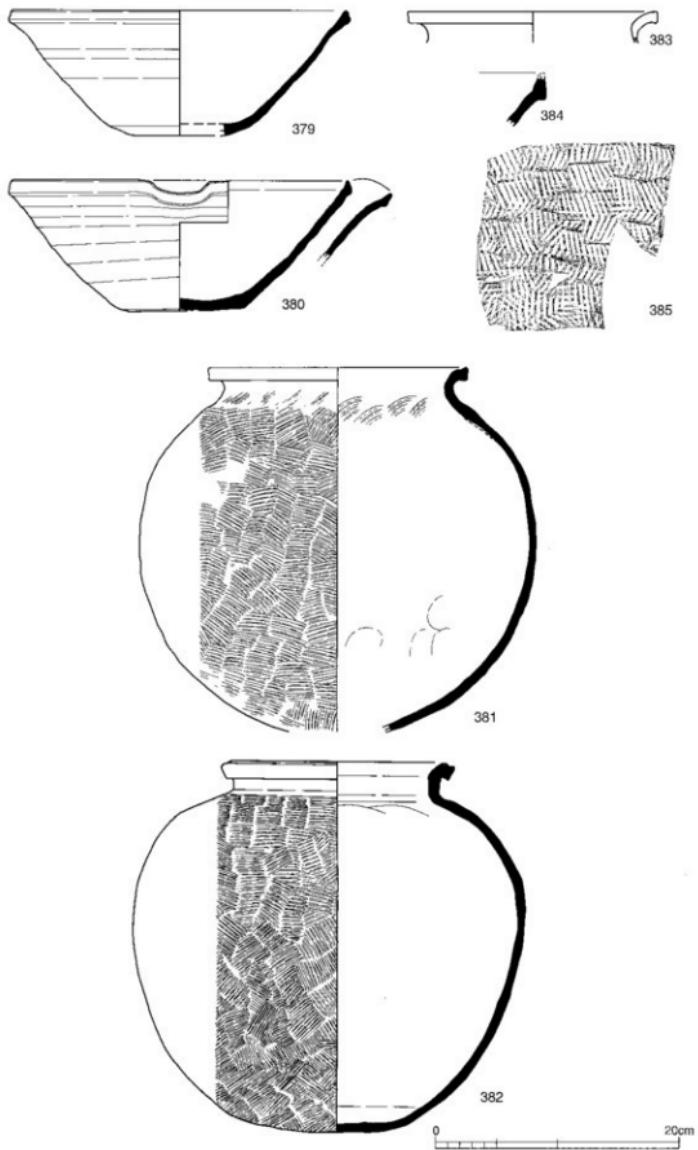
集石造構から出土した遺物のほかに、確認調査において、口径20.2cm（復元値）を測る土師器の壺



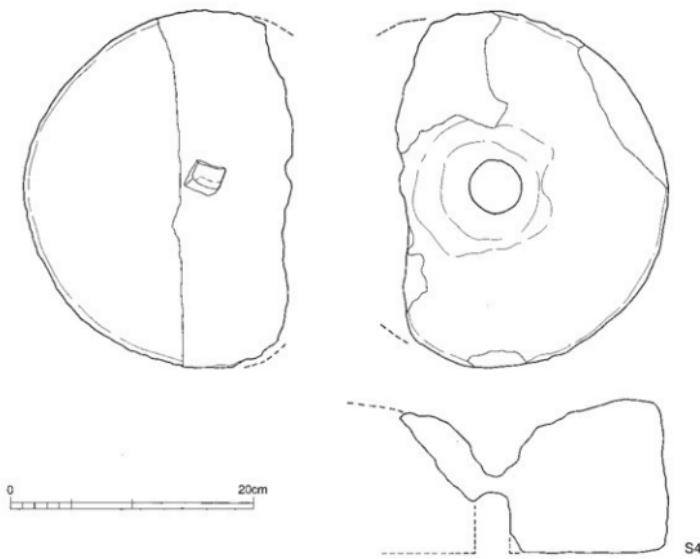
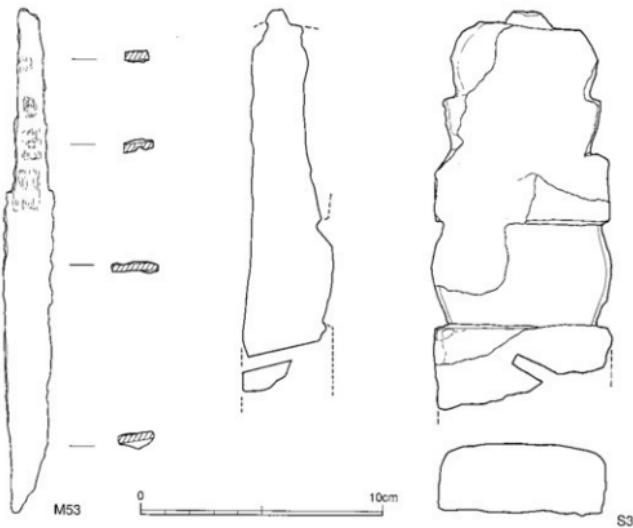
M52



第77図 C-1区 集石造構1出土和鏡



第78図 C-1区 集石造構1・2出土遺物



第79図 C-1区 集石造構1・2出土鉄器・石製品

(383) や須恵器の鉢 (384)、図化は行っていないが外面に絞杉のタキをもつ須恵器の甕の体部  
(385 拓本) の3点が出土している。須恵器の鉢と甕は、集石遺構から出土した2組の鉢と甕とは別個体であり、3組目の絞筒外容器の可能性も考えられるが、小破片のため、詳細は不明である。

また、集石遺構の覆い石の中には、一石五輪塔 (S3) と石臼 (S4) が含まれており、ともに図化した。S3は、その形状から一石五輪塔と判断され、およそ30cmが残存していた。欠損あるいは摩滅は激しいが、五輪のすべてを確認することができるため、全長40cm前後のものと考えられる。S4の石臼は、直径29.4cm、厚さ12.6cmを測るもので、およそ1/2が残存していた。

### 第3節 C-2区

C-2区は、C-1区と同一尾根の北側斜面の中腹に立地し、標高はおよそ195mを測る。調査区は、



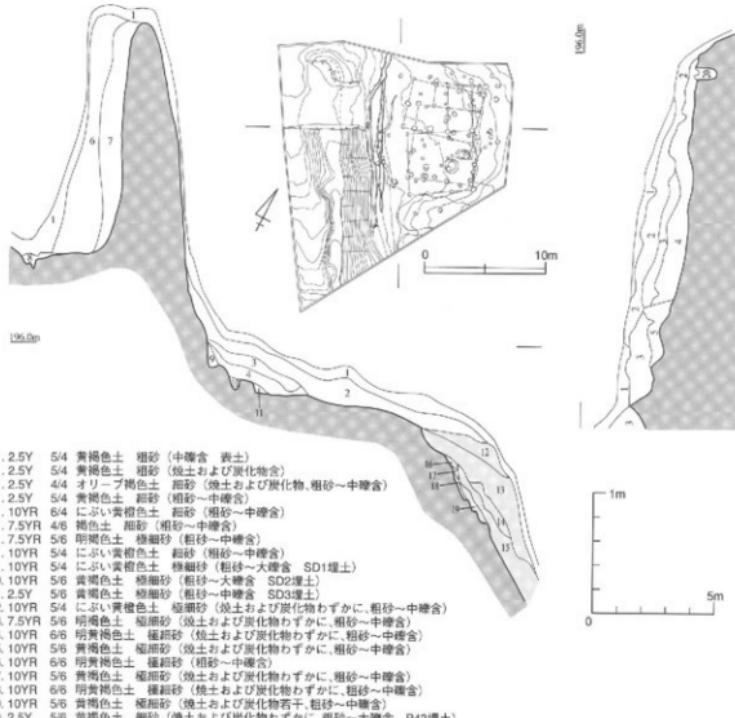
第80図 C-2区 全体図

中腹に広がる平坦地およびその西側にある土壌状の高まりまでをその範囲として設定した。調査面積は292m<sup>2</sup>である。

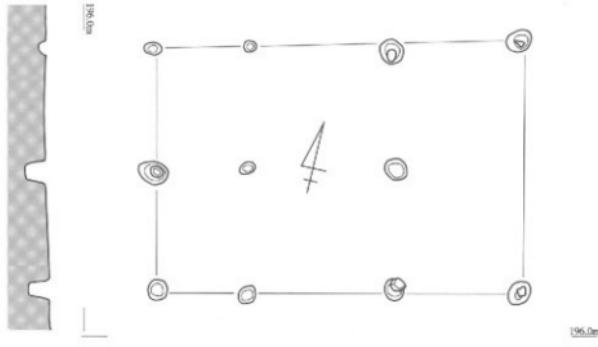
調査の結果、およそ160m<sup>2</sup>に及ぶ平坦地より、柱穴94個（P1～P94）とそれらから復元される掘立柱建物3棟（SB1～3）、土坑2基（SK1・2）と焼土面（SK3）、溝2条（SD1・2）と段状遺構1ヶ所（SD3）が発見された。また、調査区の西側にある土壌状の高まり（以下、土壌状遺構）は、調査前に工事関係の車両によって一部が削られていたため、全体の形状は不明であるが、尾根の主軸に直行する形で、幅約5m、高さ約3mを測るものである。この土壌状遺構の西側は、不整形な溝状の掘り込みになっており、締まりのない流土や腐植土が厚く堆積していた。堆積状況の観察などから、西側の掘り込みは東側に展開する遺構群よりも新しい時代のものであり、平坦地を造成したときは上方の山の傾斜へ続く自然地形であったものと考えられる。さらに、この西側は、地元の人たちの登山ルートとなつており、かなり新しい時代に地形の改変が加えられている可能性が考えられる。

#### 柱穴（P1～P94）および掘立柱建物（SB1～3）

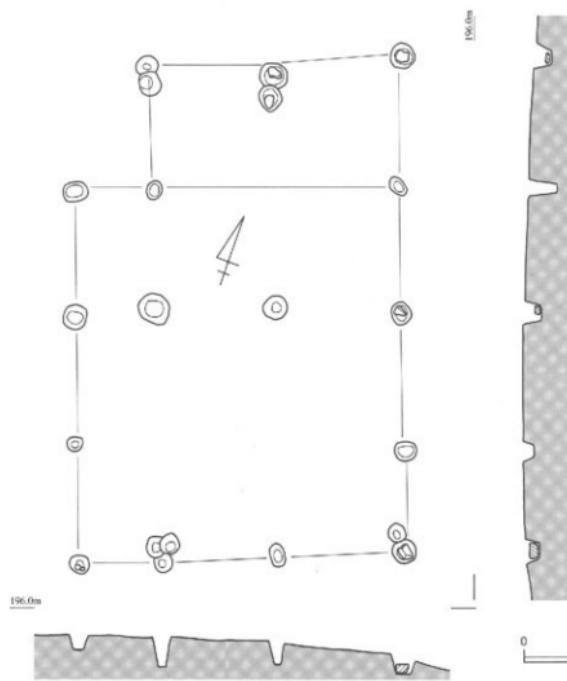
土壌状遺構の東側では、北方向に緩やかに傾斜する平坦地が広がっている。平坦地の南側と東側は、



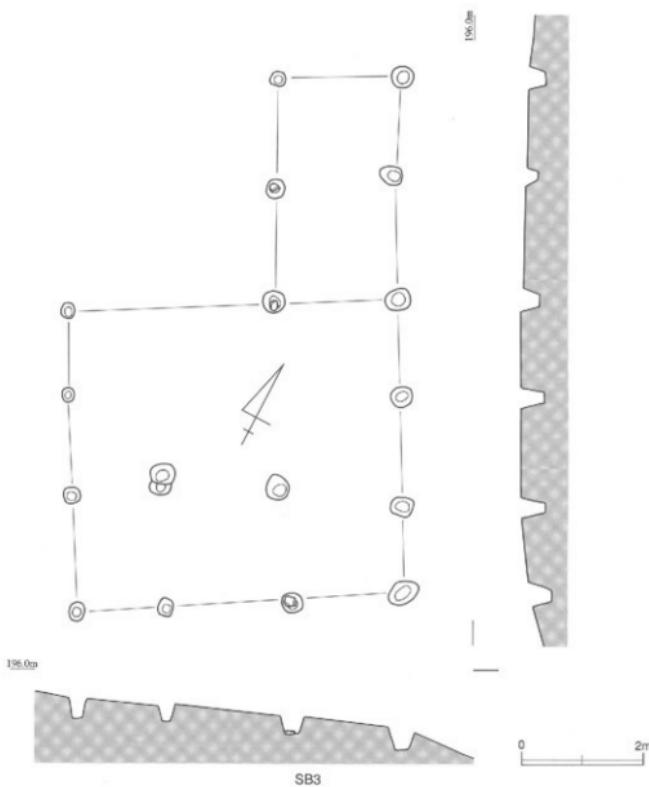
第61図 C-2区 土層堆積状況図



SB1



第82図 C-2区 SB1・2



第83図 C-2区 SB 3

盛土による造成が行われており、両側の盛土ともに焼土と炭化物を含んだ黄褐色・明黄褐色・明褐色の土を盛っている状況が土層断面の観察より確認された。南側の盛土には焼土と炭化物の混入が多くみられるが、東側の盛土もほぼ同じ特徴をもった土であり、その特徴から同時期、あるいは近い時期に造成されたものと考えられる。また、両側の盛土上面からは、柱穴が検出されていることから、建物を建てるための敷地をより広く確保するために、土壘状構造の東斜面を削った上で盛土が行なわれたものと考えられる。盛土を除去すると、東側は尾根の旧地形と考えられる斜面になっているが、南側は急峻な落ち込みになっており、あるいは谷状に崩れた旧地形であった可能性が考えられる。但し、その形状から人為的な連構とは考えられない。また、盛土の中からは、12世紀中頃から後半の須恵器の鉢（386）などが出土しており、それ以降に造成が行なわれたものと考えられる。

平坦地から検出された柱穴は94個に及ぶが、それらの中から握立柱建物が3棟（SB1～3）復元された。3棟はいずれも重複しているため同時存在は考えられない。また、3棟の建物を構成する柱穴に

は、部分的に確認されなかった箇所が存在している。

SB 1 は南北 2 間 × 東西 3 間で、建物の床面積は約 24m<sup>2</sup>、建物の主軸は N14° E を測るものである。SB 2 は南北 3 間 × 東西 3 間、北東に 1 間 × 2 間の庇がつき、床面積は約 48m<sup>2</sup>、主軸は N18° E を測る。SB 3 は南北 3 間 × 東西 3 間、北東に 2 間 × 1 間の庇がつき、床面積は約 40m<sup>2</sup>、主軸は N27° E を測る。建物を構成する柱穴の中で、SB 1 の P81 と SB 2 の P82 は重複関係にあり、それによって SB 2 が SB 1 より古い建物であることが分かる。また、SB 2・3 をそれぞれ構成する P10・31 は、隣り合う柱穴との切り合い関係が確認されるが、いずれも切り込まれているため、この 2 棟の建物に後続する建物あるいはなんらかの施設の存在が推定される。

#### 土坑（SK 1・2）および焼土面（SK 3）

調査区南東部で 2 基の土坑（SK 1・2）と焼土面（SK 3）が検出された。

SK 1 は長さ約 1.2m、幅約 0.8m、深さ約 0.1m を測る楕円形を呈する土坑である。検出面の東側よりふたつの板状の角擦が出土しており、表面全体が被熱し、変色がみられた。堆積土には、焼土と炭化物が多量に含まれ、土坑の西端は深さ 5 cm まで被熱が及んでいた。SK 2 は、直径約 1.2m、深さ約 0.2m を測る不整形な円形を呈する土坑である。SK 1 と同様に、堆積土には多量の焼土と炭化物が含まれていたが、被熱して変色しているなど火を使用したと考えられる痕跡は確認されなかった。また、この土坑内部には SB 3 を構成する柱穴（P14）が検出されており、切り合い関係より SB 3 に先行するものと考えられる。SK 2 の東側に位置する SK 3 は、0.85 × 0.55m の瓢箪形の平面形を呈しており、被熱して赤く変色した焼土が、深いところで 5 cm にまで及んでいる。

これら 3 基の土坑は、位置的に掘立柱建物の内部に存在し、これらの建物にともなうものである可能性も考えられるが、遺物が出土しておらず、詳細は不明である。

#### 溝および段状造構（SK 1～3）

土壘状造構の東側より斜面裾に沿って掘り込まれた溝（SD 1・2）とその東側の平坦地の造成を意図して掘り込まれた段状造構（SD 3）が確認された。

SD 1・2 は、ともに幅約 0.5m、深さ約 0.2m を測り、南から北へと続いている。土層の堆積状況から、SD 3・2・1 の順に古く、SD 3 の中央（西側）に張り出した部分を埋めて、SD 2 が掘り込まれ、さらに西側の SD 1 を掘り込んでいることがわかる。また、SD 1・2 は掘立柱建物（SB 3）と多少の距離があるが、ほぼ平行した位置関係にあり、建物の排水を目的とした溝の可能性が考えられる。

以上、C-2 区では、斜面に平坦地を確保するための切土と盛土が行われ、掘立柱建物などの遺構が確認された。麓に広がる A・B 地区とは明らかに立地面での差異が認められるため、通常の居住域よりもむしろ、山頂に点在する経塚などに類似するなんらかの宗教施設であった可能性が考えられる。

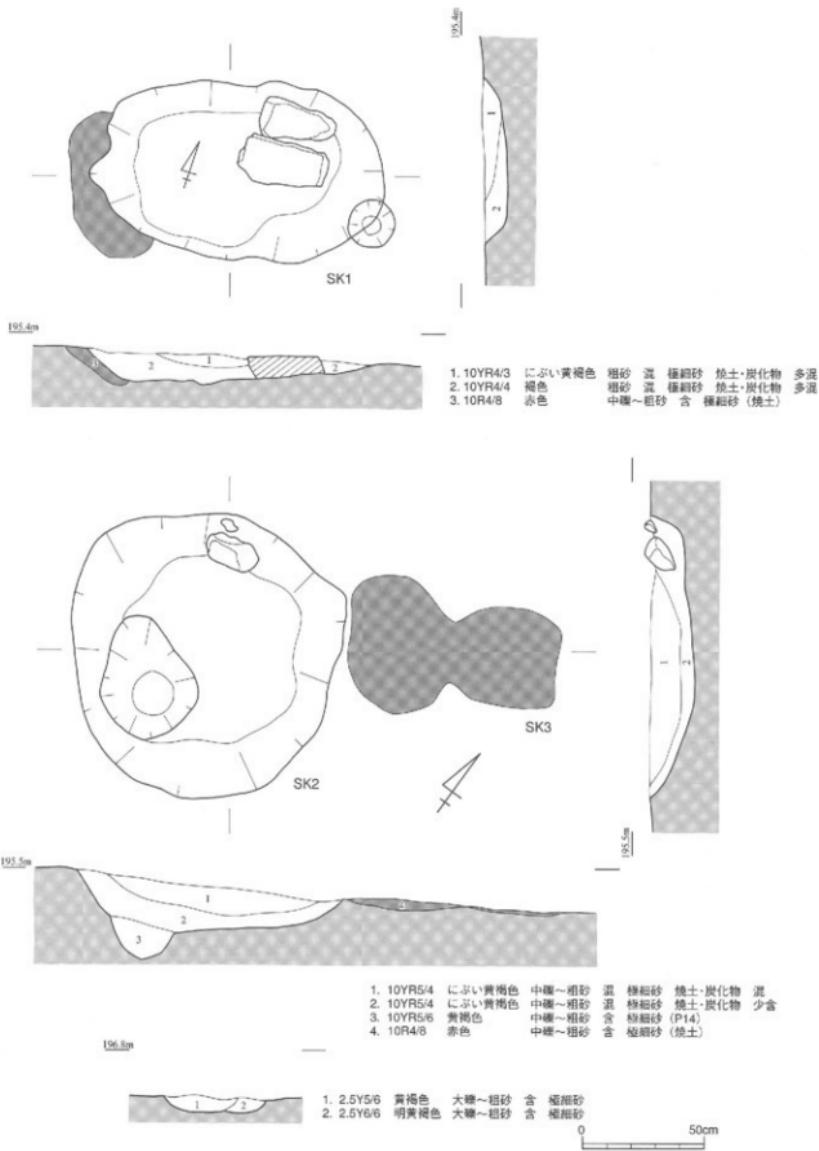
#### C-2 区出土遺物

C-2 区では、両側の盛土内あるいは柱穴（P7 他）から須恵器の鉢や瓦質の羽釜 B、鉄製品などが出土したが、全体の出土量はわずかである。また、土器はいずれも小破片のため、数値は復元値である。

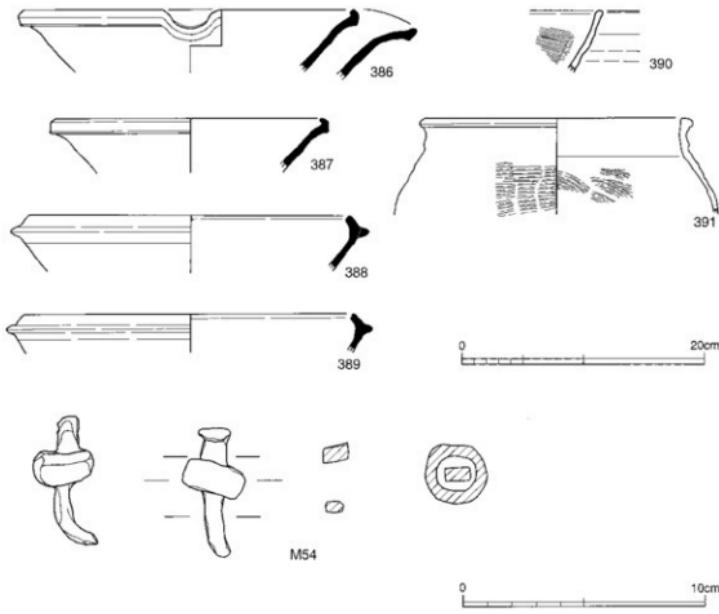
386 と 387 は須恵器の鉢である。386 は東側盛土の北東部より出土しており、口径 27.0cm を測る。口縁部の特徴から、12 世紀中頃から後半のものと考えられる。387 は口径 21.6cm を測るが、口縁部のわずか 1 / 9 が残存していたのみである。

388 と 389 は瓦質の羽釜で、南側の盛土より出土した。口径はそれぞれ 26.1cm と 26.8cm を測る。

390 は土師器の鉢で柱穴（P7）より出土した。小破片のため、口径などは不明である。



第84図 C-2区 土坑・溝



第85図 C-2区 出土遺物

391は口径20.9cmを測る、土師器の鍋Bである。体部外面には平行タタキ、内面にはナデ清されず部分的に残った同心円文タタキの調整の痕跡がそれぞれみられる。

SB02を構成する柱穴(P45)より出土した鉄製品は、全長5.4cmを測る釘の先端部である。

#### 第4節 C-3区

C-3区は、今回の調査地区中、最も北の尾根上にあたる。この尾根は、平成9年に現在の線路際に移築された薬師堂の西側背後にあたり、地元ではこれを「堂山」と呼び、かつて尼寺が建っていたという伝承が残っている。標高は約220mで、麓からの比高差は約40mである。

この尾根は、他の尾根と同様、企城にわたってよく下草の手入れがなされた杉の植林地となっていた。調査直前には、この杉が伐採され、尾根上の平坦地全域にわたり、数個の円礫および亜角礫が腐植土から露出しており、かつて存在したという五輪塔付近に供物が残存していた。

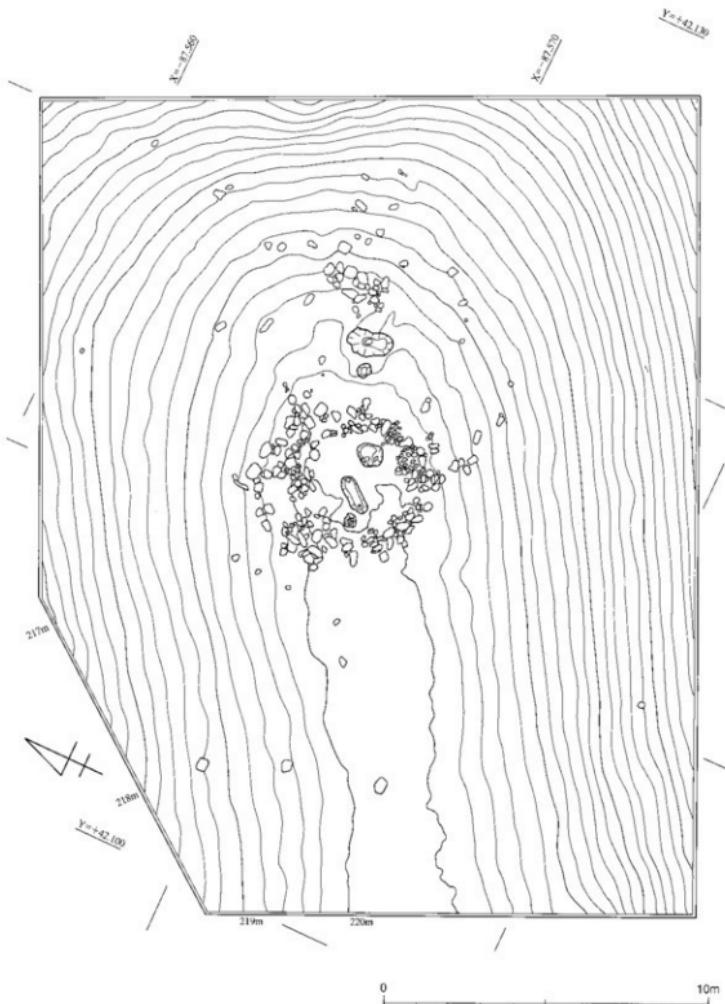
この礫の分布する尾根上平坦部を中心に調査区を設定した。調査面積は475m<sup>2</sup>である。

調査の結果、調査区のはば中央において、礎石建物とそれを取り囲む集石遺構が、その東側で石列と土坑2基が検出された。

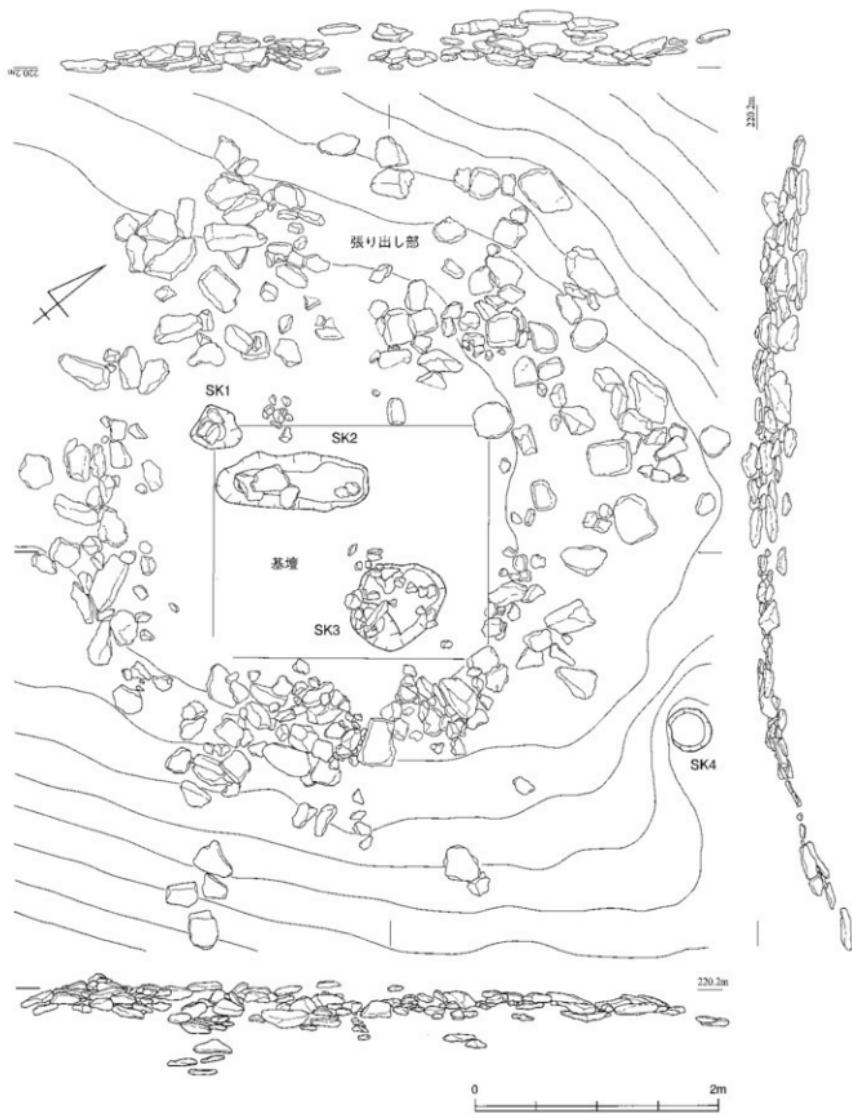
これらの遺構は、腐植土の直下あるいは若干の流土除去後に検出されたものである。

### 集石遺構

調査区の中央、尾根の突端において、地山の上に貼られた礫の集積である集石遺構が検出された。礫は崩落のためか、明確に列をなしたり、積み上げた状況は確認できなかった。尾根の最高所である集石の中央部分には、方形を呈する2.5×3.0mの礫の空白地帯がみられる。さらに、集石の北西部は外方に張り出している。



第86図 C-3 区 全体図



第87図 C-3区 主要造構図

すなわち、尾根斜面に施された2.3×2.8mの長方形の集石部に、幅4m、長さ1.6m程度の張り出し部が北西方向に取り付くこととなる。

集石造構を構成する礫には円礫と亜角礫がある。前者は、麓を北流する円山川から採取したものを山上に運び上げたもので、後者は、尾根上の地山に含まれるものである。現在も円山川の河床には直径20cm程度の円礫が多くみられる。

円礫と亜角礫の体積比は約4:1と、圧倒的に前者が多い。麓の川原から運び上げた円礫は約160個、総重量は約800kgを測る。円礫は0.1~25kgまでの重さがあり、平均値は5.1kgで、2kg程度のものが多い。最も重いもの(25kg, 15×30×40cm)でも一人で持ち上げることは可能である。

亜角礫のうち、最も重いものは約30cm角で、14kgである。多いのは15cm角程度、約2kgの礫である。

円礫と亜角礫の使われ方に、分布上の差異は認められない。

#### 礎石建物

集石造構を形成する礫のなかには、水平に据えられた上面の平坦な礫が2個含まれており、礎石と考えられる。礎石の規模は25~30cm角程度である。この2石と直角の位置関係にある空みであるSK1を、礎石を抜き取った基底部とすれば、残る1石が確認できないものの、集石造構の中央部に一間四方の礎石建物1棟を復元することができる。この建物は、尾根の中心方向よりやや北方向に振り、棟軸の方向はN40°Eである。柱間は短辺1.95m、長辺2.28mを測る。

また、先述した張り出し部を出入口とすれば、集石造構全体を、礎石建物の基壇と捉えられる。

基壇の内部から、建物と重複して3基の土坑が検出された(SK1、2、3)。

#### SK1

SK1は35×40cmの不整形な平面形を呈し、深さは15cmを測る。埋土中には重なりをもった3個の円礫が出土した。先述したように、礎石抜き取り跡の可能性が高い。

#### SK2

SK2は長さ126cm、幅42cm、深さ15cmを測る椭円形の土坑であり、検出面で4個の円礫が、土坑底の両端で各1個の亜角礫が出土した。また、土坑底からは須恵器の破片が数点出土した。

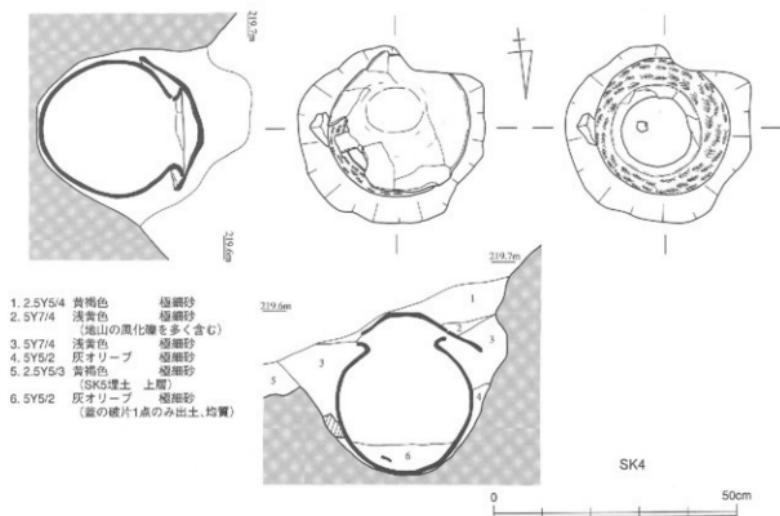
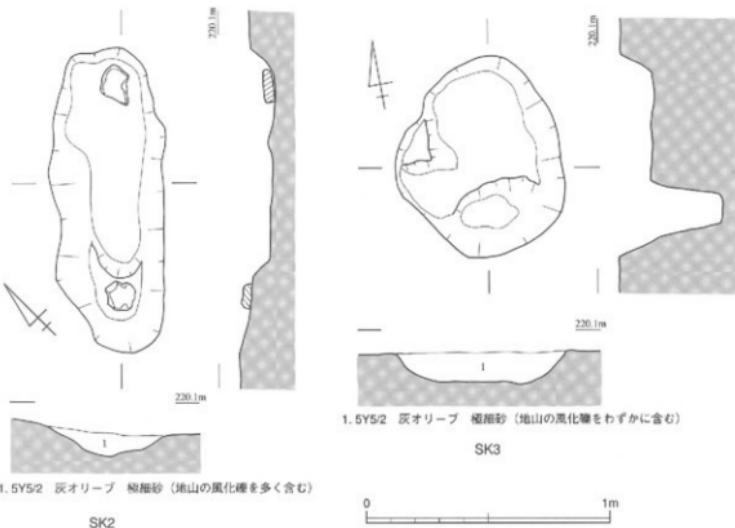
#### SK3

SK3は68×83cmの不整形な平面形を呈し、深さは13cmを測る。土坑の南端はさらに深くなる。

SK2、SK3の性格については不明とせざるをえないが、建物の内部に位置し、SK2は建物の方向に平行することから、建物築造直前に掘り込まれたものであろう。

#### SK4

基壇の裾から約1m東で土坑が2基隣接して検出された(SK4・5)。畦の断面観察によれば、両者は切り合い関係にあり、西側に位置するSK4がより新しい。SK4は、直径47cm、深さ41cmを測る円形の土坑である。内部には、完形の須恵器甕が正位に据えられており、土坑壁との間に、甕の固定のためと思われる小礫を挟んでいた。甕の上には、逆位の須恵器の鉢が、やや南に傾いた状態で蓋として被せてあったが、この蓋によって完全に甕が密閉されたわけではなく、甕の内部には、蓋として使われた鉢の小片とともに、厚さ約5cmの土の堆積が認められた。この土の中には火葬骨は一切みられないこと、金属だけでなく、腐朽しやすい竹や木製の経筒も広く使用されていたらしいことを考えあわせると、この甕は、経筒の外容器の可能性が高いと考えられる。内部の土の残存脂肪酸分析によつても、動物起源の脂肪酸が一切検出されなかったことから、藏骨器等でないことは間違いない。



第88図 C—3区 土坑・経筒外容器

SK 4 はこのように経筒外容器の可能性が高い遺構であるが、周囲に盛土等は存在せず、後述する石列が SK 4 に関する区画施設の可能性がある。

#### SK 5

SK 5 は長さ 142cm、幅 76cm、深さ 25cm を測る楕円形の土坑である。埋土の上層からは須恵器の壺が数片出土した。

#### 石列

この SK 4、5 の東方には、地山直上において、ほぼ南北を指す長さ約 2.0m、幅 0.9m の石列が検出され、これら土坑の区画施設である可能性もある。またさらにその外側に散在する礫をたとえば、尾根筋に平行する一辻 6m 程度の方形区画になるのだが、ともに残存状況がよくないため断定はできない。

なお、調査区の西端の尾根稜線上には、基壇部分と同様の平坦な地形があり、何らかの施設の存在が想定されたのだが、遺構は確認されなかった。

#### 基壇出土遺物

平安時代末から鎌倉時代初頭頃の須恵器の壺、鉢小片が各 2 個体、基壇のほぼ中央、特に SK 2、SK 3 の間を中心にして、広く礫の上面にかけて散在していた。器種ごとにある程度のまとまりはうかがえるものの、原位置を推測できる状態ではない。ここでの出土遺物は壺と鉢に限られ、これは SK 4 の経筒外容器の組み合わせと同じであることから、SK 4 以外にも経筒外容器が複数存在した可能性もある。

392~394 は、須恵器の鉢である。口径は、392 が 28.0cm、393 が 28.5cm を測る。いずれも口縁端面が外側に傾斜するものであり、端部の肥厚は顯著でない。

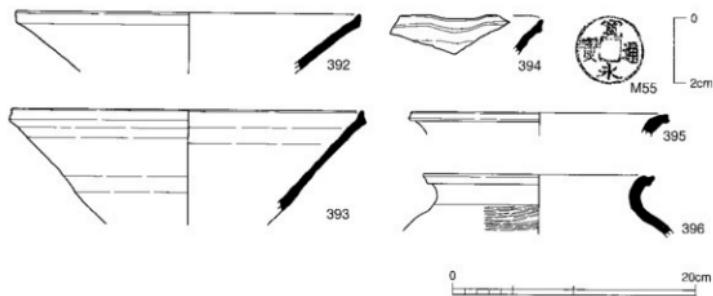
395・396 は、須恵器の壺である。口径は、395 が 20.1cm、396 が 18.8cm を測る。口縁端部の形状に差がある。395 は中央がややくぼむ罐面を形成するのに対し、396 は斜め上方へ摘み上げることによって、外方に開く罐面を形成するものである。396 の体部外面には横方向の平行叩きが認められる。

M55 は、表土から出土した銅錢である。直径 2.1cm、孔 0.6cm を測る寛永通寶である。

#### SK04 出土遺物

397 は、須恵器の鉢である。埋設土器の蓋として利用されていたもので、完形である。口径 28.8cm、器高 10.0cm を測る。口縁端面が外側に傾斜するものであり、下端部の肥厚は顯著でない。

398 は須恵器の壺である。埋設土器の身として利用されていたもので、完形である。口径 19.1cm、器



第89図 C-3 区 基壇出土遺物

高28.9cmを測る。体部外面に太く深い右下がりの絞杉叩きをもつ。体部内面はナデ仕上げである。

## 第5節 小 結

C-1区から、平安時代末から鎌倉時代初頭頃の経塚と考えられる遺構2基（集石遺構1・2）が隣接して検出された。後世の攪乱等を受けていたため明確ではないが、素掘りの土坑の内部に経筒外容器として須恵器壺を用い、須恵器鉢を蓋とする。土坑の周囲には縁を円形に配置し、集石遺構1についてはさらに円形の配石、その外側に方形の配石を行ない、さらに縁でこれを覆った小規模な塚状を呈するものである。

経筒外容器の内部には集石遺構1には和鏡1面が、集石遺構2には鉄製刀子1点が埋納されていたが、腐食のためか、経筒・經典等は遺存していない。

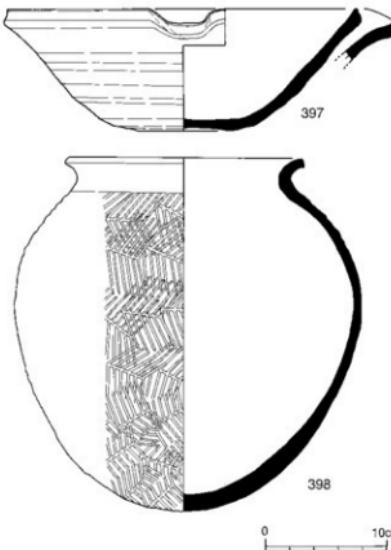
この遺構の残存脂肪酸分析を行ったが、性格の判断に有効な分析結果は得られなかった。広い範囲で動物起源の脂肪酸が検出されたもので、地元の伝承にある「無縫仏を弔うための墓地があった」ことに理由を求められるかもしれない。

C-1区尾根の北側斜面中腹に位置するC-2区では、地山を切り盛りして確保した平坦面に、平安時代後半から鎌倉時代にかけて、掘立柱建物3棟、土坑等を営む。立地等から通常集落とは考えがたい。

C-3区は、薬師堂の西側背後の尾根上に位置し、平安時代末から鎌倉時代初頭頃の一間四方の礎石建物と、その基壇が検出された。基壇斜面には縁を配し、出入口と思われる張り出し部をもつ。基壇の東方では、経筒外容器と思われる埋設土器が検出された。外容器は素掘りの土坑に納められ、平安時代末頃の須恵器の壺に鉢で蓋をしたものである。腐食のため経筒・經典・埋納品等は遺存していない。

C-3区で検出された尾根上の礎石建物は、その立地や、礎を貼った基壇をもつ構造、経筒外容器に隣接するという点、出土遺物の組み合わせもさなる経筒外容器の存在を暗示するという点から、日常生活の場ではなく、堂宇のような何らかの宗教的な施設であった蓋然性が高い。

このように、A・B地区の西方に位置する尾根の稜線や中腹には、山麓のA・B地区と同時期に、きわめて宗教色の強い遺構群が展開していたことが分かる。



第90図 C-3区 経筒外容器

(1) 森内秀造 1992『博物館普及資料第10集 兵庫の経塚』兵庫県立歴史博物館

(2) 三宅敏之 1977『経塚の遺物』『新版仏教考古学講座』第六巻 経典・経塚 堆山閣出版

# 第6章 分析・鑑定

## 第1節 薬師前遺跡から出土した木製品の樹種

### 1. はじめに

薬師前遺跡は、円山川沿いの山麓緩斜面に位置し、鎌倉時代から数回の建て替えを行った堂宇建築や、平安時代から鎌倉時代の鍛冶炉と考えられる遺構を有する集落（B地区）、鎌倉時代の掘立柱建物跡（SB10）や土石流で埋没した谷等が検出（A地区）されている。このうち、堂山東麓区の埋没谷から曲物や下駄などの木製品、SB10の柱穴から柱材が出土した。今回の分析調査では、これらの木製品や建築材の樹種同定を行い、用材に関する資料を得る。以下の分析はパリノ・サーヴェイ株式会社が実施した。

### 2. 試料

試料は、堂山東麓区から出土した木製品8点（試料番号1～8）と、柱材4点（試料番号9～12）の合計12点である。各試料の詳細は、樹種同定結果とともに表1に記した。

### 3. 方法

試料は、木口（横断面）・柵目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面について作成されたプレバラートの形で受領した。受領したプレバラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

### 4. 結果

樹種同定結果を表1に示す。木製品・建築材とも全て針葉樹材であり、2種類（スギ・ヒノキ）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を、以下に記す。

●スギ (*Cryptomeria japonica*) (L.f.) D. Don スギ科スギ属  
仮道管の早材部から晚材部への移行はやや急で、晚材部の幅は比較的広い。樹脂細胞がほぼ晚材部に限って認められる。放射組織は柔細胞の

みで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で、1分野に2～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

第2表 樹種同定結果

| 番号 | 地区 | 区                     | 登録番号     | 種類 | 種別   | 樹種  |
|----|----|-----------------------|----------|----|------|-----|
| 1  | A  | 堂<br>山<br>東<br>麓<br>区 | W2左      | 曲物 | 容器   | ヒノキ |
| 2  | A  |                       | W1       | 曲物 | 容器   | ヒノキ |
| 3  | A  |                       | W2右      | 曲物 | 容器   | ヒノキ |
| 4  | A  |                       | W3       | 曲物 | 容器   | ヒノキ |
| 5  | A  |                       | W4       | 曲物 | 容器   | ヒノキ |
| 6  | A  |                       | W9       | 下駄 | 履き物  | ヒノキ |
| 7  | A  |                       | W6       | 下駄 | 履き物  | ヒノキ |
| 8  | A  |                       | W8       | 舟串 | 祭祀具  | スギ  |
| 9  | A  |                       | SB10P162 | 柱  | 建築部材 | スギ  |
| 10 | A  |                       | SB10P161 | 柱  | 建築部材 | スギ  |
| 11 | A  |                       | SB10P160 | 柱  | 建築部材 | スギ  |
| 12 | A  |                       | SB10P164 | 柱  | 建築部材 | ヒノキ |

●ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野導孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1～3個。放射組織は単列、1～15細胞高。

## 5. 考察

出土した木製品は、曲物、下駄、簍串に分類される。曲物と下駄は全てヒノキ、祭祀具はスギであった。曲物にヒノキを利用する傾向は、これまでに県内で行われてきた調査でも認められている（島地, 1989, 1996；島地・林, 1990a, 1990b, 1992）。これは、民俗事例でヒノキがよく利用されること（成田, 1996）とも調和的である。ヒノキが利用された背景には、均質で木理が通直なために、薄い板状の加工が容易であること、精油成分を含むために耐水性・防虫性に優れていること等が考えられる。下駄にヒノキが利用されていることについても、耐水性等の材質が考慮された可能性がある。中世の下駄の樹種同定を行った例は少ないが、広島県福山市草戸千軒町遺跡では、出土した下駄の多くがヒノキに同定されており（パリノ・サーヴェイ株式会社, 1997）、今回の結果とも一致する。このことから、中世には下駄材として、ヒノキが多く利用されていた可能性がある。

一方、祭祀具の簍串はスギであった。祭祀具については、これまでの調査でヒノキが比較的多く利用されている（島地, 1989, 1996；島地・林, 1992）。ヒノキ以外の種類でもモミやツガなど、針葉樹材で多くを占める。スギの利用は少ないが、針葉樹を利用している点ではこれまでの結果とも一致する。本地域では、スギとヒノキ共に建築部材に認められていることから、周辺で入手可能であったことが推定される。このような状況を考慮すると、祭祀具の用材は加工性のよい針葉樹であれば樹種に関係なく利用していた可能性がある。

建築部材は、1点がヒノキで、他の3点はスギであった。いずれも木理が通直で巨木になる種類であり、古くから大型建築物の柱材などとしてよく利用されている（島地・伊東, 1988）。とくにヒノキの利用は、近畿地方の宮殿や寺院の建築部材にヒノキが多く利用されている結果（西岡・小原, 1978；伊東・島地, 1979；島地ほか, 1980）とも一致する。宮殿や寺院にヒノキが多く利用された背景には、大型の木材が得られることと共に、木理が通直で加工が容易なこと、耐水性に優れていること等の材質も考慮された結果と考えられる。スギも、ヒノキに比較すると耐水性は低いが、木理が通直で加工が容易なことや、大型の木材が得られる点では共通する。本地域においても、巨木が得られることやその材質などが考慮されていたことが推定される。

## 引用文献

- 伊東隆夫・島地 謙（1979）古代における建造物柱材の使用樹種、木材研究・資料、14, p.49～76, 京都大学木材研究所。
- 成田壽一郎（1996）曲物・簍物、205p., 理工学社。
- 西岡常一・小原二郎（1978）法隆寺を支えた木、NHKブックス318, 226p., 日本放送出版協会。
- パリノ・サーヴェイ株式会社（1997）草戸千軒町遺跡から出土した下駄の樹種、「草戸千軒町遺跡調査研究報告1 草戸千軒町遺跡出土の下駄」, p.70～86, 広島県立歴史博物館。

- 島地 謙（1989）小犬丸遺跡出土木器の樹種、兵庫県文化財調査報告第66冊「龍野市 小犬丸遺跡 県道竜野相生線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告」、p.79-87、兵庫県教育委員会。
- 島地 謙（1996）玉津田中遺跡出土木製品の樹種、兵庫県文化財調査報告第135-6冊「神戸市西区 玉津田中遺跡 - 第6分冊 - (総括編) - 田中特定土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告-」、p.15-49、兵庫県教育委員会。
- 島地 謙・林 昭三（1990a）雨流遺跡出土木製品の樹種、兵庫県文化財調査報告第76冊「雨流遺跡-淡路縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書-」、p.67-75、兵庫県教育委員会。
- 島地 謙・林 昭三（1990b）山垣遺跡出土木製品の樹種、兵庫県文化財調査報告第75冊「山垣遺跡発掘調査報告書 近畿自動車道舞鶴関係埋蔵文化財調査報告 (XIII)」、p.57-64、兵庫県教育委員会。
- 島地 謙・林 昭三（1992）川除・藤ノ木遺跡出土木製品の樹種、兵庫県文化財調査報告第104冊「三田市川除・藤ノ木遺跡 - 武庫川河川改修に伴う埋蔵文化財調査報告書-」、p.771-786、兵庫県教育委員会。
- 島地 謙・伊東隆夫編（1988）日本の遺跡出土木製品総覧.296p.、雄山閣。
- 島地 謙・伊東隆夫・林 昭三（1980）古代における宮殿・官衙の使用樹種、古文化財編集委員会編「考古学・美術史の自然科学的研究」、p.249-260、日本学術振興会。

## 第2節 薬師前遺跡出土の和鏡の分析

薬師前遺跡より出土した和鏡の保存処理にあたって、事前に金属製品保存処理担当の岡本が独立行政法人奈良文化財研究所において、埋蔵文化財センター遺物処理研究室の肥塙隆保室長と高妻洋成氏の指導と助言を得て蛍光X線分析による材質調査を行った。

### 1. 試料調査の方法

調査は、奈良文化財研究所において行った。調査には、エネルギー分散型微小点蛍光X線分析装置（株式会社テクノス社製 TREX650）を用いた。ターゲットはモリブデン（Mo）、管電圧45kv、管電流0.3mA、測定時間300sec、コリメーターは1mmφを使用し大気圧中で測定した。遺物の表面の色調は、鈍い緑色を呈し、全面に安定した銹の層が形成されている。当初、鏡面部分の一部を研磨して地金部分の定性分析を行う予定であったが、事前にX線で構造調査を行った際に、鏡全体に細かなヒビが認められたため、鏡の一部分の研磨は見合せ、第91回に示した表面部分の測定にとどめた。

### 2. 分析結果

蛍光X線分析は、特徴として試料の形状や表面状態が良好な場合には、再現性の良い定量的なデータを得ることが可能であるが、今回のような出土遺物の非破壊分析では、土成分の付着や埋蔵中に製品の金属元素が土中へ拡散流出するなどの現象が生じるため、組成を正確に定量分析するのは困難である。したがって今回の分析結果は、遺物の構成元素の大まかな組成を推定するための参考に留まった。

分析の結果、当該資料から検出された元素から主に銅(Cu)と錫(Sn)を主成分とする青銅で、これに鉛(Pb)を含有していることがわかった。その他には鉄(Fe)、ヒ素(As)もわずかに検出された。鉄については、遺物が埋蔵されていた周囲の土の中に含まれていたものが付着したために出土されたものと考えられる。ヒ素は、分析値を見る限り、非常に微量であるため銅や鉛鉱石に付随して混入したものと考えられる。

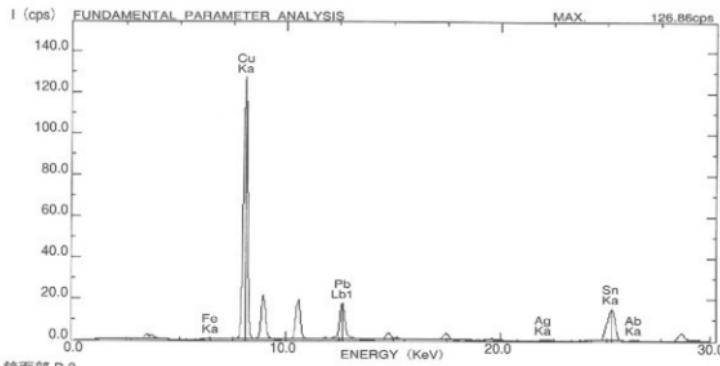


分析箇所 (鏡面)

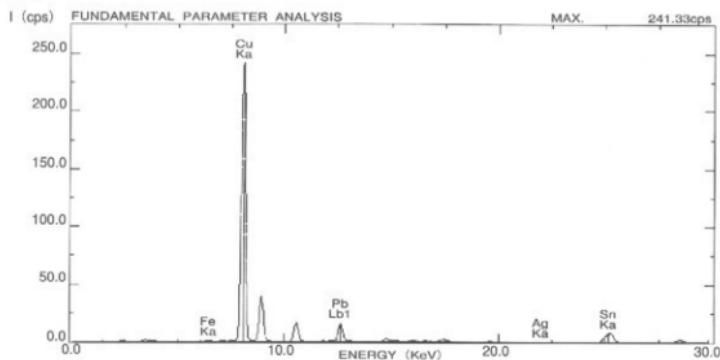
分析箇所 (鏡背)

第91図 和鏡の分析箇所

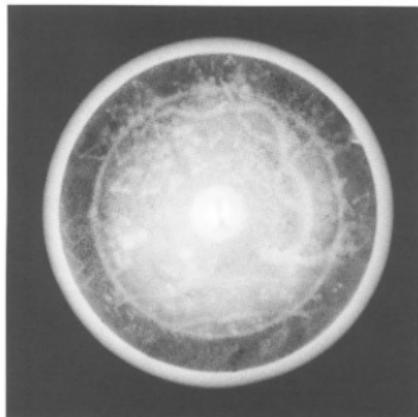
鏡背部 P 1



鏡面部 P 2



第92図 蛍光 X 線定性分析スペクトル



第93図 X 線写真

## 第3節 薬師前遺跡の経塚内容物に関する脂肪酸分析

### はじめに

薬師前遺跡（朝来郡朝来町薬師前・屋敷・井谷・堂山に所在）は円山川の谷底低地から丘陵にかけて位置する。今回の発掘調査の結果、丘陵上の調査区であるC-1区およびC-3区からは経塚とみられる遺構が検出されている。C-1区で検出された遺構は2基ある。1基は河原石で構築された一辺2.5mの方形区画をもち、その中から経筒の外容器と考えられる須恵器の壺と和鏡が出土している。また、本遺構に接する内径40cmの円形の石組からは須恵器鉢と鉄製刀子が出土している。C-3区では、一間四方の礎石建物の基壇と経筒の外容器が検出されている。経筒外容器は石組を伴わず、平安時代末頃の須恵器の壺に鉢で蓋をした状態で検出されている。これらの遺構からは、腐食のためか経筒や経文は出土せず、経筒の本体や経文の軸に利用される木材や竹材などの遺物も肉眼で確認できなかった。

そこで、経文の埋納を判断する上での資料を得るために、木材の痕跡の有無を自然科学分析的に検討する。その方法として、植物由来する脂肪酸やステロールの有無を調べる脂肪酸分析を実施する。以下の分析はパリノ・サーヴェイ株式会社が実施した。

### 1. 試料

試料は、C-1区の集石1および集石2、C-3区のSK4から採取された6点である（表1）。

集石1は河原石で構築された一辺2.5mの方形区画内に経筒の外容器と考えられる須恵器の壺内の土壤と集積外の土壤である。集石2は石組内の須恵器鉢下の土壤と集石の埋土である。送付資料によれば、集積の埋積土は黄褐色や褐色などの黒味の少ない細砂～極細砂からなる。SK4は礎石建物の基壇から東側に下った位置で検出され、黒味の少ない土壤を掘り込んで構築されている。土坑内からは鉢で蓋がされた須恵器の壺が出土し、壺内には周囲と同様な土壤によって埋積されている。試料はこの土器内埋土と遺構の掘り方の土壤である。

### 2. 分析方法

分析は、坂井ほか（1995）に基づき、脂肪酸およびステロール成分の含量測定を行う。

試料を十分な量のクロロホルム：メタノール（2：1）に浸し、超音波によるソニケーションを行い、脂質を抽出する。ロータリーエバボレーターにより溶媒を除去し、抽出物を塩酸-メタノールによりメチル化する。ヘキサンにより脂質を再抽出し、セップパックシリカを使用して、脂肪酸メチルエステルとステロールを分離する。

脂肪酸メチルエステルの分離には、キャビラリーカラム（ULBON, HR-SS-10, 内径0.25mm, 長さ30m）を装着したガスクロマトグラフィー（GC-14A, SHIMADZU）を使用する。注入口温度は250°C、

第3表 分析試料

| 試料番号 | 地区   | 遺構  | 試料       |
|------|------|-----|----------|
| 1-1  | C-1区 | 集石1 | 土器内の粗土   |
| 1-2  | C-1区 | 集石1 | 集石外の土壤   |
| 2-1  | C-1区 | 集石2 | 須恵器鉢下の土壤 |
| 2-2  | C-1区 | 集石2 | 集石の埋土    |
| 3-1  | C-3区 | SK4 | 土器内の粗土   |
| 3-2  | C-3区 | SK4 | 掘り方の埋土   |

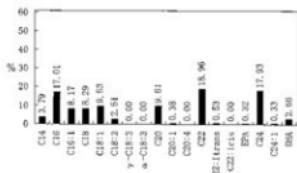
検出器は水素炎イオン検出器を使用する。

ステロールの分析では、キャビリーカラム (J&W SCIENTIFIC, DB-1, 内径0.36mm, 長さ30m) を装着し、注入口温度は320°C、カラム温度は270°C恒温で行う。キャリアガスは窒素を、検出器は水素炎イオン化検出器を使用する。

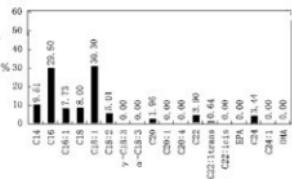
### 3. 結果

結果を図1に示す。ステロールは、各試料から5~6種類が検出される。このうち、シトステロール、ステイグマステロール、カンペステロールは植物に多くみられ、エルゴステロールはキノコなどに存在する(菅原ほか, 1987)。特にシトステロールは、植物質食品中のステロール組成でもステイグマステロールやカンペステロールと比べて高い割合で含まれており(菅原ほか, 1987)、植物中に最も多く含まれる

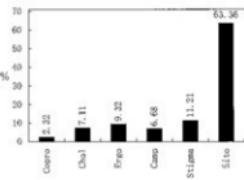
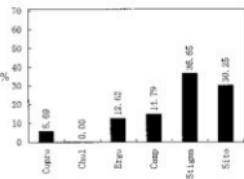
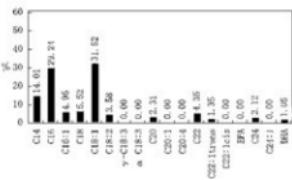
試料番号1-1 (C-1区 集石1 土器内の残渣)



試料番号3-1 (C-3 PC SK4 土器内の種々)



試料番号3-2 (C-3 PC SK4 納り方の土器)



第6表 集石および土坑の脂肪酸・ステロール組成（2）

ステロールであると考えられる。また、コレステロールは動物体に特有であり、細胞膜や血清中に多く存在し、その機能に関与するだけではなく、胆汁やホルモン合成の前駆体としても重要である（菅原ほか, 1987）。コプロスタノールは、コレステロールが大腸菌などによって分解されて生じ、糞などに多くみられる（中野, 1995）。検出された種類の中では、シトステロールやスティグマステロールが多い傾向にあり、特に試料番号3-2ではシトステロールの占める割合が高い。しかし、集石1や集石2の土器内および造構内から採取された試料番号1-1・2-1・2-2では動物に特有なコレステロールや糞などに多いコプロスタノールも高くなっている。また、集石1の外側の試料番号1-2もSK4の掘り方から採取された試料番号3-2と比べて高い。

一方、脂肪酸組成は動物油や植物油に多く含まれる脂肪酸（島薦, 1988）、すなわちミリスチン酸（C14）やバルチミン酸（C16）、バルミトイン酸（C16:1）、ステアリン酸（C18）、オレイン酸（C18:1）が全体的に高い。またアラキジン酸（C20）、ベヘン酸（C22）、リグノセリン酸（C24）も見られ、特に試料番号1-1・2-1・2-2で高くなっている。これらは脳や神経に多く含まれる脂肪酸であり（中野, 1993）、特にアラキジン酸（C20）は生体膜の構成成分として重要な動物リン脂質の一種である（島薦, 1988）。

#### 4. 考察

平安時代末の土坑SK4と集石造構2は砂質の土壤により埋積されており、土壤中の理化学成分を吸着しやすい粘土分が少ないことが推定される。そのため、埋納物に由来する成分が現代までに流亡・拡散したことがうかがえる。集石や土坑より出土した土器内の土壤の色には黒味が少なく、植物に由来する土壤腐植はあまり含まれていないと思われる。また、自然状態では土壤中の脂肪酸などの化学組成は均質になるが、人為的な埋納が行われた場合には場所によって組成にばらつきが生じる（小山, 1995）。

今回の調査結果では、土器や造構の内外で植物由来のシトステロールやスティグマステロールの多い

傾向が見られた。しかし、集石1や集石2では土器内よりも遺構外の土壤で高く、土器内で植物由来のステロールが富化しているとは言えない。SK4についても基本的には集石1・2と同様であるがステイグマステロールの比率が土器内で顕著に高くなっていることが窺える。この状況は内容物に起因する可能性もあり、そうだとすると土器内に植物質のものが存在したことになる。

また脂肪酸組成をみると、多産するミリスチン酸(C14)、パルチミン酸(C16)、ステアリン酸(C18)、オレイン酸(C18:1)は動物油や植物油に多く含まれ、種類構成だけでは埋納物の種類を判別することが難しく、植物質成分の残留は考えにくい。なお、分子量の小さい脂肪酸が高い点は分子量の大きい脂肪酸や不飽和脂肪酸が分解されやすくな(坂井・小林、1995)、経年変化により分子量の小さい脂肪酸の割合が相対的に高くなったためと考えられる。

ところで、集石1や集石2の土器内外では動物に特有なコレステロールや黄などに多いコプロスタンノールも高かった。また、集石1や集石2の各試料で検出された動物質の埋納推定に関して有効なアラキジン酸(C20)、ベヘン酸(C22)、リグノセリン酸(C24)などC20以上の脂肪酸と動物由来のコレステロールの相関関係を見ると(図2)、相関係数0.78で正の相間が認められ、動物由来の可能性を考えられる。集石1では遺構の外側でもコレステロールが高いことから、動物由来の脂肪酸を含む範囲は集石の外側にまで及んでいることが窺える。SK4でも、壺内からコプロスタンノール、掘り方埋土でもコプロスタンノールやコレステロールが認められ、遺構周辺に動物由来の成分の混入が窺えるが、壺内からコレステロールがほとんど検出されない点は集石1・2と異なった状況と捉えられる。

以上のように、C-1区の集石1・2、C-3区のSK4では、土器内に経筒本体や経文の軸などに由来する成分が残存していることを積極的に支持する結果は得られなかった。また、集石1・2はいずれも動物質の影響を強く受けていると考えられる。SK4については集石1・2とは多少異なる組成を示しており、植物遺体の存在の可能性も考える必要がある。この点については、経塚に関する考古学的所見を含めて総合的に評価することが大切と考える。

#### 引用文献

- 小山陽造(1995)東北地方の脂肪酸分析結果、考古学ジャーナル,386,p.17-21。
- 中野益男(1993)脂肪酸分析法、「第四回試料研究法2 研究対象別分析法」,p.388-403,東京大学出版会。
- 中野益男(1995)脂肪酸分析の現状と課題、考古学ジャーナル,386,p.2-8。
- 坂井良輔・小林正史(1995)脂肪酸分析の方法と問題点、考古学ジャーナル,386,p.9-16。
- 坂井良輔・小林正史・藤田邦雄(1995)灯明皿の諸質分析、富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第7集「梅原胡麻堂遺跡発掘調査報告(遺物編) 第二分冊」,p.24-37,財團法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所。
- 鳥籠順雄(1988)標準栄養化学・生化学,205p., 医薬出版社。
- 菅原龍幸・福沢美喜男・青柳康夫・大川博徳・小泉典子(1987)食品学実験,233p., 建帛社。

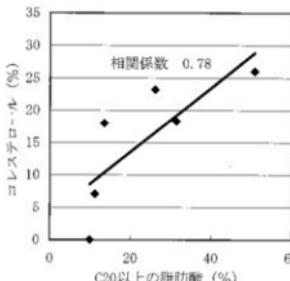


表5 C20以上の脂肪酸とコレステロールの相関

# 第7章 まとめ

## 第1節 A 地区の概要

### 1. 概要

調査の結果、A 地区では礎石建物・掘立柱建物などの建物や、鍛冶炉・焼土坑・土坑・溝などの遺構を検出することができた。そのうち、遺構の中心は壇状遺構区・薬師堂下層区に集中しており、この場所が当地区の中心的な位置を占めていたと考えられる。一方、堂山東麓区や矢の谷区では埋没河道上の立地にも関わらず掘立柱建物が形成され、生活痕跡が残されていた。遺跡周辺の地形からするとやむをえないとはいえる、当時の屋敷選地を考える上で興味深い。

当地区での遺構の前後関係については次のようになる。まず、遺物の時期から堂山東麓区と壇状遺構第2・3面が12世紀後半～末で、A 地区の中世段階で最初に手がつけられている。次に、壇状遺構第1面前後・矢の谷区のSB11が13世紀前半頃に設けられ、堂宇建築がこの時期に創建されている。最後の段階では薬師堂下層区・壇状遺構第0面などがあって、壇状遺構は廃絶したようである。そして、13世紀中頃以降薬師堂下層区に寺院関連の建築物が継続して建てられた。この場所が信仰の対象として現在まで地元の人々から崇敬を集めてきたようである。

一方、堂宇建築の建立に併行して、背後の丘陵上には経塚（C-3区）や小規模な堂宇（C-3区）が設けられ、遺跡の宗教施設が充実している。特に、SB1を初めとする堂宇建築は礎石建物としては大規模なもので、この時期の検出遺構としては但馬でもあまり類例がない。また、単独で見つかることが多い経塚などの施設と、核となる建物などの施設とが一括で検出されたと言う点でも今回の調査は大きな成果であった。

このように A 地区の中心部の様相は特殊なものであるが、この点は一般集落が継続する B 地区と大きく異なる。しかし、堂宇建築が建つ以前、壇状遺構第2・3面の段階をとらえてみると、どちらもこの時点では鍛冶遺構とこれに関連する掘立柱建物で構成され、よく似た構造をもっていることになる。ただし、B 地区の集落は A 地区よりも存続期間が長く、少なくとも古代から中世まで継続して営まれ、建物構成からみると集落内部に大型の建物も見られ、内部に階層差が存在する。このため12世紀後半～13世紀頃には自立農民層の屋敷が形成されている。これに対して A 地区の掘立柱建物群は小規模な建物が単体で存在するのみですべてが短期間しか存在しない。こういった点から考えると当地区の集落段階は B 地区に存在した核の集落の外縁に位置すると評価される。つまり、12世紀後半～13世紀前半頃に B 地区を中心とする集落が盛期を迎える、外縁部分の丘陵斜面や中腹、または普段なら立地しないような埋没河川上の立地などに現れたと考えられる。

遺物に関しては前章で記したとおり、土師器・須恵器を中心としており、磁器や陶器を極少量含む構成となっている。また、瓦器がわずかに含まれるもの黒色土器とともにほとんど含まれていないことも特徴的である。

ただし、南但地域では中世のこの時期の資料はまだ少数に止まっており、比較できる良好な資料には恵まれていない。その中でムクノキ遺跡はやや時期幅を持つものの当該期の土師器皿・壺・甕、須恵器

椀・皿・鉢などが出土しており、薬師前遺跡に酷似した様相を示している。やや磁器幅があるため詳細は決めがたいが朝来郡域ではやはり播磨に近い様相をもつことは疑いがなさそうである。ただ、ムクノキ遺跡では黒色土器が含まれるため京都丹波・丹後に近い様相をもっている。この点からすると薬師前遺跡は播磨により近く、京都丹波に近くなるムクノキ遺跡は東側に影響を受けた様相になっているといえよう。

## 2. 堂宇建築周辺の炭層

礎石建物SB1の周囲には暗褐色土の炭・灰混じり層が堆積していた。この層には細かく砕かれた土器部皿が大量に混入しており、出土した土器部皿はコンテナ6箱分に及んだ。この炭層の範囲はSB1の建物範囲にはほぼ一致するが、礎石据付痕跡や建物内部には基本的に堆積が認められない。このため同層の堆積はSB1の礎石据付後に建物周囲を覆うように堆積したものと判断された。そして、同層は土器が細片で占められる点や、図版13下段で示したとおり厚さ2~5cm前後で薄く敷き詰められたよう広がることから、人為的に客土されたものである。一方、SB1須弥壇周辺には焼土層の堆積がある。この堆積層には炭化材や焼土が含まれること、遺物も須恵器・土器・鐵器など多種類のものが含まれ、完形品を含む大型の製品や被熱したものを含む。そして、堆積に凹凸がみられ厚い部分では20cmに及んでいる点で前者と大きく相違する。以上から明らかに焼失した建物の瓦礫層と考えられる。

以上のとおり、この2つの堆積層は一見相似しているが、明らかに異なる様相をもっていることが判明している。後者の焼土層については焼失瓦礫として疑う余地はないが、前者の炭層については焼失に伴う堆積と考えるよりは、SB1建築時の人の為的な敷設と考えたほうが妥当であろう。その意味で堂宇建築の発掘調査事例を再見すると旧清瀧跡<sup>(1)</sup>・満願寺(川西市)<sup>(2)</sup>・円満寺東の谷遺跡(加西市)<sup>(3)</sup>などのいくつかの中世寺院で酷似する土層の堆積が認められる。

さらに、薬師堂下層区の土器溜りも注目される。炭の包含はわずかであったが、明らかに細かく砕いた土器部皿を敷き詰めたもので、周囲のその後の搅乱などで検出範囲は限定されたが、もともとは一面に敷き詰められた可能性が大きい。このためこの土器溜りも同じ性格をもった遺構である可能性が大きい。

以上から考えると、これらの土器混り炭層はこれまで焼失瓦礫の堆積層として一括で考えられてきたが、建築時の基礎作業の一環として考えるほうが妥当である。このような行為を行う目的としては、基礎固めや湿気抜きのためのものの可能性が大きい。本報告では一応基礎の湿気抜きのために行ったと考えておきたい。

### 註)

1. 高井悌三郎他「摂津旧清瀧跡発掘調査報告」宝塚市教育委員会・旧清瀧跡発掘調査団
2. 多賀敏樹・田中達夫・岡野慶彦他「川西市満願寺」 川西市教育委員会 1985年刊行
3. 山仲 進「兵庫県多可郡中町西安田長野遺跡群 調査報告(I) 円満寺東の谷遺跡」 西安田長野遺跡調査委員会・妙見山麓遺跡調査会 1999年刊行

## 第2節 B 地区の掘立柱建物

今回の調査によってB地区からは掘立柱建物跡、墓、土坑、溝などを検出した。これらの遺構は各時代において相互に関係しあい存在していた。しかし、多くの遺構では時代を決定する遺物の出土が少なく、すべての遺構においてその関係を示すことはできなかった。そのなかで、掘立柱建物はまとまりをもって復原することができ、それら建物群の群構成と時期差を考察することができた。

B地区で復原できた掘立柱建物は全部で20棟である。B地区は丘陵裾部から平坦面へと移り変わる地形にあり、地形によって遺構の分布が偏っている。B地区的地形を大きく分類してみると

- I 丘陵裾部 (1区、2区、7区)
- II 丘陵裾部から平坦面へ移る緩斜面 (3区、4区、8区、10区)
- III 平坦面 (5区、6区、9区、拡張区)

の3種に分けることができる。次に各地形ごとに、遺構の検出状況を述べる。

### I 丘陵裾部

1区・2区は西側山地の丘陵裾部となっている。この地区は山地からの土石流があるたびに地形が大きく変化し礫層が厚く堆積している。そのため1区、2区は遺構の密度が低く建物も検出していない。

7区は丘陵裾部の地山を削りだした平坦部となっている。この平坦部は周囲に溝を巡らせており、柱穴、土坑、溝などを検出した。検出した柱穴から掘立柱建物が1棟以上建っていたと考えられるが、平坦部東側が後世の造成により削り取られているため詳細は不明となっている。

### II 丘陵裾部から平坦面へ移る傾斜の緩やかな部分

3区・4区は1区・2区の東側に位置しているため土石流の影響を受けている。そのため遺構の密度も低い。しかし、土石流による礫層が厚く堆積しているため、礫層を境とした遺構の前後関係が明確な地区となっている。この地区からは2棟の建物を検出している。

8区は10区より1m低い緩斜面となっている。これは水田の開発によると考えられる。本来は10区と連続した緩斜面であった。土砂の影響はなく、3区・4区より遺構の密度は高い。この地区より建物を2棟検出した。

10区は部分的に7区と連続した緩斜面となっている。遺構の密度は低いが、建物を1棟検出した。

### III 平坦面

全体的に遺構の密度が高く、遺物の出土量も多い。地形は若干ではあるが東へ下がっている。5区・6区・9区・拡張区では土砂の影響が見られるが明確に層位を分けるほど礫層は堆積していない。この平坦面は調査区外東側へと広がっていく。集落の立地としては最も条件の良い場所であり、建物を14棟検出した。

以上のように地形によって掘立柱建物の分布が大きく異なっている。また、調査区内に分布する礫層を境とし、下面を9世紀～10世紀、上面を11世紀後半～13世紀の遺構と2時期に分けることができた。礫層下層の遺構をI期、上層の遺構をII期とし、それぞれの時期の建物について遺構の前後関係、遺物の年代観、建物の主軸方向を基に建物群の抽出を行うことにする。

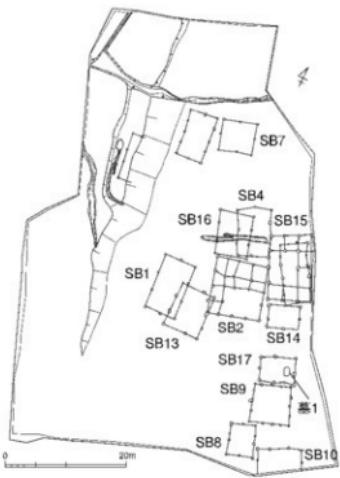
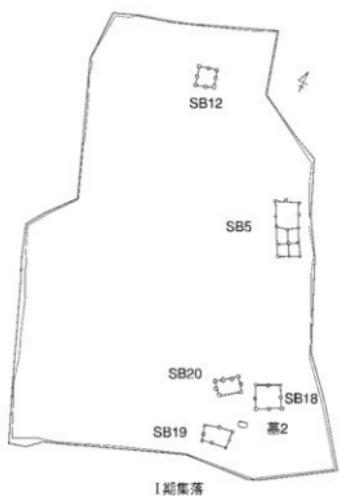
#### I期（9世紀～10世紀）

SB5・12・18・19・20

基本的に礫層下面から検出した建物である。SB5は礫層の影響が無い地区で検出したが柱穴から9

世紀代の土器が出土している。SB12は柱穴の直径が70cmと大型であり古代の様相を示しているためⅠ期に分類した。SB18・19・20は小屋のような建物群をなしていたと考えられる。SB19から9世紀代の坏蓋と坏Bが出土した。

#### Ⅱ期（11世紀後半～13世紀）



第94図 B地区 集落の変遷1

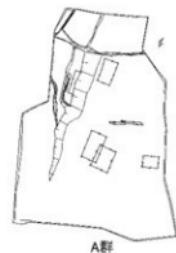
#### A群 (SB1・6・11・13・14)

層位的に前後関係が判明しているのは丘陵裾部で検出したSB13である。この建物は土砂によって堆積した礫層下面から検出されており、礫層上面で検出されたSB1・2よりも古い建物である。SB13とSB1は主軸方向がほぼ共通しており、近接した時期に営まれたと考えられる。土砂でSB13が倒壊した後、SB1が再建されたのではないだろうか。そのためSB13は礫層下面からの検出であるが、SB1との関係、3×2間の建物、柱穴の大きさなどからⅡ期の建物に分類した。

SB1は、SB6・11と主軸方向を同じくしている。SB1の西側とSB6の東側、SB6の南側とSB11の北側は柱通りを描えており同時期に存在したものと考えられる。SB1の柱穴からは須恵器碗の底部が出土している。土器の年代感は11世紀終わり～12世紀ごろのものであり、これらの状況から3棟は平安時代後半を中心とした時期の建物群だと考えられる。また3棟の西側は丘陵斜面となるため、これら建物群は集落の西端に位置するものと推定される。主軸方向は違うがSB14からは11世紀終わりごろの土器が出土している。これら建物群をA群とする。

#### B群 (SB2・7・15・16・17)

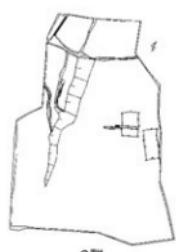
SB2は検出した建物の中で最大の床面積を持ち集落の中心となる建物である。SB2の北東隅の柱穴がSB15の柱穴を切っている。SB15はSB2に次ぐ床面



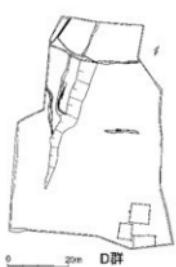
A群



B群



C群



D群

積を持つ建物である。建物が調査区外へ延びると思われるが、検出した範囲の規模や柱穴の大きさから集落の中心となる建物である。これら2棟は桁行4間の純柱建物であり構造が類似している。両建物にあまり時期差もないため、SB2からSB15への立て替えが行われたと考えられる。SB2は、SB16と同じ軸方向をとり、SB7とは直行する。SB15とSB17の2棟、SB2・16・7の3棟は西端の柱通りがそれぞれ揃っており同時存在の可能性を何わせる。SB7・15・17は柱穴から12世紀後半から13世紀の土器が出土している。これら建物群をB群とする。

#### C群 (SB3・4)

柱穴の切り合い関係からSB15に後出するSB3、SB4の2棟である。建物の軸が西に傾くグループである。遺物の出土はないが、SBI5の後に營まれるため13世紀代の建物と考えられる。

#### D群 (SB8・9・10)

拡張区に展開する建物群である。A・Bの建物群から10mほど の空間をおいて立地している。柱通りの悪い建物であり、それぞれ建物内部から焼土を検出している。拡張区は鉄滓や羽口の破片が出土し、小鍛冶が行われていた可能性が高い。そのためD群の建物は小鍛冶の作業小屋とも考えられる。これら建物は近接して建てられているため、建て替えが行われたと考えられる。SB9からは12世紀後半～13世紀の土器が出土した。

B地区の建物群はⅠ期(Ⅰ期～Ⅱ期)(A～D群)の6群に細分できる。これら建物群の変遷を簡単にまとめると次のようになる。

Ⅰ期の建物群は円山川に近い所に立地し、山裾付近まで集落は広がらない。建物はそれぞれ間隔をあけて主軸を揃えず並んでおり自然地形に規制された建物配置といえる。また調査区南部には墓2が存在する。墓壙から10世紀代の須恵器壺が出土しているため、Ⅰ期集落に関係する人物の墓と考えられる。

Ⅱ期の集落は、自然地形に規制されたⅠ期の集落とは違い、主軸方向が揃った建物群からなる集落となっている。これは山裾という狭い土地を有効に利用しながら、建物配置を意識して造成を行ったことの現れと考えられる。

A群が11世紀末～12世紀にかけて、B群が12世紀後半には建てられている。A群とB群は12世紀後半には共存しており、この建物群のなかでSB2が純柱建物であり床面積(76m<sup>2</sup>)と傑出した大きさを誇っている。またSB7に近接した柱穴151では地鎮が行われている。拡張区にある墓1は12世紀の土師器が出土しており、この集落に伴う墓と考えられる。

第95図 B地区 集落の変遷2

13世紀にはいるとSB2はSB15へと建て替えが行われ建物の位置が若干東に移動する。この時期になると集落の南側ではD群に分類した作業小屋が建てられている。小屋周辺に分布する焼土や鉄滓などの出土遺物から、この小屋では小鍛冶が行われていた可能性が高い。その後、SB15の後にC群が建てられる。

14世紀に入る確実な遺構は存在しないが、C群などの建物は存続していた可能性が高い。また、遺物の出土も若干ながらあるため引き続き調査区周辺に集落が営まれていたと考えられる。

このようにB地区の集落はⅠ期は山裾に立地した小集落であり、Ⅱ期は12世紀後半に總柱建物SB2・SB15を中心として、周囲にA群・B群・D群などの側柱建物数棟と墓を付随させた「屋敷」であったことが判明した。また、B地区は遺物の出土状況から7世紀～13世紀にかけて集落が継続的に営まれてきた場所であったと言える。

橋田正徳氏は「屋敷墓試論」の中で広瀬和雄氏の分類を継承してこのような「屋敷」の建物群の再分類を行っている。これによると掘立柱建物群はA型（小百姓層）、B型（百姓層）、C型（在村地主・郷規模の在地領主）、D型（国・郡規模の在地領主）の4つに分類でき、屋敷墓が付隨するのはA・B型に多く、C型はわずかであり、D型は認められていないとしている。そしてこれら建物群に付隨する屋敷墓の埋葬主体は「屋敷」創設者であるとしている。

以上のことからⅡ期の建物群を検討してみると、SB2・SB15は總柱建物であり床面積も70m<sup>2</sup>以上と大きいため「屋敷」主体者の住居、A群・D群及びB群の側柱建物は「屋敷」主体者に従属する人々の住居に位置付けられる。そして墓1は、「屋敷」創設者の墓であるといえよう。このような建物群は、橋田氏によるとC型建物群に分類されるものとなり、在地領主層の「屋敷」であったと考えられる。1285年（弘安8年）但馬の守護であった太田太郎左衛門政頼が幕府に注進した田地帳である「但馬大田文」によると、13世紀には朝来町一帯が莊園化していることが判明している。薬師前遺跡のある地域は広谷庄にあたるため、この「屋敷」は広谷庄に關係する建物ではないかと考えられる。

またⅠ期集落にも墓2が併っており、橋氏の分類によるとA型建物群に付隨する屋敷墓といえる。だが、橋田氏が考える「屋敷墓」の成立段階は11世紀にあり、10世紀代のⅠ期集落では古くなる。しかし、三田市の川陰・蘿木遺跡でも10世紀後半の「屋敷」が見つかっているため、10世紀代に「屋敷」が成立していた可能性もある。今後の資料の増加をまってⅠ期集落の墓2が屋敷墓にあたるかどうか判断したい。

#### 参考文献

- 広瀬和雄 1986 「中世の駁動」『岩波講座日本考古学』第6巻  
橋田正徳 1991 「屋敷墓試論」『中近世土器の基礎研究』Ⅶ  
兵庫県教育委員会 1992 『三田市 川陰・蘿木遺跡』第2分冊

第7表 日地区獨立柱建物一覧

| 建物<br>番号 | 規 格                 | 床面積<br>(m <sup>2</sup> ) | 床面構<br>(m <sup>2</sup> ) | 柱 間                 |                 | 柱頭<br>(cm) | 備 考                           |
|----------|---------------------|--------------------------|--------------------------|---------------------|-----------------|------------|-------------------------------|
|          |                     |                          |                          | 柱方向                 | 柱行 (cm)         |            |                               |
| 1        | 3×2 (9m×5m)         | 45                       | N-3°-W                   | 310                 | 240             | 16~20      | 建物13を切る                       |
| 2        | 4×4 (9m×8.5m)       | 76.5                     | N-16°-W                  | 210:220:250         | 180:200:220     | 16~20      | 建物13-15を切る                    |
| 3        | 5×2 (10m×4.4m)      | 44                       | N-30°-W                  | 140:180:200         | 200:240         | 不明         | 建物14-15を切る 調査KEKへ建物が広がる可能性がある |
| 4        | 3×2 (8m×5m)         | 40                       | N-23°-W                  | 200:320             | 220:260         | 小明         | 建物15を切る                       |
| 5        | 4×2 (9m×3.6m)       | 32.4                     | N-24°-W                  | 160:200:220:240:300 | 180             | 不明         |                               |
| 6        | 4×2 (8m×4.2m)       | 35.6                     | N-6°-W                   | 180:240             | 210             | 不明         |                               |
| 7        | 2×2 (5.6m×5.2m)     | 14.6                     | N-72°-E                  | 260:300             | 260             | 不明         |                               |
| 8        | 3×2 (5.4m×4 m)      | 21.6                     | N-20°-W                  | 120:220:180         | 180:220         | 不明         | 建物内に焼土1を検出                    |
| 9        | 4×4 (6.2m×6 m)      | 37.2                     | N-18°-W                  | 100:140:160:180     | 100:120:140:180 | 不明         | 建物内に焼土5を検出                    |
| 10       | 4×2以上 (7m×3.6m以降)   |                          |                          |                     |                 | 不明         | 建物内に焼土6を検出                    |
| 11       | 4×2以上 (7.6m×1 m以降)  |                          | N-4°-W                   |                     |                 | 不明         |                               |
| 12       | 2×2 (3m×3 m)        | 9                        | N-14°-W                  | 150                 | 150             | 不明         |                               |
| 13       | 3×3 (7.4m×6 m)      | 44.4                     | N-1°-W                   | 200:240:260:300     | 200             | 不明         | 建物内に焼土4を検出                    |
| 14       | 2×2 (5.2m×3.8m)     | 19.8                     | N-70°-E                  | 260                 | 180:200         | 小明         |                               |
| 15       | 4×3以上 (10.4m×7 m以上) |                          | N-24°-W                  |                     |                 | 小明         | 建物2・3・4に切られる                  |
| 16       | 3×2 (7m×5.6m)       | 39.2                     | N-15°-W                  | 200:220:260         | 280             | 16         |                               |
| 17       | 3×2 (5.6m×4 m)      | 22.4                     | N-68°-E                  | 180:160:240         | 200:240         | 16         |                               |
| 18       | 2×2 (4 m×4 m)       | 16                       | N-25°-W                  | 200                 | 200             | 不明         | 1本の柱穴で礫石を検出                   |
| 19       | 2×2 (4 m×2.6m)      | 10.4                     | N-82°-E                  | 160:240             | 130             | 不明         |                               |
| 20       | 3×2 (3.8m×2.4m)     | 9.1                      | N-55°-E                  | 120                 | 120             | 不明         | 2本の柱穴で礫石を検出                   |

柱で長さの違う建物は柱通りの長い邊で長さを算出し面積を計算しました。

### 第3節 和鏡の検討

和鏡は、日本で作られた日本的な意匠をもつ鏡として、12世紀の初めごろに完成したといわれている。それまでの船載鏡あるいは彷彿鏡とは区別され、平安時代以降、次第に「松・山吹・蘿・菊など日本の自然風物の中にみられる草花や樹木」や「写実的な尾長鳥・鶴・鷦鷯・雁・雀などの親しみやすい鳥」が鏡背に描かれ、文様において日本風に変化・発展していったものと考えられている。鋳造技法についても、11世紀ごろを境にして、金属製の鋳用いて生乾きの土型に文様を押し描く「範押し技法」が主流となり、文様を全く同じにする同範鏡が存在しない一鏡一面が和鏡の特徴である。このため、生産あるいは流通の実態がつかみにくいといわれる和鏡であるが、ここでは薬師前遺跡C-1区の経塚遺構より出土した「梅樹双鳥文鏡」(以下、C-1区出土和鏡あるいは和鏡)について出来る限り記述し、その実態について考えてみたい。また、これまでに但馬地域より出土した和鏡の一覧(第8表)を掲載し、C-1区出土和鏡の特徴を指摘したい。

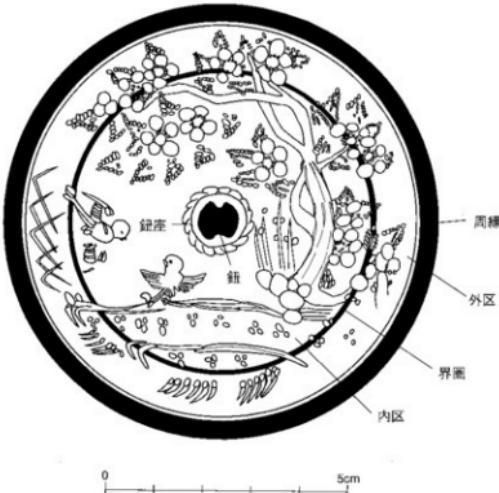
#### C-1区出土和鏡について

C-1区出土和鏡(M52 挿図77・96)は、集石遺構1の内円石列の壺(381)の中から鏡背面を上にした状態で発見された。第5章 第2節でも述べたように、壺(381)は、内円石列内部の土坑に当初据えられていた位置をとどめておらず、上半部が著しく破壊されていた。このため、和鏡は経簡外容器と考えられる壺内部に埋納された当時の状態で出土したとは言い難いが、集石遺構1にともなう遺物と考えられる。

和鏡は、面径8.9cm、面厚約2mm、周縁幅約4mm、周縁高約4mm、紐径約7mm、紐高約2.5mm、反り約1mm、総重量76.4gを測るものである。銅(Cu)と錫(Sn)を主成分とし、これに鉛(Pb)を含む青銅製であることが、鏡の成分分析(詳細は第6章 第3節)により判明している。鏡面には、現在の針のような鋭利な先っ先で表面を擦ったと考えられる細い直線状の傷跡が無数に確認されているが、その原因および意図は不明である<sup>10</sup>。

鏡背には、州浜に花の咲き誇る梅の木や2羽の鳥が描かれ、「梅樹双鳥文鏡」と呼ばれるものである。文様の構図についてさらに観察してみると、鏡背のおよそ1/3下部の内区および外区<sup>11</sup>にかけては、2本の直線的な線で州浜を表現し、3つの点で下草を表している。その下方には、空白を埋めるための可能性も考えられるが、「ノ」の字に似た線を並べた文様が描かれ、左外区には、「く」の字を組み合わせたような幾何学的な線を描き、水や波を表現しているように思われる。州浜上には、紐の右下から太い樹木が直立し、左上方へと伸びている幹が描かれていることから梅樹と考えられ、左上方へ伸びる枝および右外区には、山吹に似た葉と花が全面の半分を占める範囲に生い茂っている。紐の左下および左側には、羽を広げた鳥と、羽を豊んだ2羽の鳥が向かい合っており、全体的に安定した文様構成といえる。この他、紐座は太くなった振葉座であり、花蕊座との折衷様式である。また、写真および拓本でもわずかに確認されるが、鏡背のほぼ真下の周縁外側のおよそ2.5cm程が他の部分より若干削られて、幅が狭くなっている。これは、鋳造時に流し込んだ余分な溶銅を削りとる際、削り過ぎたものと考えられ、直下の文様(「ノ」の字に似た線を並べた文様と2本の直線的な線で表現された州浜の右端)が他の部分に較べて鮮明でないことと併せて、いわゆる湯口にあたると考えられる。

鏡背に描かれた文様には、州浜を表現する線が直線的であることや2羽の鳥の尻尾が長いことなどの特徴が挙げられ、12世紀後半の和鏡にみられる要素が認められる。これは、界隈が1条で細く、界隈に



第96図 「梅樹双鳥文鏡」復元図

とらわれずに鏡背全面に文様が描かれていることや、周縁の立ち上がりの外反が顕著な点、さらに界画を境に内区よりも外区のほうが面厚であることなどの鏡の形態的な特徴から<sup>16</sup>も指摘される。しかし、その一方で、鉢が大きく、その断面が低い半円形を呈することや鉢の穴が形骸化しつつあること、捩菊座に退化がみられることなどの13世紀前半にみられる特徴も併せもっている。このため、C-1区出土和鏡は、12世紀後半から13世紀前半に製作されたものと考えられる。

近年、和鏡を鋳造した遺跡が全国各地で数多く発掘され、古代（7世紀）から近世（19世紀）におよぶ各時期の調査成果が報告されている。平安京左京八条三坊の調査では、多量の和鏡鋳型が出土しており、そのうち、六町の室町小路衛で検出されたSK332出土の和鏡鋳型やフイゴ羽口・堀端片などは、共伴した土器群から13世紀前半の年代が与えられている。また、鋳型から判明する鏡の直径はすべて8cm前後とされ、小型和鏡を多く生産していたと推定されている<sup>17</sup>。12世紀後半から13世紀前半頃の鋳造遺跡は、現在ではこの他に確認されていないが、C-1区出土和鏡が製作されたとされる時期と重複し、直径8cm前後の鏡が鋳造されていたことなどから、平安京左京八条三坊六町において、C-1区出土和鏡が鋳造された可能性が高いと考えられる。しかし、六町のSK332より出土した鋳型（「真土（マネ）」）に残存していた鏡背面の文様は、「内区が菊花散文や亀甲地文で界画外区には網代文を巡らす」ものであり<sup>18</sup>、文様構成上、意匠および構図の同一性と、周縁の断面形や鉢・鉢座など鏡の形態的な特徴などについての共通性が確認しえないことから、より具体的あるいは断定的なことは言及できないが、今後の資料の増加を期待したい。

#### 但馬地域出土の和鏡について

兵庫県の北部に位置する但馬地域（旧但馬国）では、これまでに17の地点から23面の和鏡が出土している（第8表）。兵庫県内ではこれまでに60面以上の和鏡が出土あるいは発見されているが、但馬地域

より出土した和鏡がそのおよそ4割を占めている。但し、表に記載したうち、5面は現在、所在不明となっており、その他のものについても、発見時の状況や鏡面の文様、製作時期など不明なものが多くみられる。そのような中で、出土状況や鏡の文様および製作時期、さらに鑄造造構などについて言及することができた薬師前遺跡C-1区出土和鏡は貴重な資料であり、今後さらに資料が追加され、再検討を行っていく過程で、鑄造造構あるいは流通経路などの解明が進んでいくものと期待される。

第8表 但馬地域出土の和鏡一覧

| 遺跡名(出土地名)   | 所 在 地          | 鏡 名   | 直 径<br>(cm)                         | 時 期           | そ の 他                                  |
|-------------|----------------|---|-------------------------------------|---------------|--|
| 薬師前遺跡       | 朝来郡朝来町元津       | 「梅樹双鳥文鏡」  | 8.9                                 | 平安後期～<br>鎌倉初頭 | 本書収録                                   |
| 桃原遺跡        | 朝来郡和田山町筒江      | 不明  | 不明                                  | 不明            | 現在、所在不明                                |
| 新宮山経塚・中世墓群  | 美父郡美父町十二所      | 「菊花双雀鏡」   | 9.0                                 | 平安後期          | 3号経塚より出土                               |
| 八木・殿屋敷遺跡    | 美父郡八鹿町八木       | 「菊花双鳥鏡」   | 9.2                                 | 鎌倉初頭          | 確認トレンチより出土<br>(中世墓か)                   |
| (大生郡兵主神社出土) | 出石郡但東町薬王寺      | 「山吹雙雀鏡」   | 8.1                                 | 平安後期          | 境内拝殿工事中、神社本殿東の尾根筋より発見                  |
| (清濱神社出土)    | 出石郡但東町栗尾       | 不明  | 不明                                  | 平安後期か         | 境内拝殿工事中、神社裏手より発見<br>現在、所在不明            |
| 後夷山経塚       | 出石郡但東町後        | 「松樹双鏡鏡」   | 11.1                                | 不明            |  |
| (山宮出土)      | 城崎郡日高町山宮       | 「菊花散双鶴鏡」<br>「菊双雀鏡」                              | 11.0<br>10.1                        | ともに室町<br>後期   | 炭焼き窯開掘中、2面出土                           |
| 椎原遺跡        | 城崎郡日高町府市場      | 「唐草文双鳥鏡」  | 10.1                                | 平安後期          | 山陰線付設工事に際し、<br>水田より発見                  |
| (福布ヶ森出土)    | 城崎郡日高町<br>福布ヶ森 | 「龜甲地双雀鏡」<br>「松樹双雀鏡」                             | 11.8<br>9.6                         | 室町後半<br>室町中葉  | 山林内の墓地より2面出土<br>(一説に祠の御神体ともいわれる)       |
| (鷹音寺出土)     | 城崎郡日高町鷹音寺      | 「亀甲經松枝双雀鏡」                                      | 不明                                  | 不明            | 金銅仏と共伴                                 |
| 馬場ヶ先古墳      | 城崎郡日高町鷹岡       | 不明  | 不明                                  | 不明            | 現在、所在不明                                |
| (金剛寺出土)     | 豊岡市金剛寺         | 「蓮葉鏡」   | 11.4                                | 室町初期          | 発見状況不明                                 |
| 宝塚遺跡        | 豊岡市氣比          | 不明  | 不明<br>不明                            | ともに不明         | 経筒と共伴2面出土<br>現在、所在不明                   |
| (法花寺出土)     | 豊岡市法花寺         | 「菊花双鳥文鏡」  | 11.1                                | 不明            | 個人蔵                                    |
| (官井出土)      | 豊岡市官井          | 不明  | 11.4                                | 不明            | 官井神社付近より発見                             |
| 松村3号墳       | 美方郡浜坂町田井       | 「菊花文鏡」<br>「草花双鳥蝶文鏡」<br>「梅花文鏡」<br>文様不鮮明<br>文様不鮮明 | 11.2<br>10.4<br>11.6<br>9.7<br>10.8 | すべて平安<br>後期   | 3号古墳地下約1mの<br>経塚より経筒と共伴<br>5面出土<br>個人蔵 |

## 注

- (1) 鏡の成分分析の指導と助言を得た肥塙隆保氏にも実見して頂いたが、詳細は不明である。このため、県教育委員会が調査し、現在所蔵している和鏡9面を実見した結果、龍野城跡出土和鏡（菊花双鶴鏡 17世紀前半）の鏡面に傷跡が確認された。しかし、傷跡の線が太く調査時あるいは遺物取り上げ時に付いた可能性が高く、C-1区出土和鏡の傷跡とは異質のものと考えられる。
- 『兵庫県埋蔵文化財調査年報』昭和58年度（新宮山経塚・中社墓群）1986.『上板井古墳群』1986.『沢の浦古墳群』1987.『多利遺跡群』1987.『龍野城』1990.『年報』平成7年度（上盛遺跡・芝崎遺跡）1996.『年報』平成8年度（宿原寺ノ下遺跡・兵庫津遺跡）1997.以上、兵庫県教育委員会
- (2) 摘図96参照。和鏡の各部位の名称は、久保智康『日本の美術 第394号 中世・近世の鏡』1999 至文堂 他による。
- (3) 久保智康氏より、「周縁の立ち上がりの外反が顯著な点や、界面を境に内区より外区が面厚であることなどから、12世紀の第4四半期、さらに年代を限定すれば1190年以降に製作された可能性が高いと考えられる」とのご教示を頂いた。
- (4) 綱 伸也 「和鏡鑄造の復元的考察—左京八条三坊町・六町出土例を中心に—」『研究紀要』第3号 1996 京都市埋蔵文化財研究所
- (5) 「六町の室町小路側と三町の発掘調査において、多量の和鏡鑄型が出土している。その構造は土台となる円形土製品の上に細かい土を塗り成形したもので、前者を「粗型（アラガタ）」、後者を「真土（マネ）」と呼ぶ。出土鑄型はほとんどが粗型であるが、真土が良好に残存し鏡背面の文様や縁部あるいは鏡面の様相が判明する例も多く出土している。」注（4）と同じ。

## 上記記載以外の参考文献

- 中野政樹編 『日本の美術 第42号 和鏡』 1969 至文堂
- 広瀬都賀 『和鏡の研究』 1974 角川書店
- 前田洋子 『和鏡の変遷』 考古学ジャーナル No.185 1981
- 『日本の古鏡一女装美のプロデューサー』 1985 大阪市立博物館
- 久保智康 『平安後期出土鏡の研究序説』 『東アジアの考古と歴史』下 岡崎敬先生追憶記念論集 1987
- 『浜坂町史』 浜坂町役場 1967
- 『特別地域遺跡埋蔵文化財 遺跡分布地図及び地名表』 第9集 兵庫県教育委員会 1974
- 樋木誠一 『但馬の和鏡（1）』 兵庫考古 第3号 1978
- 『但馬の和鏡（2）（3）』 兵庫考古 第5号 1979
- 『但馬の和鏡（4）』 兵庫考古 第6号 1979
- 『日高町史』 資料編 日高町教育委員会 1980
- 『出石郡』 兵庫県立歴史博物館総合調査報告書IV 兵庫県立歴史博物館 1993
- 『八木御里遺跡』 八鹿町教育委員会 2001

## 第4節 元津周辺のこと

薬師前遺跡がある元津の集落には中世末期から近世にかけて、石見の大森銀山から鉱山師を招き生野銀山の精錬を行った伝承が残される。実際、集落周囲や遺跡周辺には鉄滓が多く散布し、現在の薬師堂の仏壇脇には周囲から拾われてきた鉄滓が奉納されている。この鉄滓は拾って奉納すると耳が聞こえるようになる御利益があるといわれていることから、付近の人々が薬師堂に願をかける際に持ち込んだものである。

今回の薬師前遺跡の成果からすると遺跡周辺の成立は古代に遡ることがあきらかとなった。今のところ、古代にさかのぼる伝承はないが、遺跡周辺が古くから開発された事実を裏付けるように地元には多くの伝承が残されている。

現在、元津の集落は遺跡の東側、川の対岸にのみ存在するが、調査の結果から明らかのように、近世以前にも集落や煮芋建築が存在したことが明らかとなった。さらに、江戸期の絵図や伝承にも遺跡周辺に家が建ち、集落の一部だったことがいわれている。そして、B地区周辺の字が「屋敷」と呼ばれているのもこの由来によると地元では言い伝えている。

しかし、近代に見舞われた大規模な土砂崩れの経験から、すべての家が東側に移転し、宅地は水田・畠地となり現在では薬師堂の建物と数カ所の墓地を残すのみとなったという。

### 【参考資料】

薬師堂本尊は薬師如来像の後背の墨書きによれば貞享4年（1687年）と記されている。一見すると仏像は何度かの修復箇所が確認されるため、この年号の当時とは姿が異なると思われる。

#### 『薬師堂の棟札』

上田貞一

昭和26年4月12日 世話人 横本信太郎

薬師如来開眼參百年祭 嶽峨山松藏

業字改築 標上式 嶽峨山和市

執行 鴎谷幾蔵 熊見菊太郎

大工 西垣晴男 嶽峨山盛治 西垣勘之助

嵯峨山金太郎 古川肇

西垣貞一

大友龟右エ門

嵯峨山・雄さんのよりの聞き書きを以下に列記する。（採取は平成8年4月）

① 昔薬師さんは、七堂伽藍が立ち並んでいたといいます。

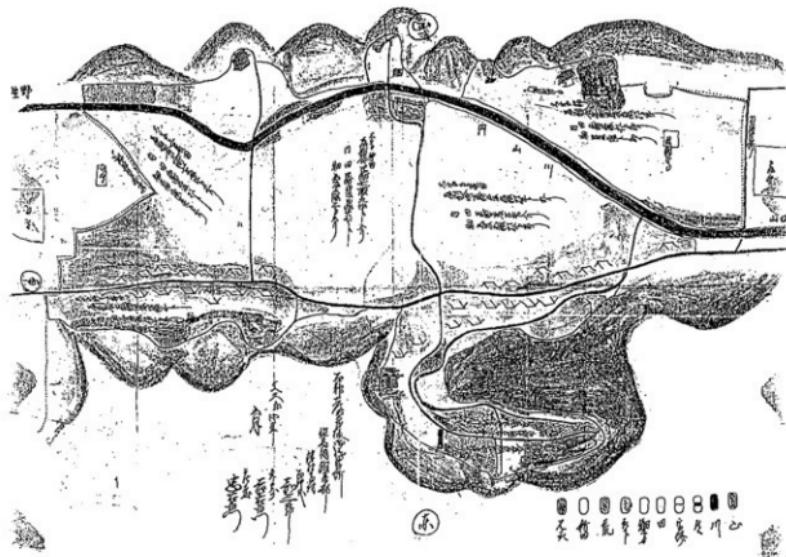
② 三つ葉葵の其の下に、マツビタ三枚、かい縄千束がある。（注、三つ葉葵とは、昔どこでも団炉裏で使っていた3本足の金具（五徳か）でできた、鍋・茶瓶など火の上にかけた道具。マツビタ（小判）が千両箱3箱分、かい縄千束は繩銭が千束（千貫文）に通してあり、1束は大人の両手を広げた20回分）

③ 昔、向山山頂付近から大崩落があって薬師堂もおしながされた。

④ この大崩落を下津の人は、ズエヌケと呼んでいた。其の頃、下津の家は7軒、現在の屋敷という地名の

ところにあったそうです。この大崩落で円山川は堰き止められて、円山の酒呑宮さんまでのまれたと聞かされた。

- ⑤ 以前の円山川は、伊谷の古川に見るよう、西の方を流れていたと思われ、保尾野の通学路付近でも、いまも通学路付近に川石が多くある。
  - ⑥ 再建された薬師堂に祭ってあった金佛（仏像）が、泥棒に盗まれた。泥棒は、三日三晩お堂の周りを廻らされていたが、村人が誰もお参りしないので、西の方に背負われてゆくが、津村子の方を見守ってやると言ふ夢みせがあったとか。
  - ⑦ 其のときに代わりに造って祭ったのが、今もある石佛（仏像）さんであります。
  - ⑧ 堂山に古い時代には尼寺があったと聞いています。
  - ⑨ 私の家のお墓に参る左手の田圃（通学路から上がった処で、嵯峨山あつ子さん宅）、昔開墾をされた時、私のおじさんは子供の頃だそうですが、手伝いにいて掘り上げた金環が、直径4cm位で（現在も嵯峨山家で保管されている）一説では、お寺さんの袈裟の先についていた金具ではないかとの事。
  - ⑩ 昔から薬師如来さんは、首から上の悪い處や病気を良く治して下さると言うことで、特に耳の悪い人など、通り抜けの穴があいた石（鉄津）を持って願掛けを多くの方がされた。この石が、お厨子さんの横に山積されております。一方薬師さんはを銷薬師と呼んで、近くの他部落の人もよくお参りされていました。銷をたてて願掛けをしたひともあったと聞いています。



第97図 元津の村繪図（文久2年）

# 写真図版



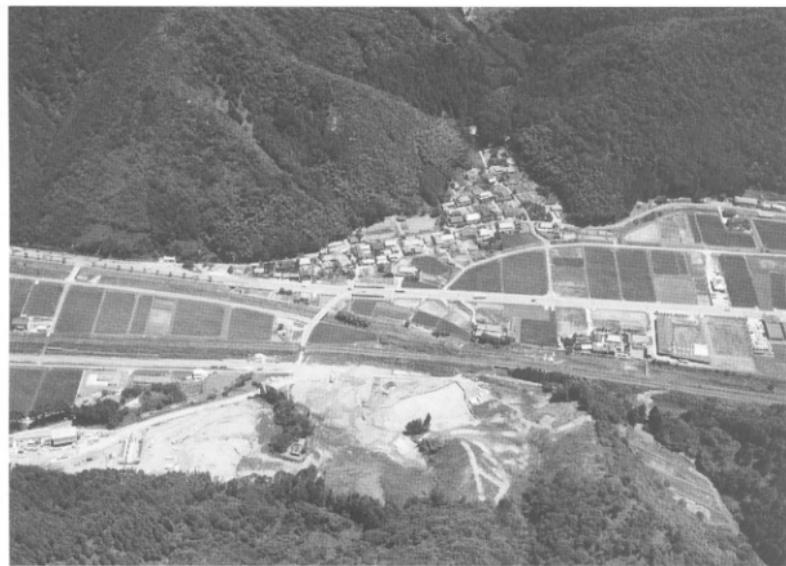
(北から)



(南から)



(北東上空から)



(西から)



調査前の遺跡（北から）



調査中の遺跡（北から）



調査区全景（南から）



(北から)



(南から)



(西から)



(東から)



全景（真上から）



全景（真上から）



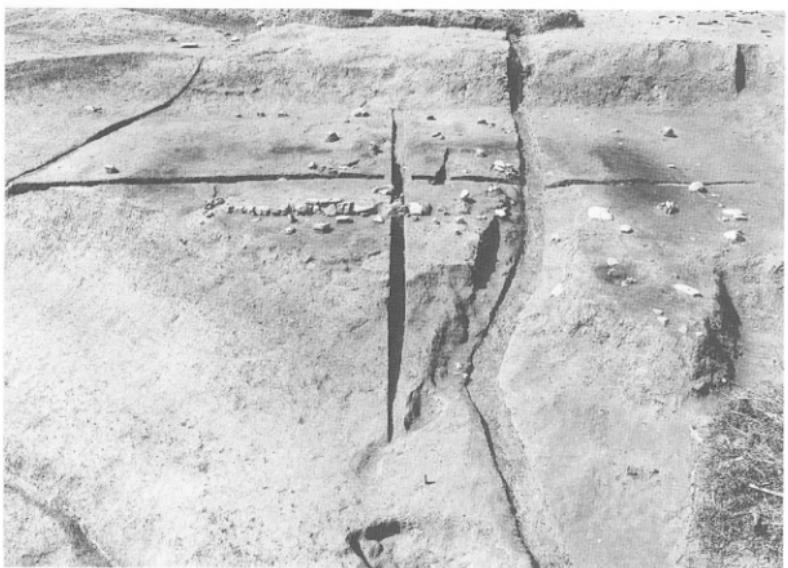
全景（南から）



薬師堂・壇状遺構全景（南から）



SB 1 上面（東から）



SB 1 上面（東から）



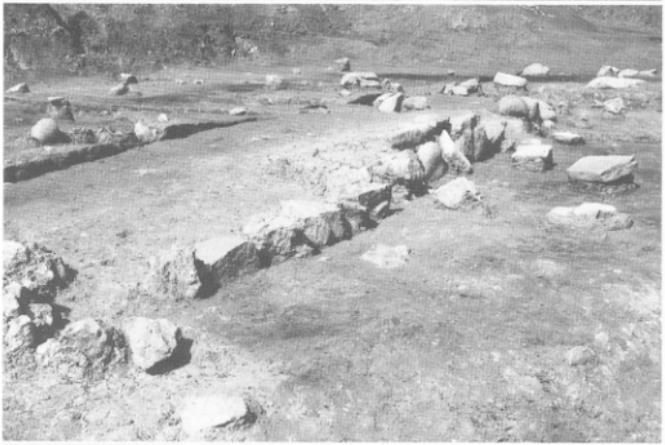
SB 1 上面（西から）



SB 1 上面（南から）



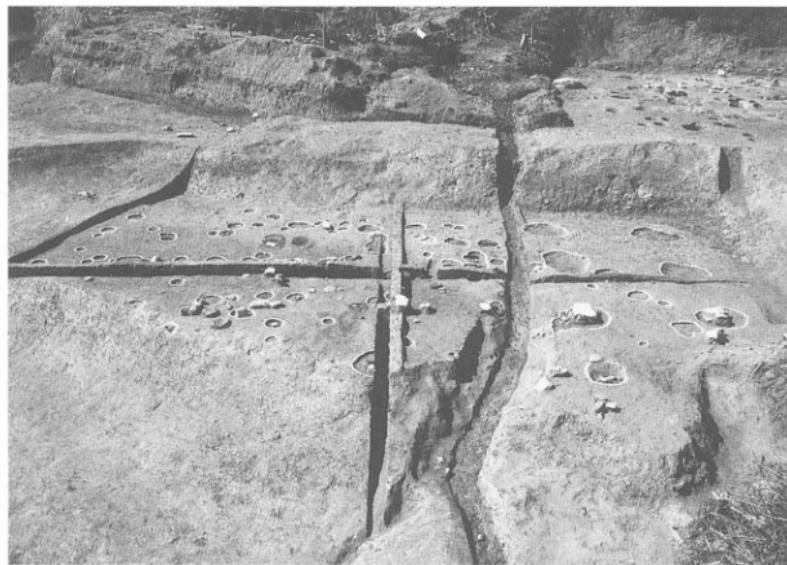
SB 1 (南から)



SB 1 須弥壇近景  
(南東から)



SB 1 須弥壇近景  
(東から)



SB 1 完掘（東から）



SB 1 完掘（西から）



SB 1 P205 (南から)



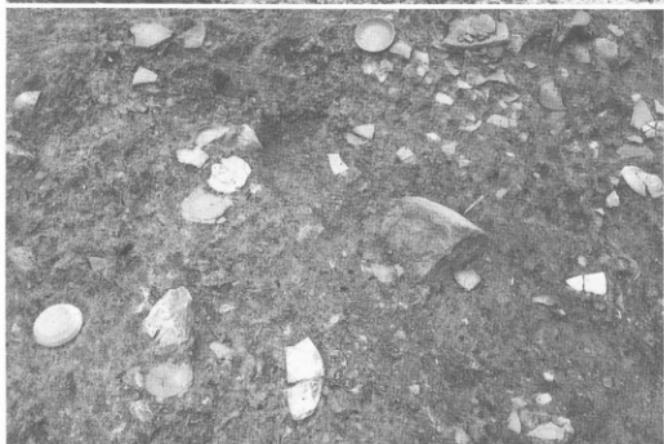
SB 1 瓦質土器壺出土状況  
(東から)



SB 1 炭層断面  
(東から)



SB 1 上面焼土層  
(北から)



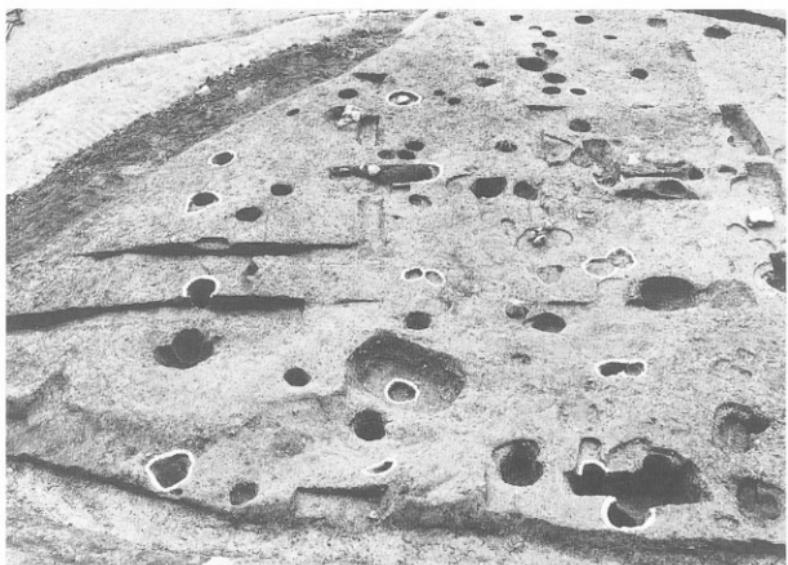
SB 1 上面焼土層  
(西から)



SB 1 埋納遺物出土状況  
(南から)



第2面検出状況（東から）



第3面検出状況（北から）



炉245・焼土（西から）



炉238・239（南から）



炉283（南から）



礎石311（東から）



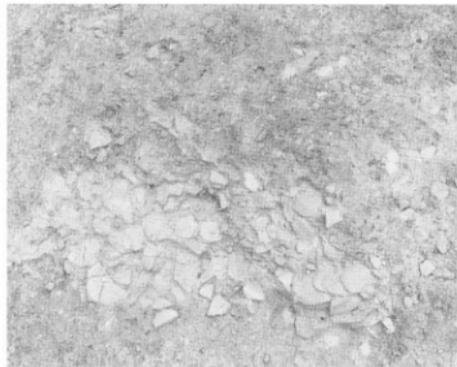
炉260（東から）



全景（北西から）



全景（南から）



土器溜り（南から）



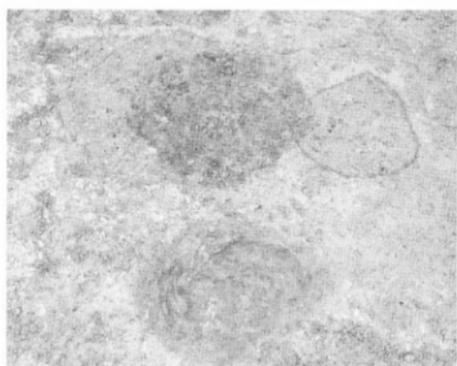
P144（東から）



SB 7 P49（北から）



SB 8 碓石（南から）



炉117・118（東から）



SB 6 碓石（東から）



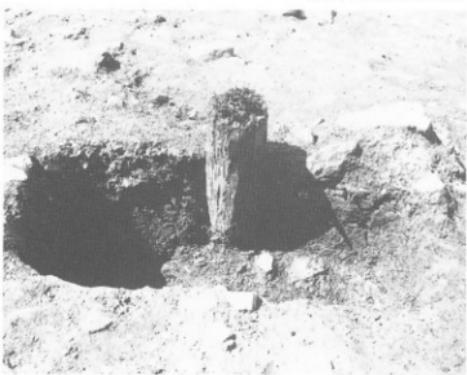
SB10 (東から)



SB10P160 (西から)



SB10P162 (西から)



SB10P164 (東から)



全景（東から）



SB11（東から）



全景（南から）



全景（東から）



全景（北から）



全景（西から）



上層全景（北から）



上層全景（南から）



上層全景（南西から）



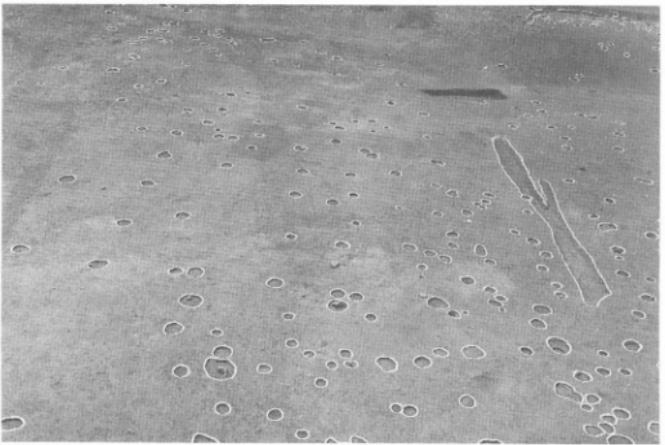
下層全景（北から）



下層全景（南から）



下層全景（西から）



SB1・2 (4・6区)  
(東から)

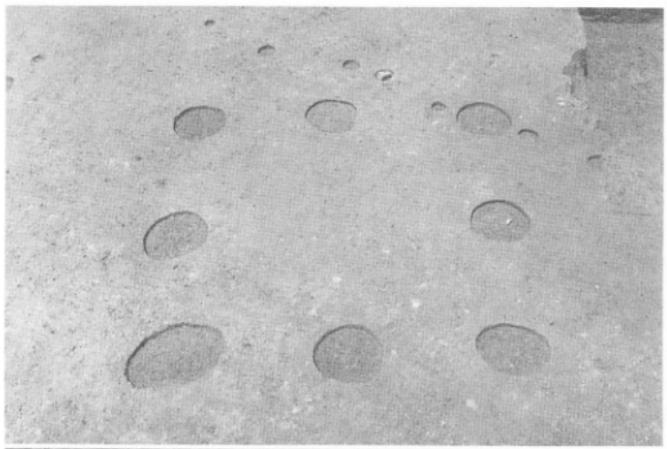


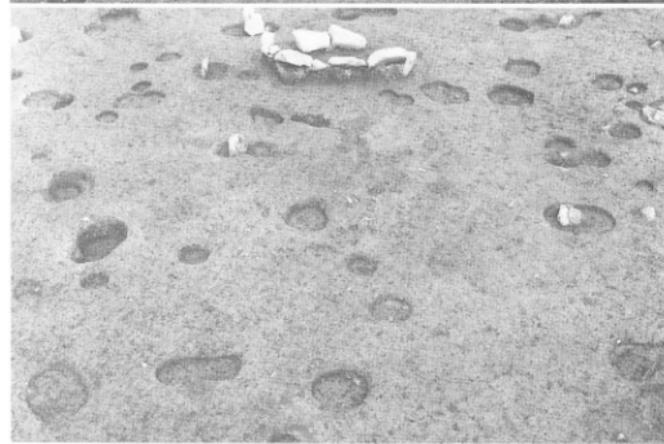
SB3～5 (6区)  
(南から)



SB6・7 (7～9区)  
(東から)

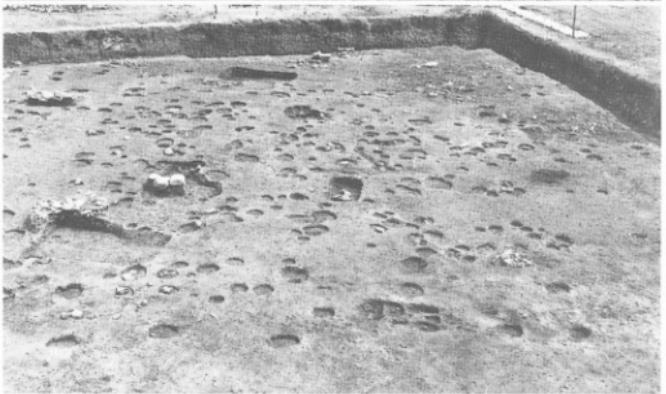








SB18 (拡張区)  
(南から)



SB19・20 (拡張区)  
(西から)



拡張区全景  
(北から)



墓1（南から）



墓1完掘状況（南から）



墓1完掘状況（西から）



墓2（北から）



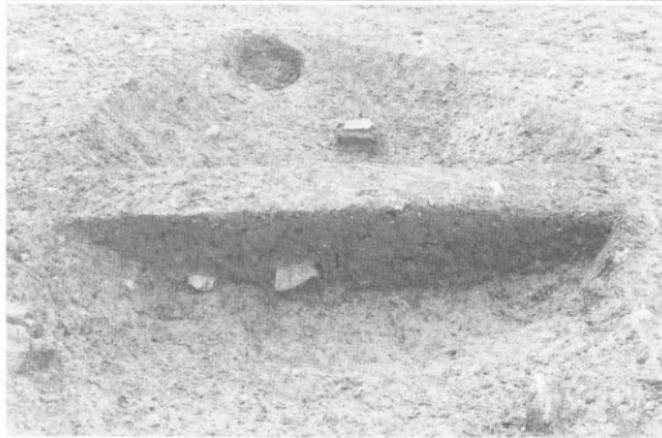
墓2（東から）



SX1 (東から)



SK1526 (東から)



SK340 (東から)